有田・小田部

第 30 集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第547集

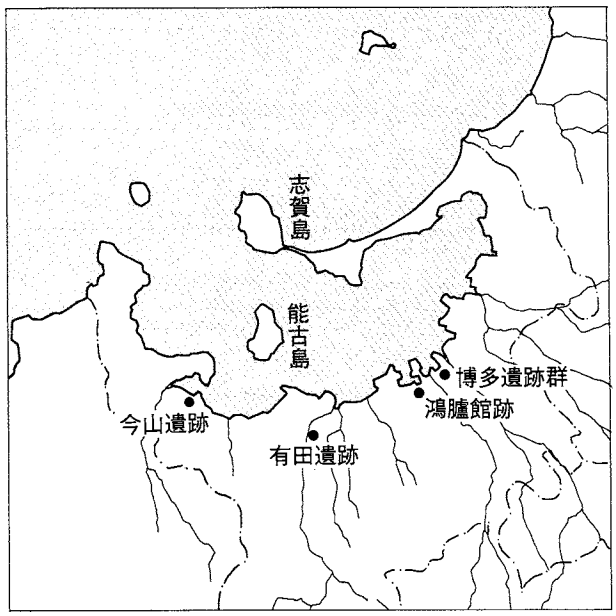
1998

福岡市教育委員会

有田・小田部

第 30 集

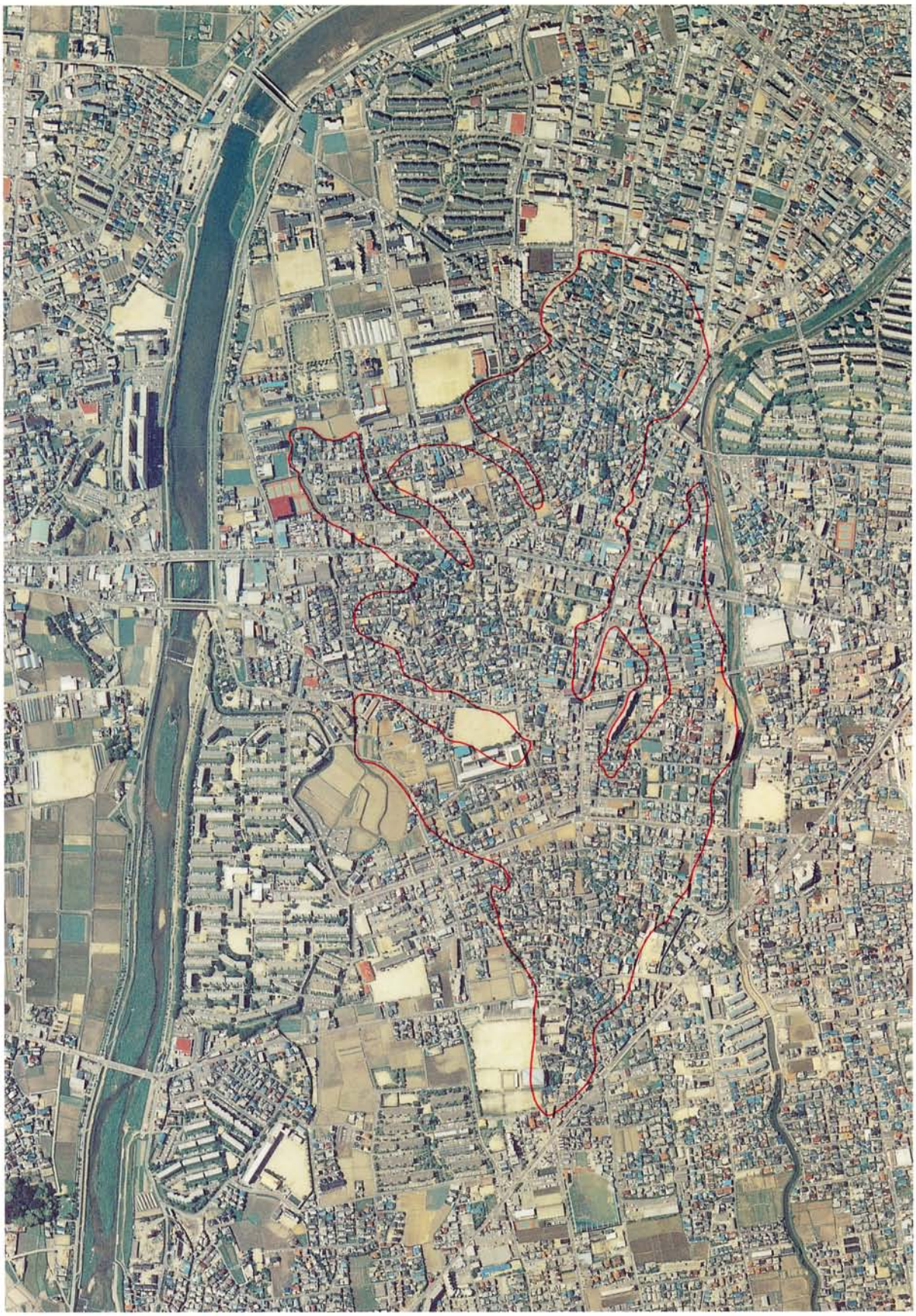
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第547集



1998

福岡市教育委員会

調査番号　8308
調査略号　ART-80



有田・小田部周辺航空写真（平成５年撮影）

※写真掲載については国土地理院の許可を得た。

第80次調査 全景（西から）

竪穴住居跡SC01（北東から）

弥生時代 貯蔵穴SU06内土器出土状態（南から）

火葬墓SX02敷石出土状態（西から）

土壙墓SX01（南東から）

土壙墓SX01内遺物出土状態（南西から）

序　文

玄界灘に面した福岡市は、豊かな自然環境と歴史的な遺産に恵まれています。しかし、近年の福岡市は著しい都市化によってその姿を変貌しつつあります。

福岡市教育委員会では、市域内における各種の開発事業に伴い、失なわれゆく埋蔵文化財の保存と保護措置に努めているところでもあります。

福岡市の西部に位置する早良平野は、大陸との交流の中で古くから栄え、遺跡も多く存在している地域ですが、都市の市街地化の拡大と共に、都市基盤の整備がすすめられ、これに伴い埋蔵文化財の発掘調査も増加しているところでもあります。

この中でも有田遺跡は、「有田・小田部」と呼ばれる台地上に立地し、最も古くから遺跡が存在する地域です。従来の発掘調査では旧石器時代から江戸時代までの重要な遺構・遺物を発見しており、特に弥生時代はじめの環濠は、板付遺跡に匹敵するもので、早良平野における弥生時代の始まりと稲作の状況を知る重要な資料となっています。

本書は昭和58年度に発掘調査を行った有田遺跡第80次調査の成果について報告するものです。

今回の発掘調査では、弥生時代前期の貯蔵穴や住居跡、古墳時代の溝、中世の土壙墓・火葬墓・掘立柱建物などの遺構を発見しました。これらの遺構とその出土遺物は早良平野における弥生時代から戦国時代までの歴史的な事件・事実を知る重要な手懸かりになるものと考えられます。

本書が、市民の埋蔵文化財保護に対するご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてご活用頂ければ幸いに存じます。

平成10年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　町田　英俊

例　言

(1) 本書は、福岡市早良区有田・小田部・南庄地域内における住宅開発に伴い、福岡市教育委員会が昭和58年度において国庫補助を得て実施した緊急発掘調査報告書である。

(2) 本書には、昭和58年度に実施した第80次調査について収録する。

(3) 本書では、有田・小田部台地上の遺跡を一連のものと見做し、広義の有田遺跡と呼称する。

(4) 発掘調査は、松村道博、井澤洋一が担当した。

(5) 本書に掲載した遺構実測は、松村、井澤、谷沢仁、清原ユリ子、金子由利子、庄野崎ヒデ子、砥綿千江子が行った。

(6) 本書に掲載した遺物実測図は、廣嵜香が主に実測した。 石器については器械実測を行い、池田孝弘、牛房綾子が担当した。

(7) 遺構・遺物の製図は、主に廣嵜、牛房が行い、石器の製図は、井澤が担当した。

(8) 遺構の写真撮影は、松村、井澤が分担して行い、遺物の撮影は、渋谷博之、牛房が行った。

(9) 本書に掲載する遺構・遺物一覧表は、廣嵜が主に行い、吉田扶希子、牛房が補足作成した。

(10) 本書作成にあたっては、上笹貫久美子、西口キミ子、福田小菊、多田映子、田中昭子の協力を得た。

(11) 遺構番号は、発掘調査中に於いて便宜的に遺構一覧表 Tab. 2 に示すように、遺構の種類によって、溝＝M、土壙＝D、住居跡＝J等の記号を用いたが、整理作業の段階において正式な遺構略号を遺構番号の頭に付けた。

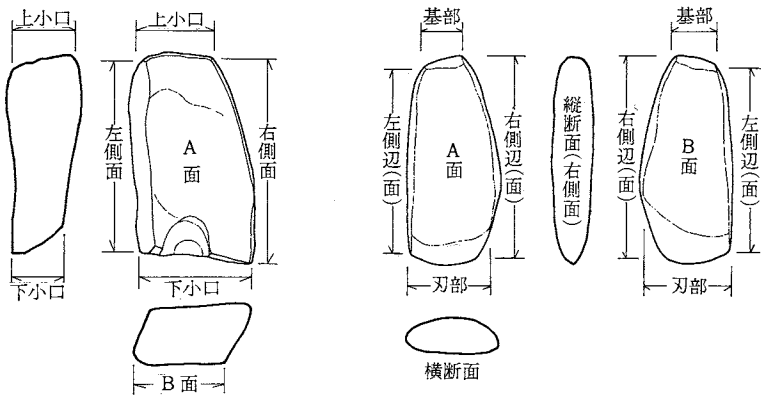
遺構略号として用いたのはＳＣ（住居跡）、ＳＫ（土壙）、ＳＵ（貯蔵穴）、ＳＸ（土壙墓・火葬墓）、ＳＢ（掘立柱建物）、ＳＤ（溝）、ＳＰ（小穴）である。

(12) 本書の遺物番号は、遺構の種類毎に通し番号で示し、挿図・図版の遺物番号に一致させている。

(13) 本書に用いた方位は、磁北である。

(14) 本報告にかかわる図面・写真・遺物などの一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。

(15) 本書の執筆は、井澤が担当し、編集は各調査員の協力のもと井澤が行った。



本　文　目　次

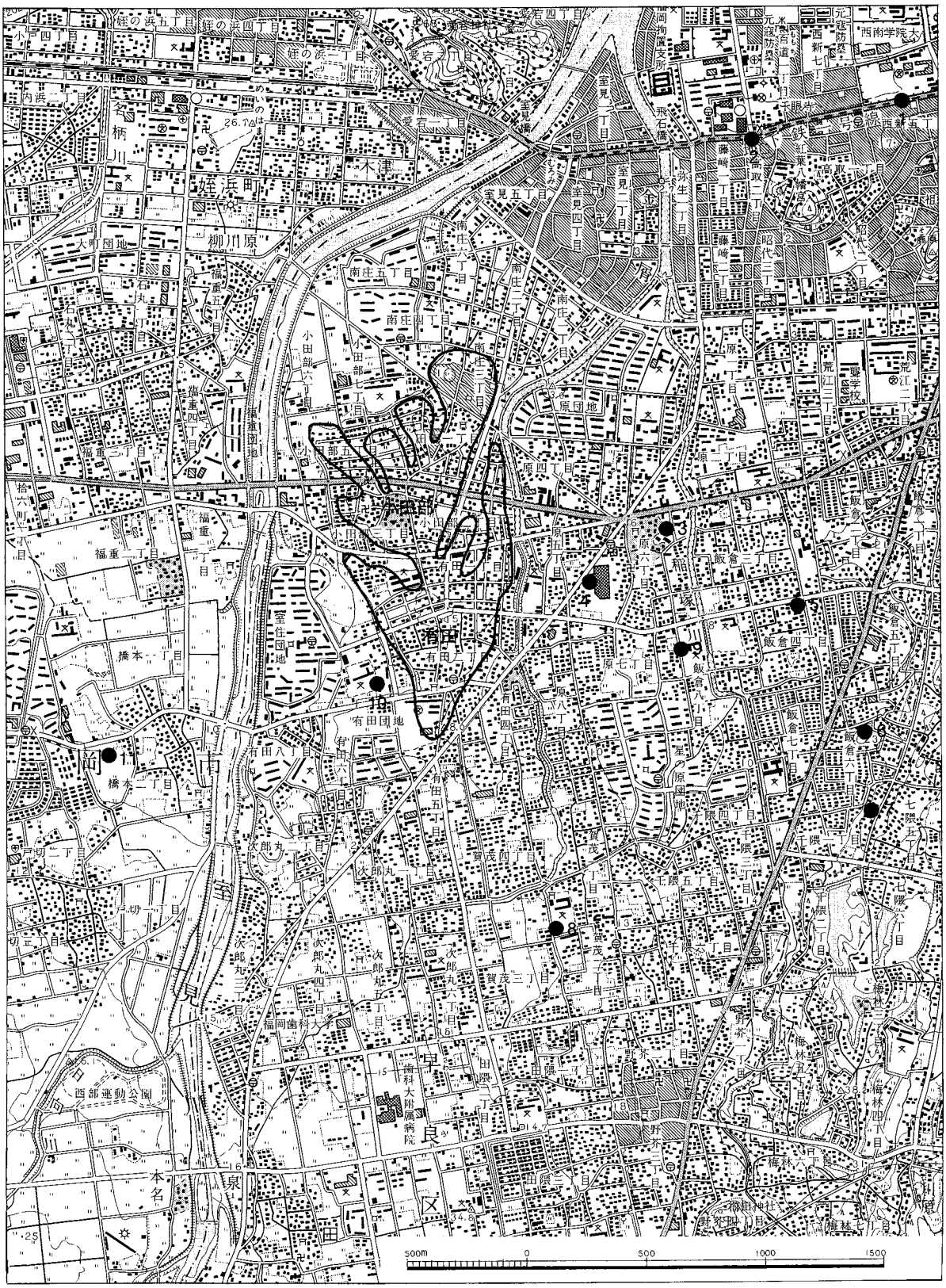
第１章　はじめに……1
　１．調査に至る経過……1
　２．発掘調査組織……1
　　(1)　昭和58年度の調査組織（第80次調査）……1
　　(2)　平成９年度資料整理……2
第２章　有田・小田部の歴史……7
　１．立地・歴史的環境……7
　２．文献資料……7
第３章　第80次調査……8
　１．地形と概要……8
　　(1)　立地……8
　　(2)　概要……11
　２．遺構・遺物説明……12
　　(1)　住居跡（SC）……12
　　(2)　住居跡出土遺物……18
　　(3)　土壙（SK）……21
　　(4)　貯蔵穴（SU）……23
　　(5)　貯蔵穴出土遺物……29
　　(6)　土壙墓（SX）……37
　　(7)　土壙墓出土遺物……37
　　(8)　火葬墓（SX）……38
　　(9)　火葬墓出土遺物……44
　　(10)　掘立柱建物（SB）……44
　　(11)　溝（SD）……53
　　(12)　溝出土遺物……56
　　(13)　Pit（SP）、表土出土遺物……56
　３．まとめ……57

挿　図　目　次

Fig. 1　有田・小田部周辺の遺跡（縮尺1／25,000）……V
Fig. 2　有田・小田部台地と発掘調査地点（縮尺1／8,000）……3
Fig. 3　発掘調査地点位置図（縮尺1／8,000）……4
Fig. 4　第80次調査地点周辺図（縮尺1／800）……8
Fig. 5　第80次調査遺構配置図（縮尺1／200）……10
Fig. 6　第80次調査住居跡配置図（縮尺1／300）……12
Fig. 7　住居跡SC01・02実測図（縮尺1／80）……13
Fig. 8　住居跡SC05・07実測図（縮尺1／40）……16
Fig. 9　住居跡SC01出土遺物実測図（縮尺1／3）……19
Fig. 10　住居跡SC02・05・07出土遺物実測図（縮尺1／1・1／3）……20
Fig. 11　第80次調査土壙、貯蔵穴配置図（縮尺1／300）……22
Fig. 12　土壙SK13実測図（縮尺1／40）……22
Fig. 13　貯蔵穴SU04・06・08実測図（縮尺1／40）……24
Fig. 14　貯蔵穴SU09・10実測図（縮尺1／40）……27
Fig. 15　貯蔵穴SU11・12実測図（縮尺1／30・1／40）……31
Fig. 16　貯蔵穴SU04・06・08～10出土遺物実測図（縮尺1／3）……34
Fig. 17　貯蔵穴SU11・12出土遺物実測図（縮尺1／3）……35
Fig. 18　第80次調査土壙墓、火葬墓配置図（縮尺1／300）……38
Fig. 19　土壙墓SX01、火葬墓SX02・03実測図（縮尺1／20）……39
Fig. 20　土壙墓SX01、火葬墓SX02出土遺物実測図（縮尺1／3）……43
Fig. 21　第80次調査掘立柱建物配置図（縮尺1／300）……44
Fig. 22　掘立柱建物SB01・02実測図（縮尺1／80）……45
Fig. 23　掘立柱建物SB03～07実測図（縮尺1／80）……48
Fig. 24　掘立柱建物SB08～10実測図（縮尺1／80）……49
Fig. 25　掘立柱建物SB11～13実測図（縮尺1／80）……50
Fig. 26　第80次調査溝配置図（縮尺1／300）……53
Fig. 27　溝SD01～03断面実測図（縮尺1／40）……54
Fig. 28　溝SD01出土遺物実測図（縮尺1／3）……55
Fig. 29　Pit、表土出土遺物実測図（縮尺1／1・1／3）……56
Fig. 30　有田遺跡第4・48・80次調査遺構配置図（縮尺1／600）……59

表　目　次

Tab. 1　第80次調査掘立柱建物一覧表……52
Tab. 2　第80次調査遺構一覧表……60
Tab. 3　第80次調査遺物一覧表……61
Tab. 4　第80次調査石製品一覧表……64



1．西新町遺跡　2．藤崎遺跡　3．原遺跡　4．原談儀遺跡　5．飯倉遺跡　6．飯倉原遺跡
7．干隈遺跡　8．鶴町遺跡　9．原深町遺跡　10．有田七田前遺跡　11．橋本榎田遺跡

Fig. 1　有田・小田部周辺の遺跡（縮尺1/25,000）

第１章　はじめに

１．調査に至る経過

福岡市は、昭和50年までに１市30町村が合併した都市で、面積は約337．59㎢を測る。平野部は大きく分けると福岡平野と早良平野からなっている。有田・小田部地区は、福岡市の西部に広がる早良平野のほぼ中央部に位置し、台地上の面積は約70万㎡を測る。この地域はかつては福岡市近郊の農村地帯であった。昭和47年に福岡市が政令指定都市に指定された以降、九州経済の中核都市としてめざましく発展すると共に、人口の集中化にしたがって福岡市の西部地域は、道路網の整備や地下鉄の開通によって、住宅化が著しく進められているところである。有田・小田部地区も同様に過日の田園・畑作地域の面影はなく、現在では高層アパートが樹立している。

福岡市教育委員会では、昭和50年より有田・小田部地区のこれらの開発に対処して、発掘調査を実施しており、平成８年度末までの調査件数は184件を数える。その多くは、個人専用住宅であったが、近年は学校建設、市営住宅の改築などの公共事業や大型の民間開発事業も含まれている。

本書では、個人専用住宅及び、店舗付住宅など国庫補助の対象事業として発掘調査を実施した昭和58年度の第80次調査の成果を報告するものである。

２．発掘調査組織

(1)　昭和58年度の調査組織（第80次調査）

調　査　主　体　福岡市教育委員会
調　査　担　当　福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第２係
調　査　責　任　文化部文化課課長　　生田征生
　　埋蔵文化財第２係長　折尾学
庶　務　担　当　岡嶋洋一
調　査　担　当　井澤洋一、松村道博
調　　査　　員　谷沢仁（現　佐賀県大和町教育委員会）
調査協力者　松尾和雄、真子康次郎、高浜謙一、結城茂巳、座親秀文、西原達也、海田龍生、武田秀司、合屋龍介、松尾正明、下野敏夫、伊庭秀子、緒方マサヨ、金子由利子、清原ユリ子、坂口フミ子、佐藤テル子、柴田勝子、柴田幸子、柴田春代、柴田タツ子、庄野崎ヒデ子、土斐崎初枝、砥綿千江子、西尾たつよ、平井和子、堀川ヒロ子、松井フユ子、松井邦子、松尾玲子、有富いつ子、米嶋チズヨ、日野良子、末松信子、中村千里、後藤ミサヲ、吉岡田鶴子、宮原邦江、砥上志華子、木村伸子、吉田祝子、原花千代、江口洋子、合屋文子、坂田まさ子、結城律子、渡辺武子、森みえ子、浜口由美子、川田初、川田久子、吉川タエ、佐藤ヒサエ、島田まり子
　　西南大学歴史探求会　西島健一、萩原陽一郎
資　料　整　理　原秋代、池田洋子、深堀博子、元田明子、内尾トミ子、仲前智江子、永井和子、友田妙子、小江英美子、大田けい子、久門みちよ、山下仁美

(2) 平成９年度資料整理

整　理　主　体　福岡市教育委員会
整　理　担　当　福岡市教育委員会埋蔵文化財課
　　主任文化財主事　井澤洋一
庶　務　担　当　埋蔵文化財課第１係　内野保基
調　　査　　員　廣嵜香、池田孝弘、牛房綾子、吉田扶希子
作　　業　　員　上笹貫久美子、西口キミ子、福田小菊、多田映子、田中昭子

（有田遺跡第80次調査）

遺跡調査番号	８３０８		遺跡略号	ART-80	
地　　番	小田部１丁目168		分布地図番号	原 82	
開発面積	885㎡	調査対象面積	885㎡	調査面積	885㎡
調査期間	昭和58年６月22日～７月26日				

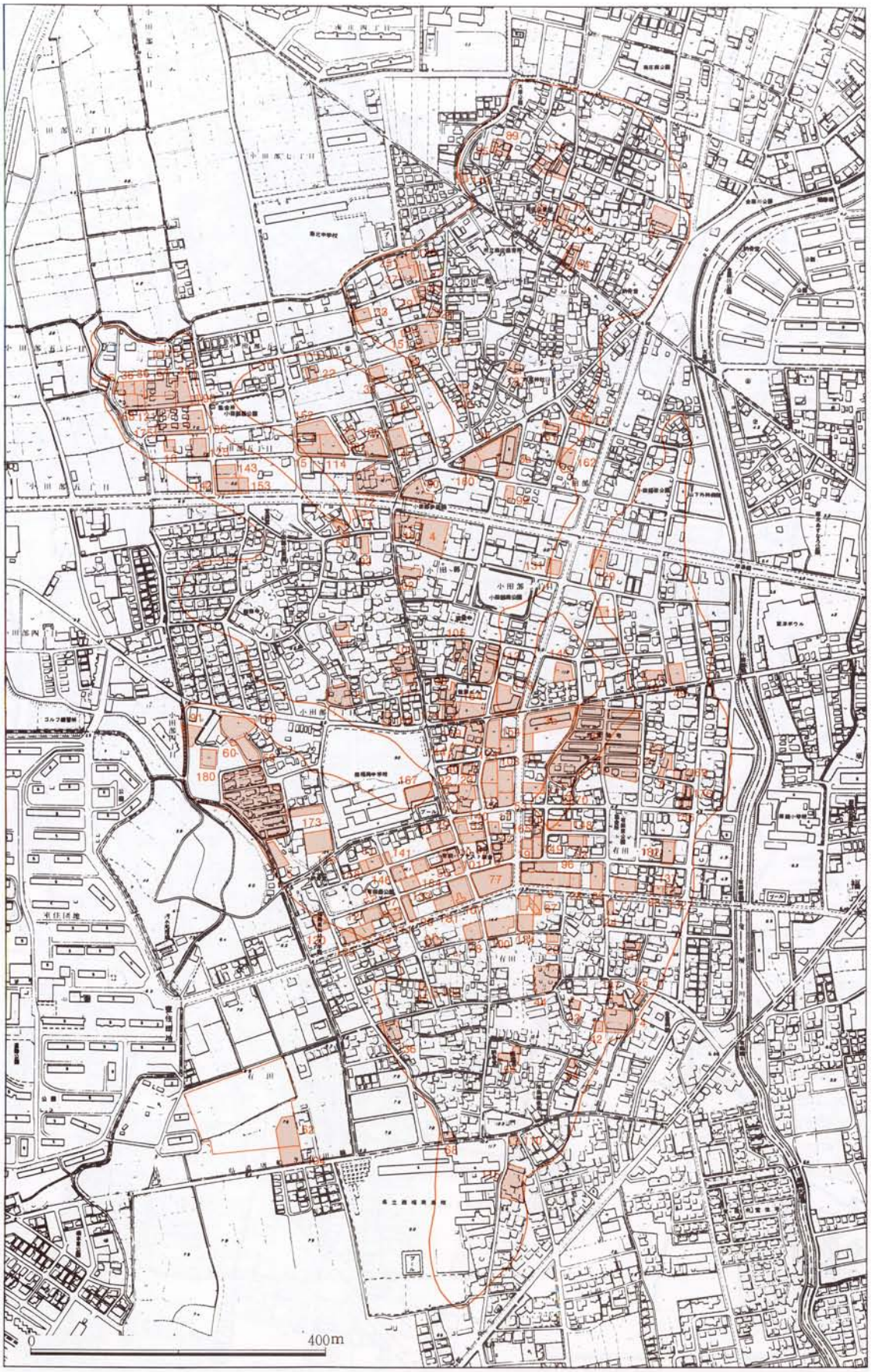


Fig. 2　有田・小田部台地と発掘調査地点（縮尺1／8,000）　※数字は、調査次数を表す。

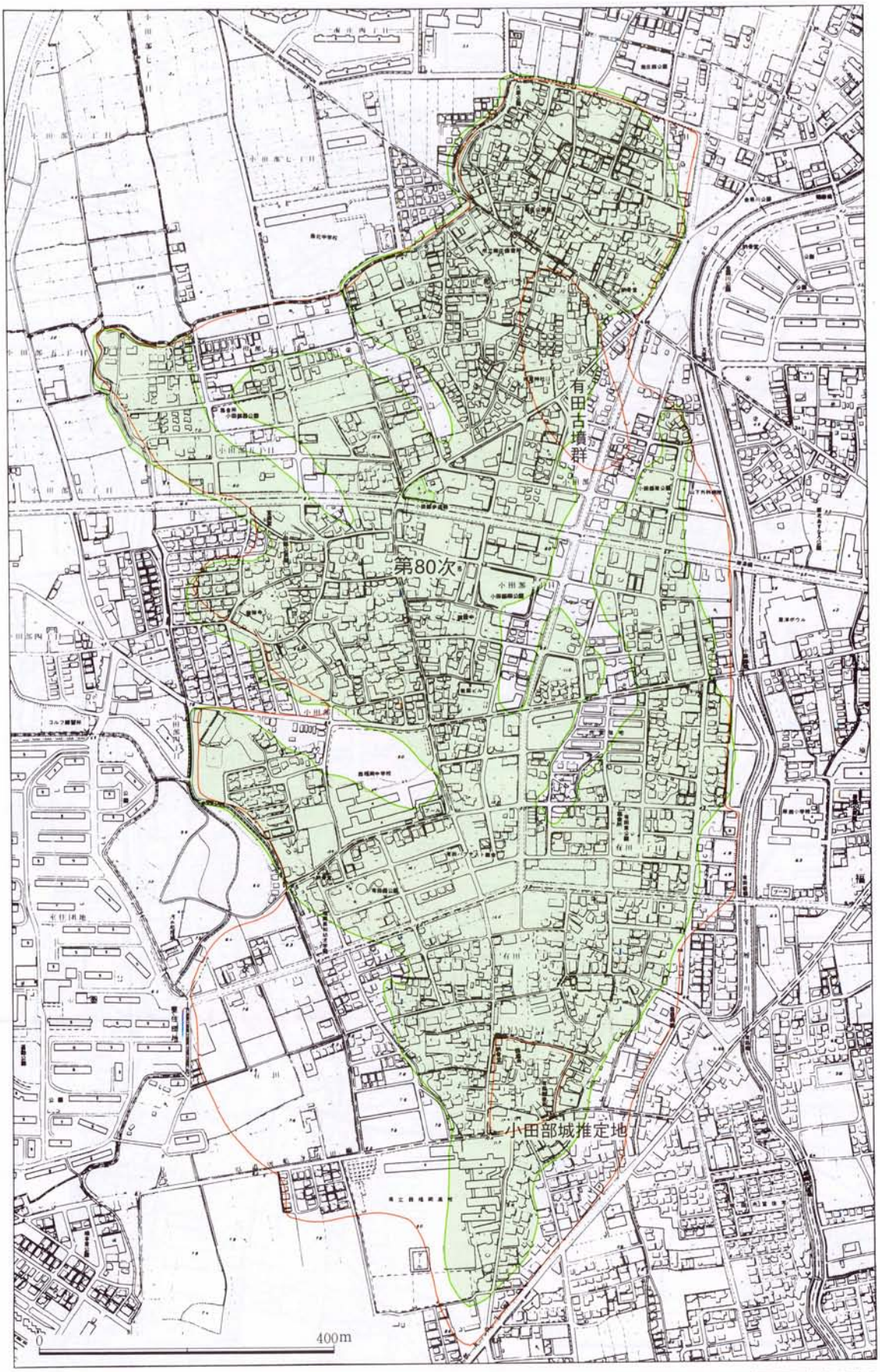
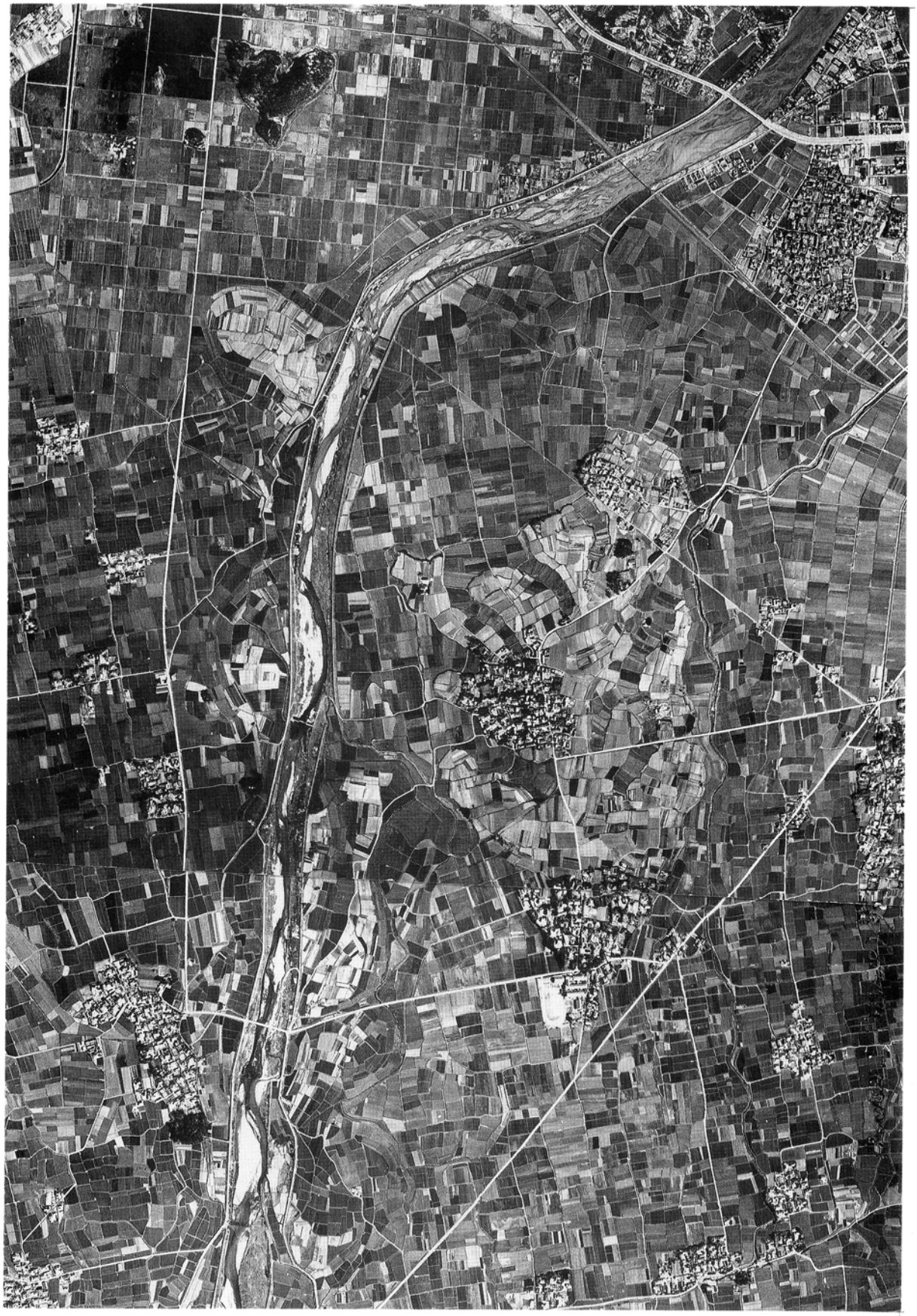


Fig. 3　発掘調査地点位置図（縮尺1／8,000）

台地範囲
遺跡範囲



有田・小田部周辺航空写真（昭和21年米軍撮影）

有田・小田部周辺航空写真（昭和50年撮影）

※写真掲載については国土地理院の許可を得た。

第２章　有田・小田部の歴史

1　立地・歴史的環境

有田・小田部地区の立地環境及び、歴史的環境については既刊の報告書の中で詳細に述べられているので、これらの報告書を参照されたい。ここでは、発掘調査に関連した有田・小田部地区の歴史的な事件・事項を「筑前國續風土記拾遺」、「早良郡志」等の文献より転載した。

2　文献資料

「筑前國續風土記拾遺」

小田部村

和名抄に此郡に田部郷あり。此村は其遺名なるべし。日本紀景行天皇五十七年に諸國に田部を置れしよし見えたり。（是古へ屯倉の公田を耕す者の称なり。民の字を多美といふも此田部といふ事なり。）有田も本は此村より別れたり。（飯盛社領文永の坪付に小田部郷とあり。此村にも昔飯盛社領有しと見えたり。）村の西に室見川有。（此川の内に若宮渡瀬一日渡し渡瀬柳川原渡瀬等の名あり。）太閤道鳥飼村の南より荒江原村に入て、左に往環を行は肥前三ッ瀬越の道なり。右の小路を直に西に行は、此村の松尾原を下りて室見川を渡り、姪濱の南を經て下山門村に至る。是天正の比の往環也。秀吉公名護屋御陣の時、此道を經過し給し故に今に太閤道といふ。

教善寺

村西口に在。真宗西博多万行寺末座元也。

古塚　松浦殿塚　筑紫殿塚

松浦殿塚は松尾原に在。又丸山塚とも云。周四十間許高二間。上に古松あり。小田部氏の系圖を按るに、元祖は嵯峨源氏にて松浦黨也。左大臣源融公五代の孫を渡邊源次綱といふ。其子源太夫判官久始て肥前國松浦郡平戸に住す。次男松浦小源次正といふ。其後裔松浦隼人佐鎮隆の時、小田部城主水上何某と云者を討て、當所を領し初て小田部氏と号す。其子鎮俊（上総介宗雲）其養子を民部少輔俊之（後に入道して紹叱といふ。）と見えたり。しかれは此松浦殿塚と云は、かの隼人佐鎮隆を云なるへし。筑紫殿塚は村の東北田間にあり。また大塚と云。

周四十間許高三間許三段に縁有。上の段に土手回れり。古松一本立。筑紫氏由来詳ならす。又村の西に山伏塚といふあり。又松尾原の内に立石三ッ有。中の篇石高六尺幅七尺厚一尺四五寸あり。左右の二石はや、低し。共に銘字なし。是も古墓なるへし。其由来傳らす。

有田村

民居一所に在。東に金屑川有。北に流る。（飯盛社應永中坪付に有田村あり。）

寶満宮

村南に在。産神也。所祭玉依姫命　神功皇后　應神天皇也といへり。由来未レ詳。

○天満宮（天神屋敷）小田部氏の鎮守として祭りし社といふ。其側にから堀址有。下に見えたる小田部氏の里城址なり。

西應寺

村内に在。真宗西博多万行寺末也。開基の僧を恵正といふ。

古宅

村内に在。堀内といふ。堀址殘れり。廣宅なりしと見ゆ。是小田部氏か里城になるへし。其邊に小田部氏墓といふもあり。塚上に切石二重を置り。銘字はなし。瘧を患ふる者祈願すれば必験ありとなん。又村南に築城といふ所あり。鎮西要略に小田邊城といふ見えたるは、是らをさしていふか。

「早良郡志」

村社寶満神社　當社は、有田字馬場にあつて、祭神は玉依姫命彦火火出見尊鸕鷀草葺不合尊である。例祭は九月十九日にして、境内五百二十二坪社殿約十三坪餘明治五年十一月三日、村社に定められた。氏子六十五戸、境内の菅原神社は、明治十五年一月二十日字天神屋敷から遷したのであつて、小田部氏の鎮守として祭つた社と云つて居る。當社の西方に一反歩許りの宮田と云ふ所がある。往年本社の祭田であったと言ひ傳へて居る。

眞宗教善寺　當山は、小田部字宮城にあつて、菩提山と號し、眞宗西派に屬して居る。境内百七十九坪堂宇四十二坪にして、寺内にある二の觀音堂は字宮城と、字東屋敷とにあつたのを明治十四年七月當寺内に移したのである檀徒八十戸。

眞宗西應寺　當山は有田字馬場にあつて、荒平山と號し眞宗西派に屬して居る。開基は僧惠正といふも、年月日は詳でない。境内百八十七坪堂宇二十五坪ありて、檀徒は三十五戸。

小田部氏墓　小田部字立石と謂ふ所に、小田部氏の墓と云ふのがある。二段切石を重ねてあるも銘の見るべきものがない、里人は甲塚とも謂つて居る。瘧を患ふる者祈願すれば驗ありとて參詣者が多い。

第３章　第80次調査（調査番号 8306）

１．地形と概要

(1)　立　地

当該地は、岡市早良区小田部１丁目168に所在し、発掘調査面積は885㎡である。

有田・小田部台地の北側は、狭い開析谷によって北に延びる５～６箇所の舌状台地を派生しているが、当該地はこれらの内の幅広い舌状台地の基部に位置している。調査前の現況は、標高約12mを測る畑であったが、既に昭和41～43年の区画整理によって平坦化している。この地域は、北東側と北西側に開析谷の谷頭が存在するため幅160m程の狭長なくびれ部を形成している。

当該地周辺においては、弥生時代から戦国時代までの遺構や遺物が数多く発見されており、特に当該地の南側に位置する第48次調査では、弥生時代前期から中期の住居跡や貯蔵穴・掘立柱建物を検出している。この内、住居跡は韓国の松菊里遺跡で発見された住居跡と同類型であり、有田地区に存在する第77次調査発見の縄文時代晩期の環濠と併せて弥生時代の始まりの状況を示す遺構として今後の調査が注目されるところであった。

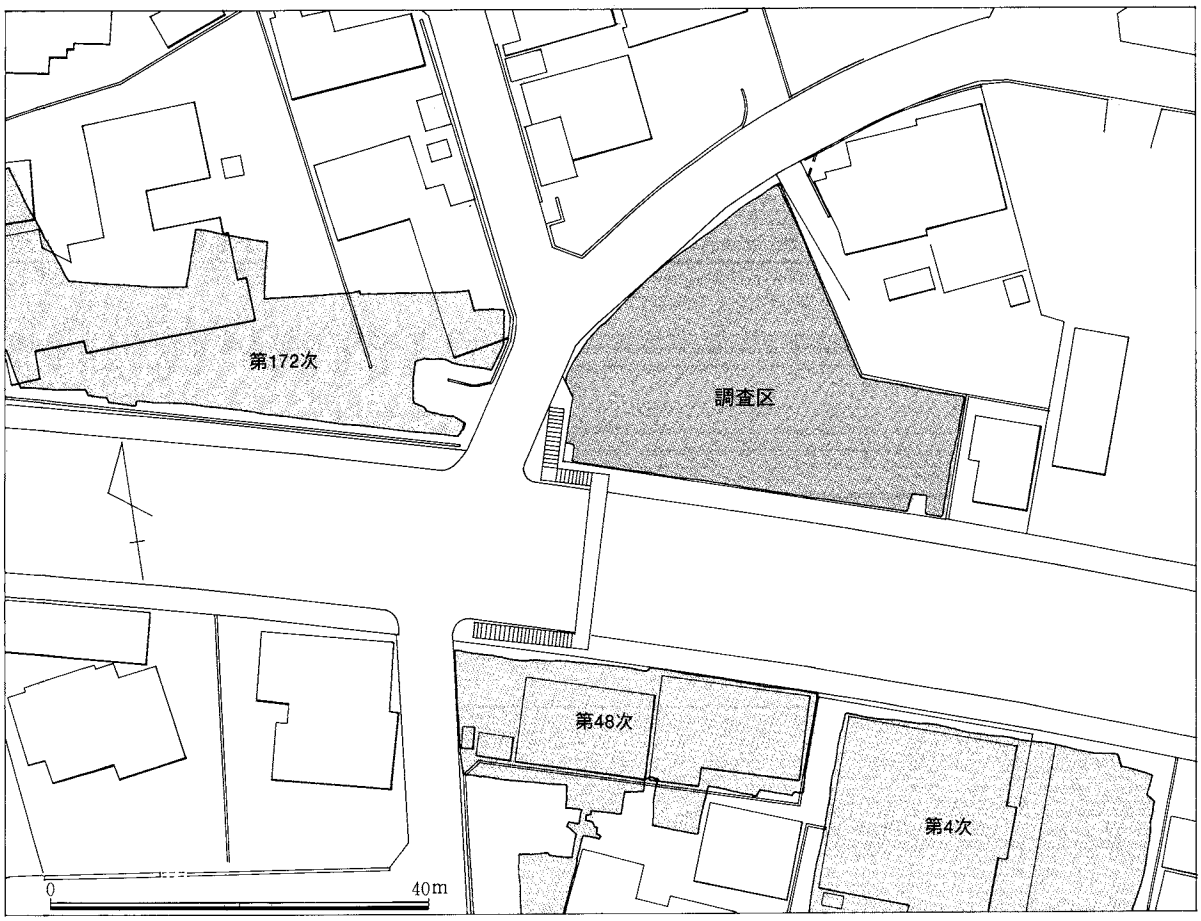


Fig. 4　第80次調査地点周辺図（縮尺1／800）

第80次調査地点を望む（南から）

第80次調査 全景（北から）

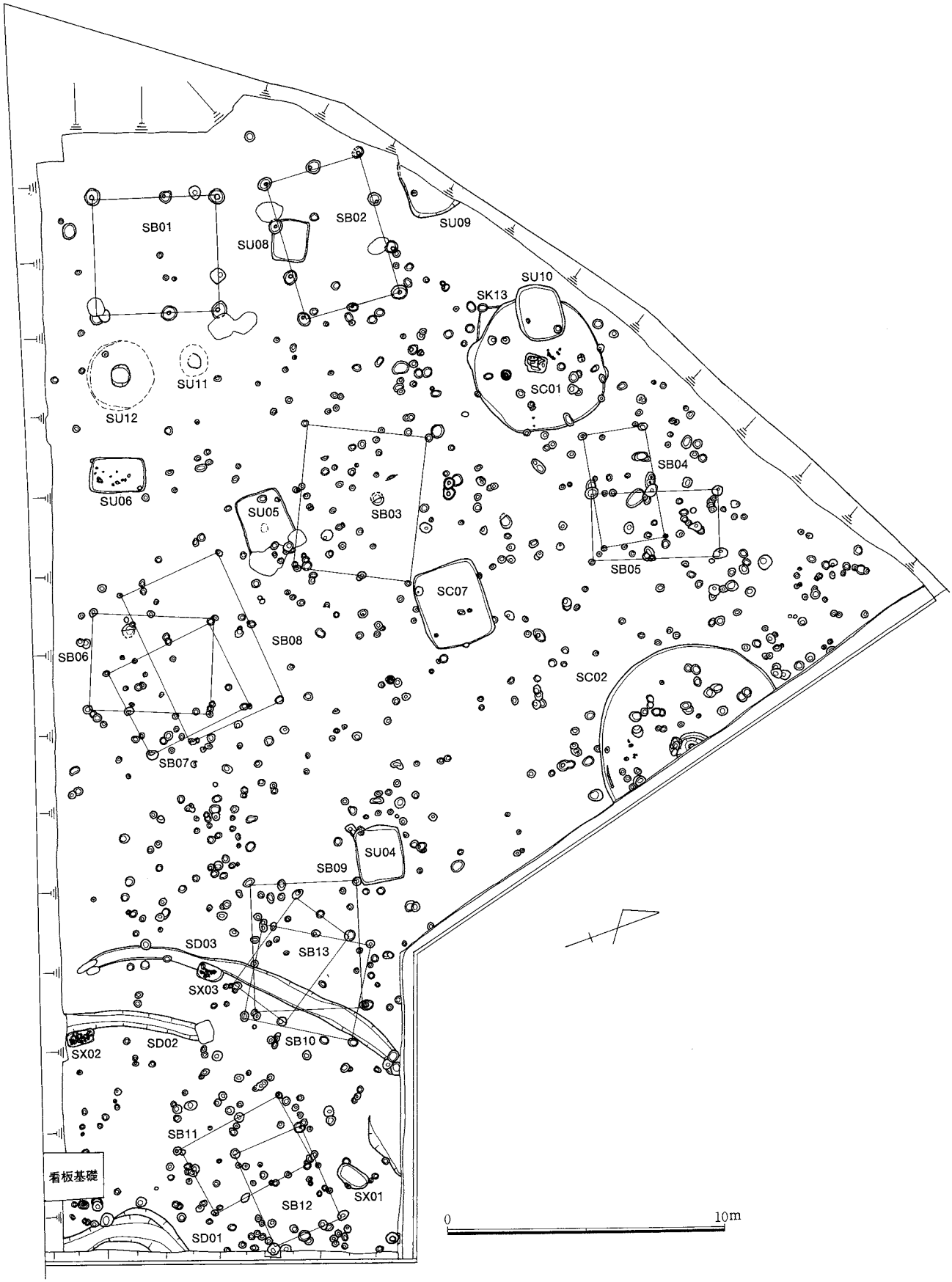


Fig. 5　第80次調査 遺構配置図（縮尺1／200）

第80次調査 全景（西から）

又、第80次調査地点南側の国道202号線を挟んだ第４次調査では、古墳時代から鎌倉時代までの掘立柱建物68棟や溝２条などを検出しており、この周辺地域における弥生時代以降の遺跡構成の全容を解明しつつある。

(2) 概　要

今回の調査では、既に試掘調査において住居跡が存在することが判明していたので、南側の第48次調査の発掘調査成果を参考に、弥生時代の集落や掘立柱建物の規模、或いは16世紀代の遺構の存在有無の確認等を目的に調査を行った。

表土は、畑の耕作土で、深さ約25㎝を測る。耕作土の下は、遺構面の褐色ローム層であるが、畑の畝作りのため遺構面は荒れており、遺構の削平が著しい。各時代の遺構は全てこのローム層上面において検出できる。

遺構は、弥生時代の竪穴住居跡４軒・貯蔵穴７基、律令時代～鎌倉時代の掘立柱建物13棟、古墳時代～中世の溝３条、中世の土壙墓１基・火葬墓２基を検出した。

弥生時代の竪穴住居跡には、平面形が円形プランと方形プランがある。方形プランの住居跡は小型であるため、住居跡としては若干疑問の残るところであるが、第48次調査においても第80次調査に比べてやや規模が大きい同様な遺構を発見している。

弥生時代の貯蔵穴は、現在までのところ検出例は少なく、有田地区の第３・66・78次調査において、及び小田部地区の第48・119・121・143次調査などで検出しているにすぎない。立地的にみて不連続

性が強いため立置や時期の分類によって、集落単位・構造と併せて検討する必要がある。

中世の土壙墓や火葬墓は、この地域での発見例は少ないが、鎌倉時代から戦国時代までの墓地がこの一帯に存在したことを裏付けている。第4次調査で発見した中世の掘立柱建物群との関連が強いものと考えられる。溝は、いずれも全体形が不明なため機能について判断ができないが、溝SD01は、形状より古墳の周溝の可能性もある。

2．遺構・遺物説明

(1) 住居跡（SC）

弥生時代の竪穴住居跡は、全部で4軒検出した。この内、住居跡SC01・02の平面形は円形プラン、住居跡SC05・07の平面形は方形プランである。SC01・SC02は共に松菊里型の住居跡である。住居跡SC02は、東側境界地に所在するため半分しか発掘できなかった。住居跡SC01は貯蔵穴 SU13に切られており、前後関係が明らかである。

SC01（Fig. 7）　調査区西側に位置する。上面の削平が著しく、又、土壙 SK13を切り、且つ貯蔵穴SU10に切られている。平面形は不整円形を呈している。直径は、東西径498㎝、南北径473㎝で、周壁の遺存高は約20㎝である。床面は貼り床が施されている。床の中央には平面形が隅丸長方形の土壙（SK01）が存在する。この土壙の規模は、長さ約75㎝、幅約55㎝、深さ53㎝を測る。この土壙の長

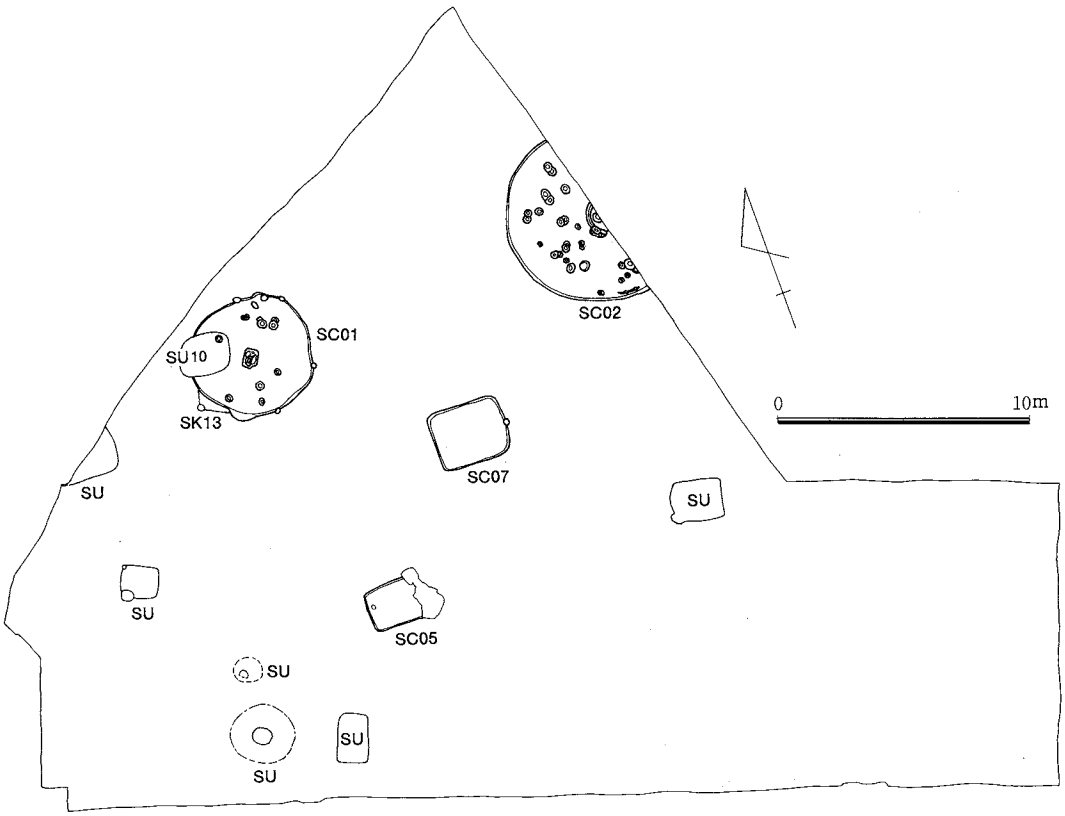
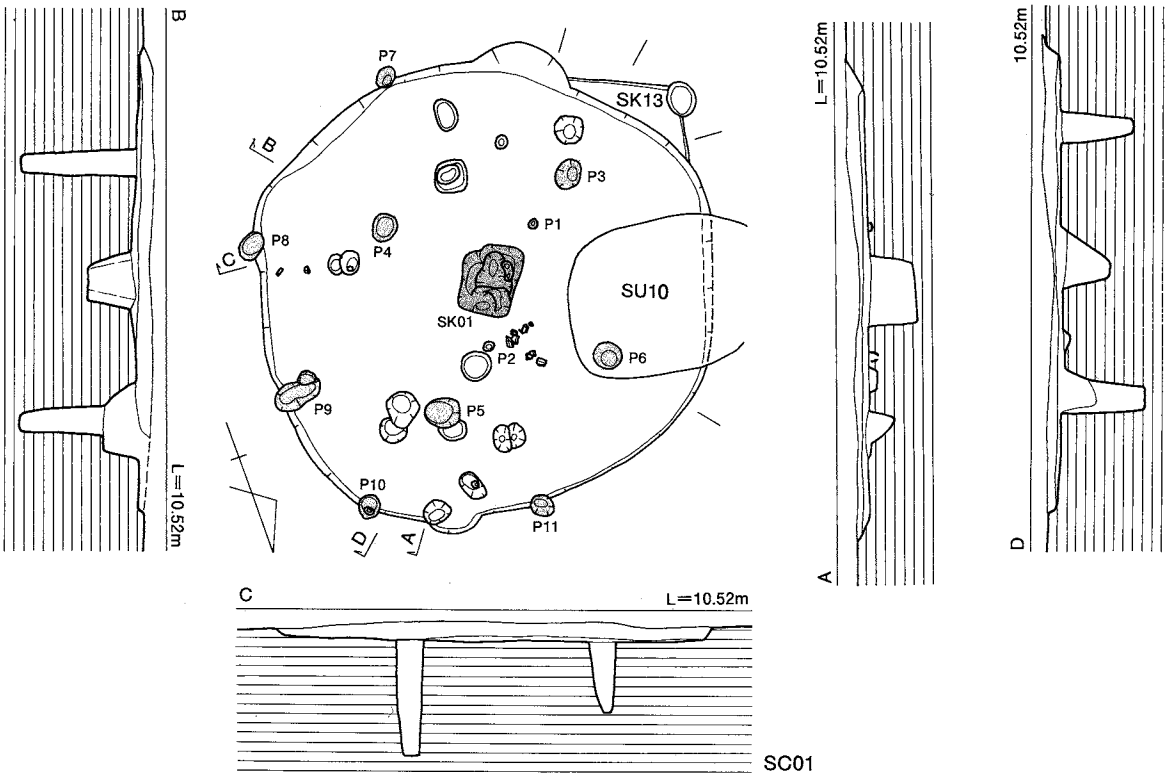
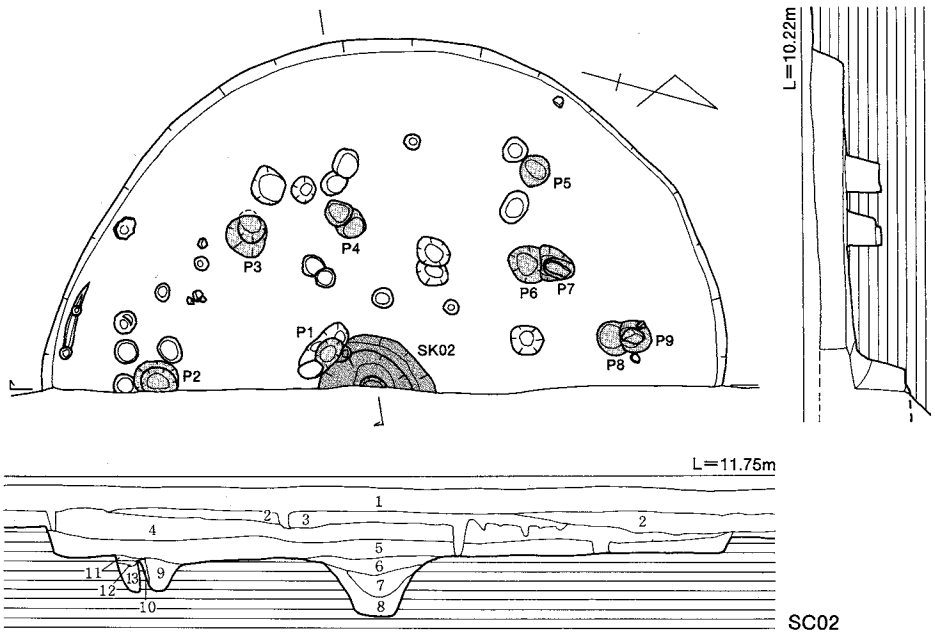


Fig. 6　第80次調査 住居跡配置図（縮尺1／300）



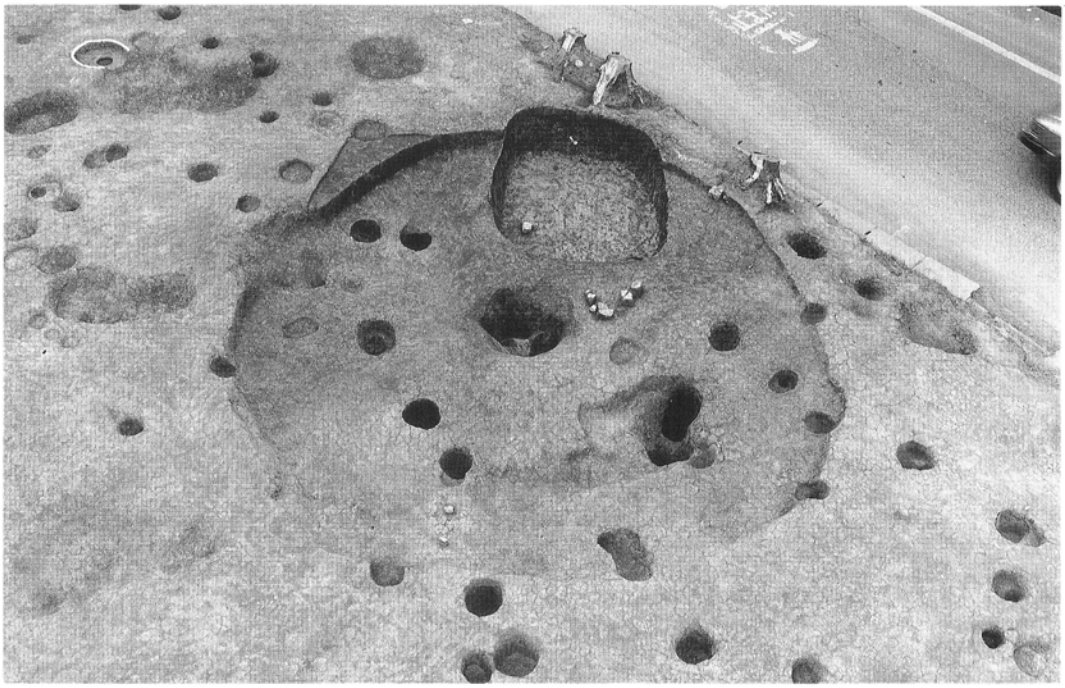


0 4 m

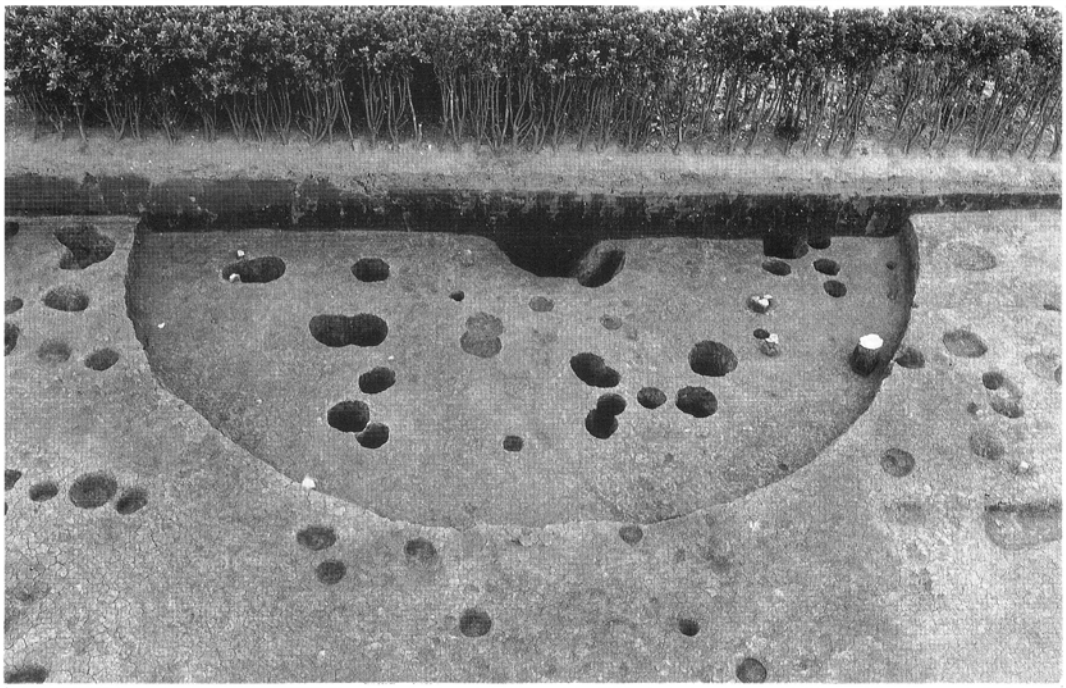
SC02東壁土層名称

1．表土
2．茶褐色粘質土
3．2に黒色粘質土を含む
4．黒褐色粘質土
5．黒灰色粘質土（黄褐色土粒子を少し含む）
6．暗灰色粘質土（黄褐色土粒子を多く含む）
7．暗灰色粘質土（6よりやや砂粒多い）
8．暗茶褐色粘質土（地山の黄褐色土を含む）
9．黒灰色粘質土
10．明茶褐色粘質土（黄褐色土ブロックを含む）
11．9と同じ
12．黄褐色粘質土と9の混合土
13．暗灰色粘質土（黄褐色土ブロックを少し含む）

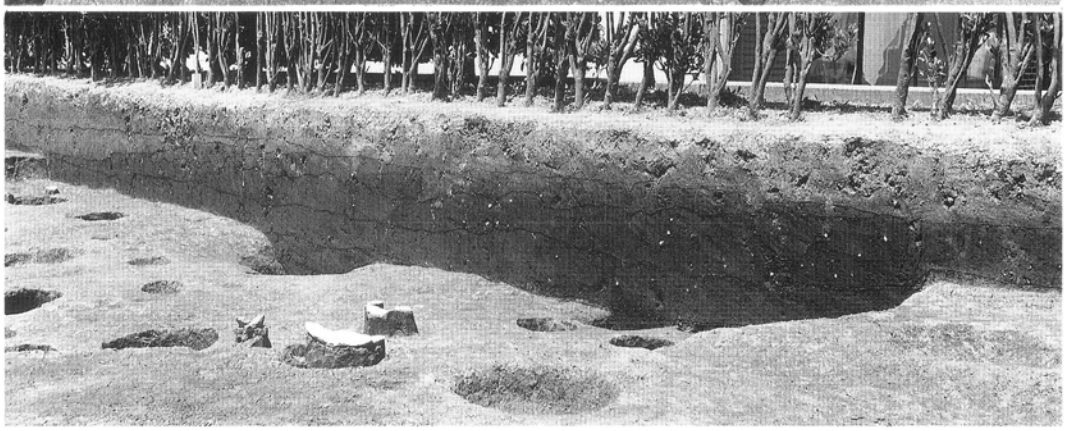
Fig. 7　住居跡SC01・02実測図（縮尺1／80）



住居跡SC01（東から）

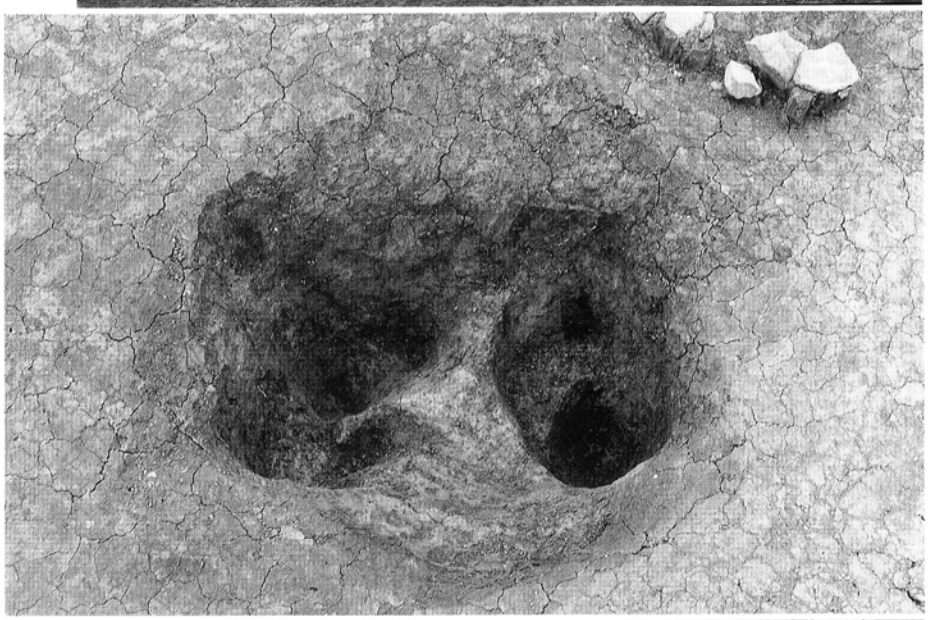


住居跡SC02（西から）

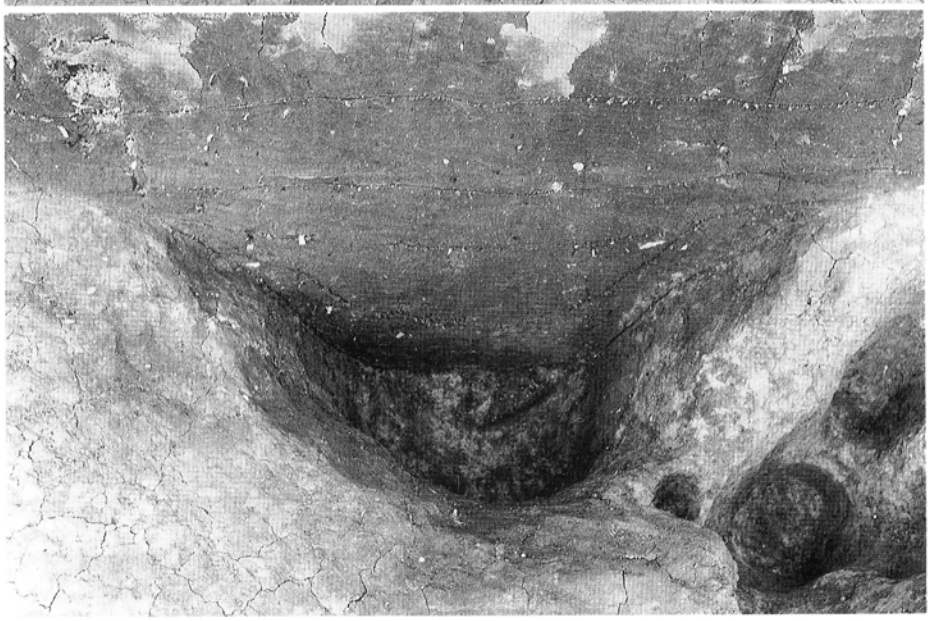


住居跡SC02土層状態（南西から）

住居跡ＳＣ02作業風景（南から）



住居跡ＳＣ01内土壙（ＳＫ01）（南東から）



住居跡ＳＣ02内土壙（ＳＫ02）（西から）

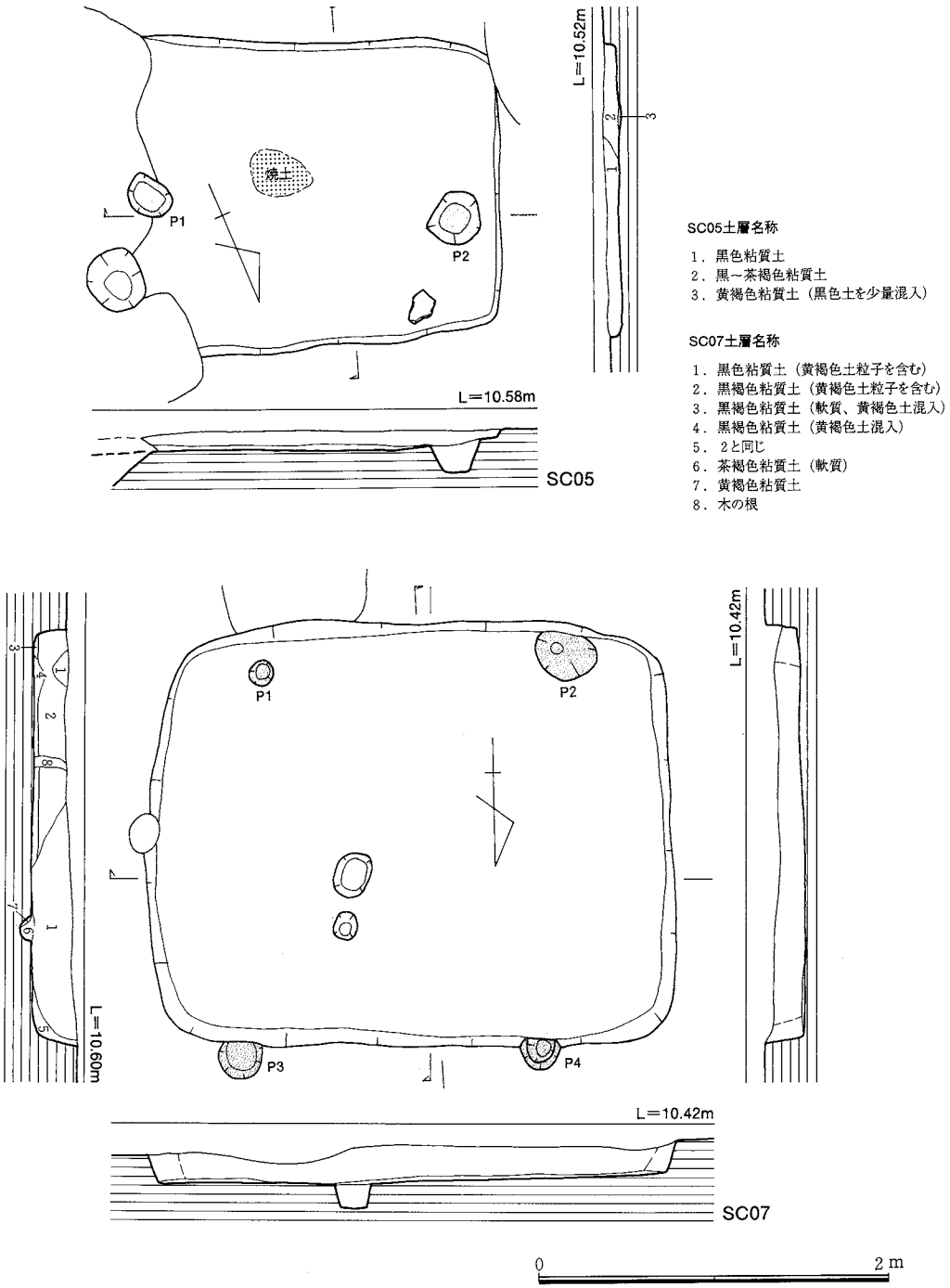
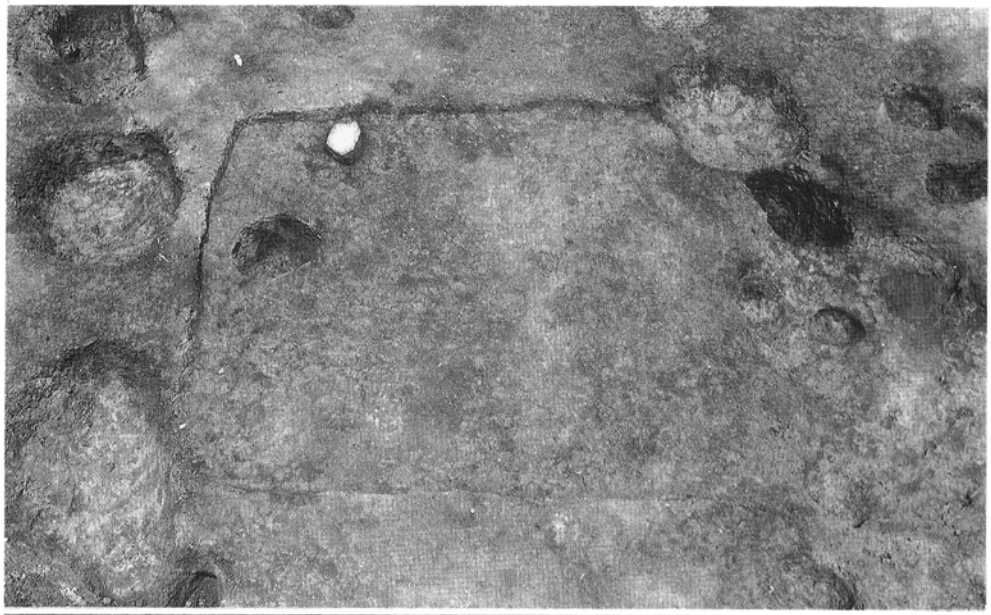


Fig. 8　住居跡SC05・07実測図（縮尺1／40）

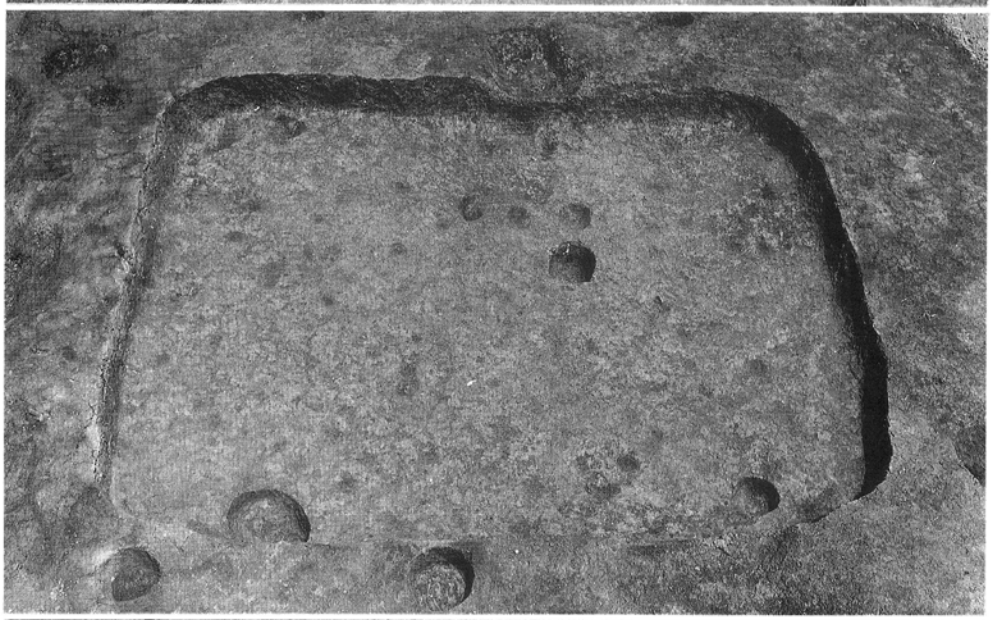
軸方向にそって略南側と略北側にそれぞれ１ケ所の柱穴(Ｐ１・Ｐ２)が存在する。柱穴径は、約20㎝を測るが、浅い。小規模な柱穴のため棟持柱としては検討を要する。

主柱と考えられる柱穴は、Ｐ３～６の４本で、直径は28～35㎝を測る。又、周壁にそってＰ７～11の５ケ所の柱穴が、住居跡周壁と切り合い関係にある。これらの柱穴は周壁全体には巡っていないが、束柱と考えて良いであろう。焼土面及び、周溝は存在しない。

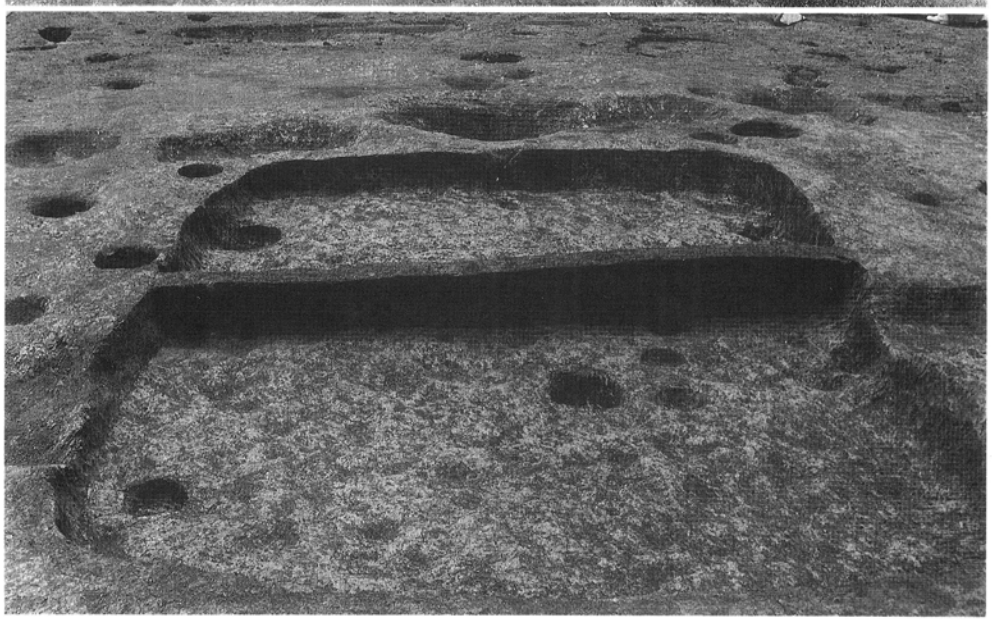
住居跡の覆土は、黒色粘質土、黒褐色粘質土を主体にしている。



住居跡SC05（南から）



住居跡SC07（SK01）（南から）



住居跡SC07土層状態（東から）

遺物は、覆土から突帯文土器片の他弥生時代前期から中期の甕形土器・壷形土器・高坏形土器片、黒曜石片が出土している。

SC02（Fig. 7）　調査区東側の境界地に位置し、竪穴住居跡の約半分が地区外に存在するため全体形は不明である。上面はSC01と同じく削平が著しいが、周壁は約42㎝の高さまで遺存していた。

住居跡の規模は、南北方向で最大径約720㎝を測る。床面は貼り床を施している。住居跡の中央には隅丸長方形と考えられる土壙（SK02）が存在する。規模は不明であるが、土壙の最大幅は約120㎝、深さ約65㎝を測る。南側の小口部分に接して柱穴（Ｐ１）が一ケ所存在する。この柱穴は、韓国松菊里型の住居跡に特長的な棟持柱と考えられる。柱穴の直径は約35㎝、深さ49㎝を測る。

主柱は、住居跡の全体形が不明なため柱穴の規模・深さから検討すれば、Ｐ２～Ｐ９の柱穴のいずれかが相当するものと考えられる。第138次調査検出の住居跡SC06と規模・形状が類似するところから、主柱は５本柱が想定できる。

炉跡は不明で、焼土面も見当たらなかった。周溝は、南側の周壁にそって一部が遺存していることから、本来は全周していたものと考えられる。

覆土は、黒色粘質土、黒灰色粘質土を主体にしている。

遺物は、覆土から突帯文土器片、弥生時代前期の壷形土器・甕形土器・鉢形土器片、石錘、剝片石器、黒曜石片多数が出土している。

SC05（Fig. 8）　調査区中央に位置するが、削平が著しく、且つ南側を撹乱壙によって破壊されているため全体形は不明である。平面形は隅丸長方形を呈するものと考えられる。現存長は210㎝、最大幅は184㎝を測る。周壁は垂直に近い傾斜をもち、現存高は最大で、約16㎝である。

床面は、貼り床ではないが、土壙中央には焼土面が存在する。この焼土面は不整楕円形を呈し、長さは38㎝、幅は25㎝を測る。

主柱はＰ１・２の２本柱と考えられる。柱穴の直径は27～32㎝を測る。周溝は存在しない。

覆土は、黒色粘質土を主体にしている。

遺物は、覆土から弥生土器片の他、須恵器や陶器の砕片が出土している。

SC07（Fig. 8）　調査区のほぼ中央で検出した。上面の削平は著しいが、周壁は良く遺存している。平面形は、隅丸長方形を呈し、規模は南北の長さは236㎝、東西の長さは302㎝、周壁の高さ約４㎝を測る。床面には焼土面、或いは炉跡はなかった。

主柱は、不明であるが、住居跡の周壁に沿ってＰ１～４の４ヶ所の柱穴が存在した。Ｐ１とＰ３、Ｐ２とＰ４は、各々対置した位置関係にあるため、住居跡に伴う柱穴と考えて良いと思われる。柱穴径は16～25㎝を測る。周溝は検出できなかった。

覆土は、黒色粘質土、黒褐色粘質土、茶褐色粘質土を主体としている。

遺物は、覆土からは弥生時代前期の壷形土器・甕形土器片、黒曜石片が出土した。

(2)　住居跡出土遺物（Fig. 9 ・10）

SC01出土遺物（Fig. 9－1～12）　１は、縄文時代晩期土器、２～12は、弥生時代前期から中期の土器である。

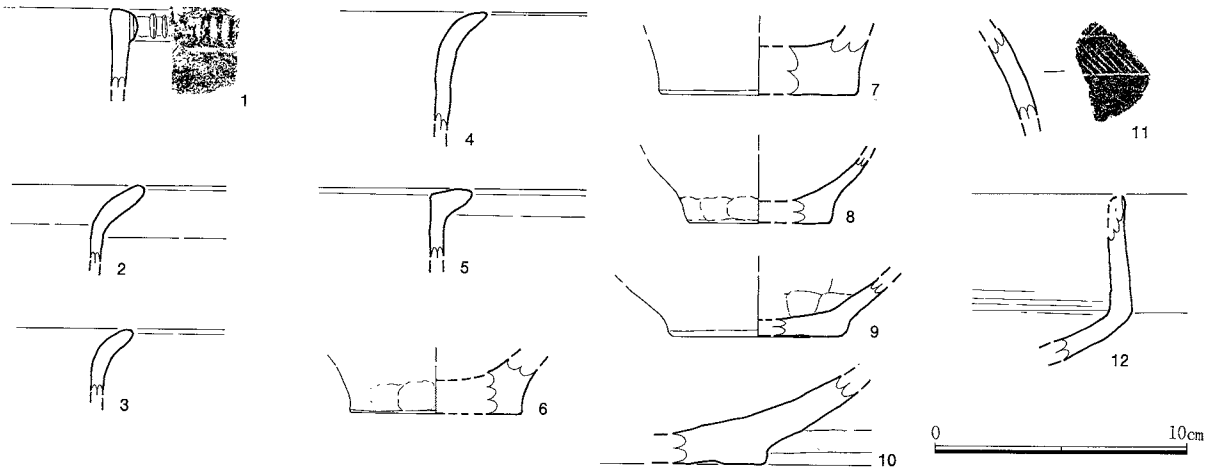


Fig. 9　住居跡SC01出土遺物実測図（縮尺1／3）

1は突帯文土器片で、低い突帯に縦長の刻み目を付けている。2～7は、弥生時代の甕形土器で、2～5は口縁部、6・7は底部片である。2～4は如意形をした口縁部片で、5の口縁部は逆L字形である。6・7は平底の底部で、端部周辺に指頭圧痕が残る。

8～10は、壷形土器の底部で、9・10は僅かに上げ底と思われる。11は、壷形土器の肩部片で、外面にヘラ描きの有軸羽状文を施している。12は高坏形土器の坏部片で、体部と底部の境に強い稜を有している。

SC02出土遺物（Fig.10―13～35）　13は、縄文時代晩期土器、14～31は、弥生時代前期土器、32～35は、石製品である。

13は突帯文土器の甕で、小さい三角形の刻み突帯を貼り付けている。

14～20・28～30は、弥生土器の甕形土器である。14～18は、如意形を呈した口縁部片で、15～20は口縁端部に刻み目を有している。17の外面はタテハケ調整である。28～30は底部片で、いずれも平底と考えられる。

21～26・31は、壷形土器で、21～26は口縁部片、31は底部片である。22～26の口縁部外面には、粘土を貼り付けて肥厚させ、頸部との間に段を有している。24は口縁端部に刻み目を有し、外面はヨコ方向のヘラミガキ調整、内面はヨコハケ調整である。23の口縁部内面もヨコハケ調整である。25の口縁部内外面は、ヨコ方向のヘラミガキで、頸部外面の口縁部との境には一部にタテハケの痕跡が認められる。26は、如意形口縁部で、外面に粘土を貼り付けて肥厚させる。頸部に段を有している。27は、高坏又は、鉢形土器の口縁部片で、体部は丸みを持ち、口縁端部は細く、丸く仕上げている。

32は、平面形が不整長方形の扁平礫を利用した石錘で、2側辺は粗割りのままで、他の2側辺は自然面を残す。縄掛けのため、自然面を残した2側辺に各々打撃を与えて、浅い抉りを入れている。石材は砂岩である。

その他には、黒曜石片が251点出土した。いずれも腰岳産と考えられる。内訳は、床面から50点、覆土中から194点、柱穴から4点である。この内、3点(33～35)に加工痕がある。

33～35は、剥片石器である。剥片の一部に剥離調整を加え、刃部を形成するもので、35はナイフ、33・34はエンドスクレイパーとしての用途が考えられる。33は縦長の剥片を用い、片方の側辺に自然

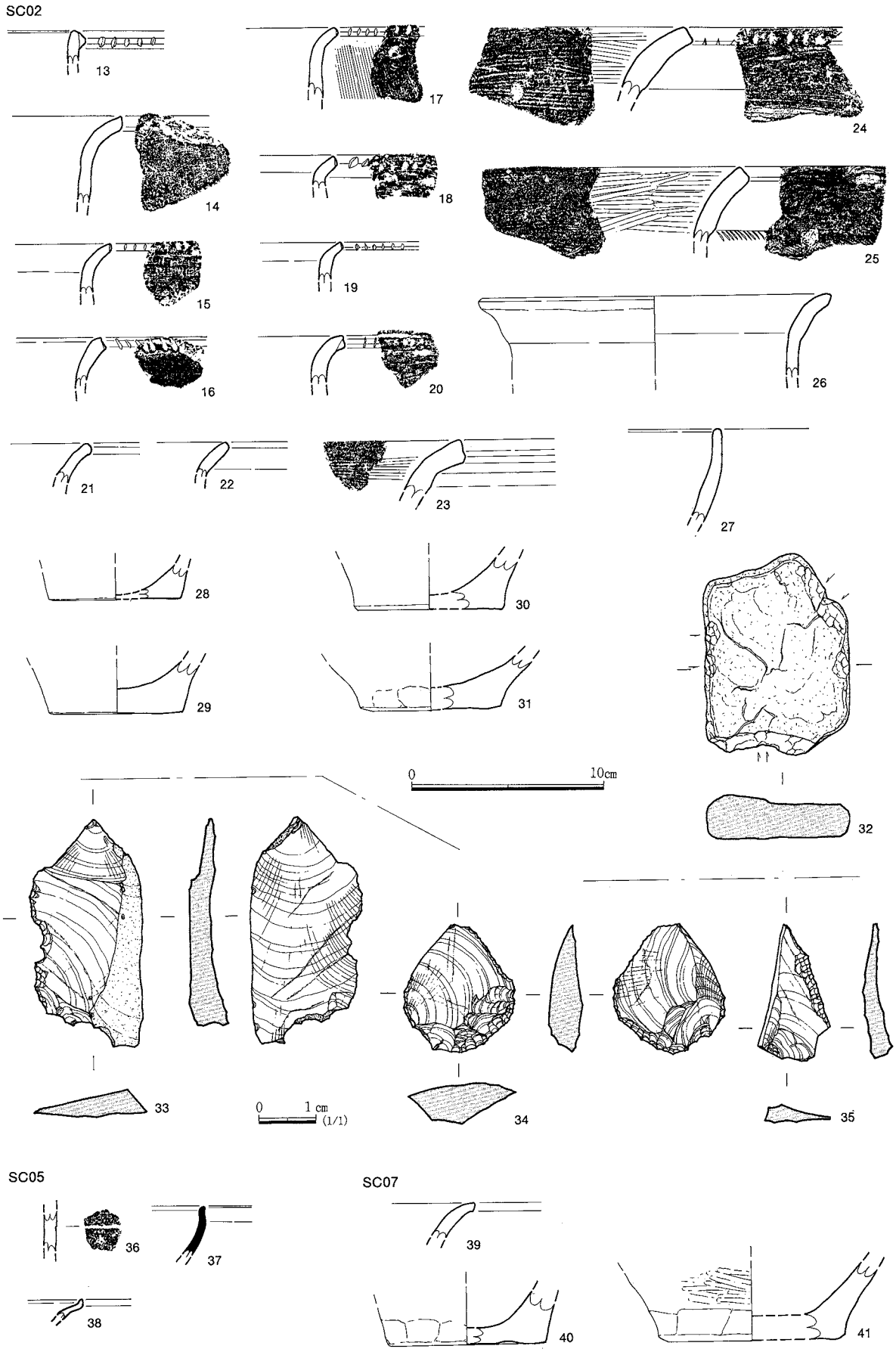
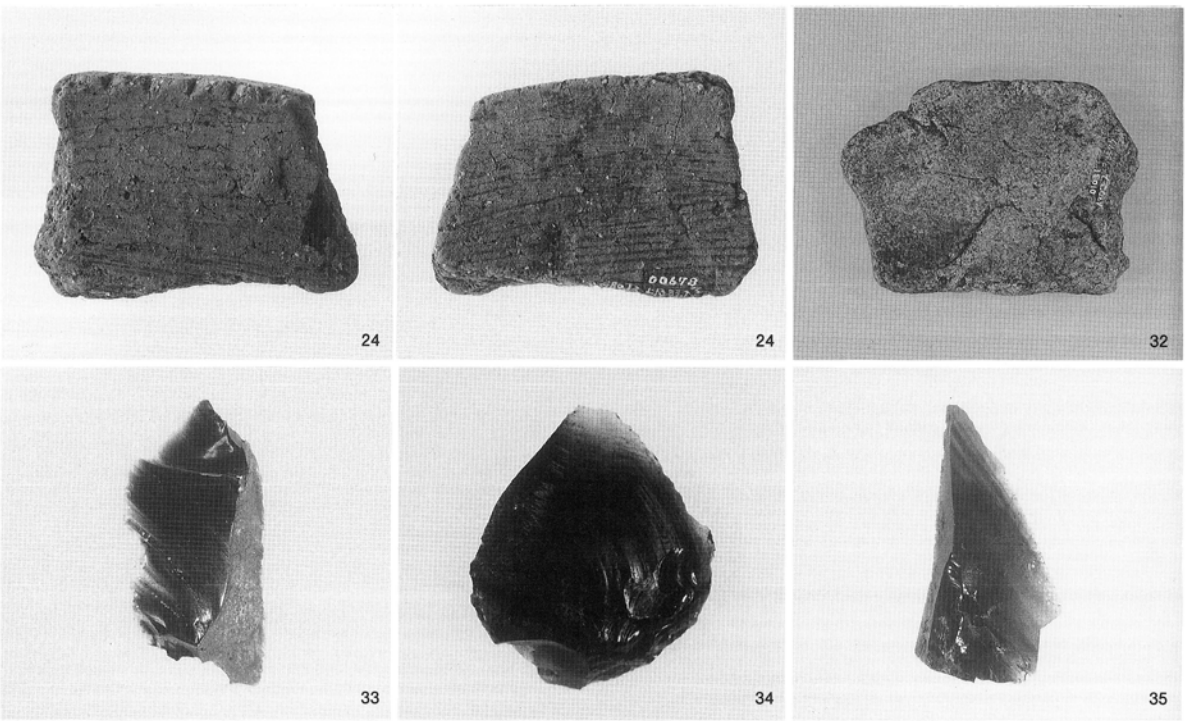


Fig. 10　住居跡SC02・05・07出土遺物実測図（縮尺1／1・1／3）



住居跡SC02出土遺物　※数字は、実測図の番号に一致する。

面を残し、他の側辺のみ加工を行う。34はバブルを残した横長の小さな厚みのある剝片で、厚みのある方を両面より加工調整している。35は縦長の剝片の基部と、片方の側辺に加工調整を行う。

SC05出土遺物（Fig.10－36～38）　36は、弥生時代前期土器、37は、古墳時代の須恵器片、38は、陶器片である。

36は、壷の肩部で、頸部と胴部の境にヘラ描きの沈線がある。37は須恵器の坏身で、口縁端部に沈線状の窪みをもっている。38は陶器の壷の口縁部片で、盤口壷の口縁部片と考えられる。

37・38は、流れ込みの遺物で、遺構の時期には直接関係しない。

SC07出土遺物（Fig.10－39～41）　いずれも弥生時代前期の土器である。

39・40は甕、41は壷である。39は、如意形を呈した口縁部片で、口縁端部に刻みは磨滅のため不明である。40は平底の底部片で、内外面は磨滅している。41の壷の底部は、平底と考えられ、外面はヘラミガキ調整である。

(3)　土 壙（SK）

土壙は少なく、3基を検出したが、この内の2基は竪穴住居跡に伴う土壙である。即ち、土壙SK01は住居跡SC01に、土壙SK02は住居跡SC02に付属する。

土壙SK13の形状、及び用途は不明である。又、住居跡SC01と切りあっており、遺存状態は極めて悪い。今回の調査では、中世の土壙墓・火葬墓を除いて検出した土壙の全てが弥生時代の貯蔵穴であることを考慮すれば、この土壙SK13も弥生時代の貯蔵穴の可能性がある。

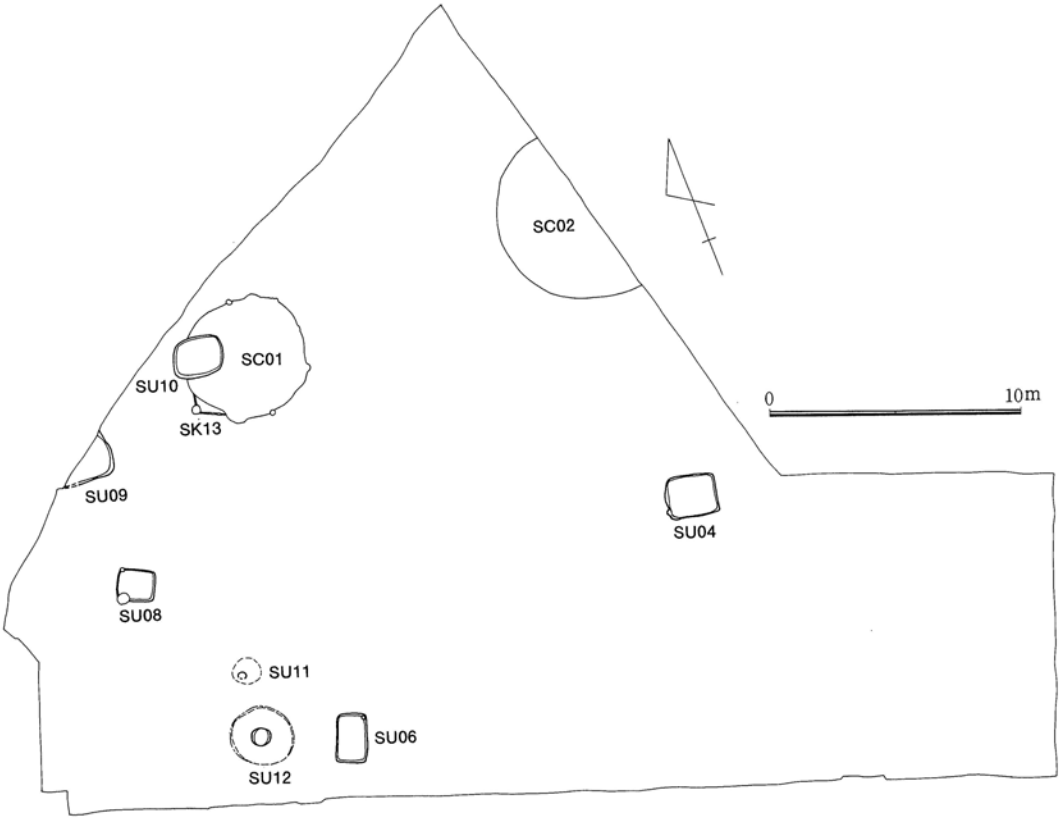


Fig. 11　第80次調査 土壙、貯蔵穴配置図（縮尺1／300）

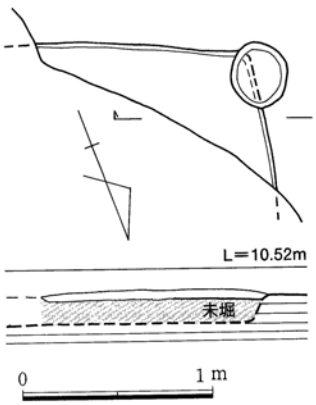
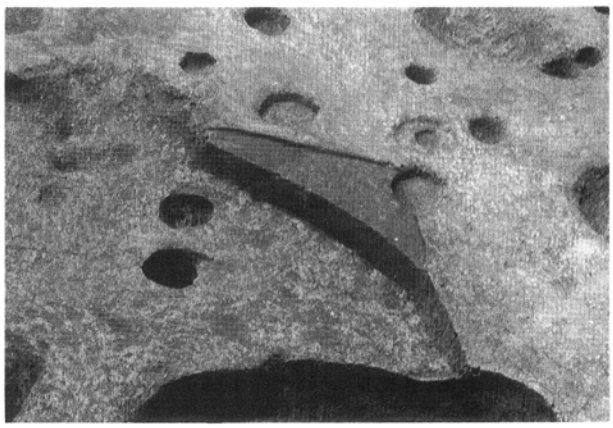


Fig. 12　土壙SK13実測図（縮尺1／40）



土壙SK13（北から）

SK13（Fig.12）　調査区の西側に位置する。上面は削平を受けており、且つ住居跡SC01に切られているため、遺存状態は著しく悪い。平面形は隅丸方形を呈するものと考えられる。現存長は約115㎝、現存幅は約76㎝、深さ約３㎝を測る。断面形は逆梯形と考えられる。

覆土は、黒褐色粘質土である。

遺物は出土していない。

(4) 貯蔵穴（SU）

調査区の西側に遍在する。遺構面は区画整理による地下げと畑作の畝作りのため著しく削平を受け、凸凹しているなど遺存状態は悪いが、円形・方形プランの貯蔵穴を合わせて７基を検出した。貯蔵穴の掘方形状には隅丸長方形と不整円形の二種類がみられる。全て褐色ローム層面に掘り込まれている。

出土遺物から弥生時代前期に属するものと思われる。

SU04（Fig.13）　調査区の東側に位置する。上面は削平を受けているが、遺存状態は良好である。上面の平面形は隅丸長方形で、断面形は、横断面の側壁がやや袋状を呈した箱形状である。底面は平坦である。最大長は約200㎝、最大幅は約170㎝、深さ55㎝、底面の最大長は186㎝を測る。

覆土は、黒色粘質土、黒褐色粘質土、茶褐色粘質土を主体としている。

遺物は、突帯文系土器甕・鉢、弥生土器壷・甕形土器、朝鮮系須恵器片等が出土している。

SU06（Fig.13）　調査区の南西側に位置している。上面は削平を受けているが、遺存状態は良好である。上面の平面形は隅丸方形で、底面も同様である。断面形は、側壁の一部が袋状を呈した箱形である。最大長は約200㎝、最大幅は約122㎝、深さ55㎝、底面の最大長は190㎝、幅は116㎝を測る。

覆土は黒色粘質土、黒褐色粘質土、黄褐色粘質土を主体としている。土壙の南側底面付近では厚さ約13㎝の焼土層が存在する。この焼土層周辺から土器が多く出土したが、図示した大きな甕の破片は焼土層の上部からの出土である。

遺物は、弥生土器甕・壷形土器、石包丁片、黒曜石、炭化物等が出土した。

SU08（Fig.13）　調査区の西側に位置する。上面は削平を受けているため遺存状態は良くない。又、土壙の西側隅を掘立柱建物SB02－P1が切り込んでいる。上面の平面形は、方形に近い隅丸長方形を呈し、断面形は逆梯形状を呈している。上面の最大長は約151㎝、最大幅は約130㎝、深さ18㎝を測る。

覆土は、黒褐色粘質土、茶褐色粘質土を主体としている。

遺物は、弥生土器の甕形土器、炭化物、黒曜石等が出土した。

SU09（Fig.14）　調査区の西側の境界地に位置し、半分以上が道路建設時に破壊されている。削平が著しく、且つ全体形が不明であるが、平面形は隅丸長方形を呈するものと考えられる。断面形は逆梯形を呈し、底面はやや平坦である。現存長は約225㎝、現存幅は約183㎝、深さ30㎝を測る。

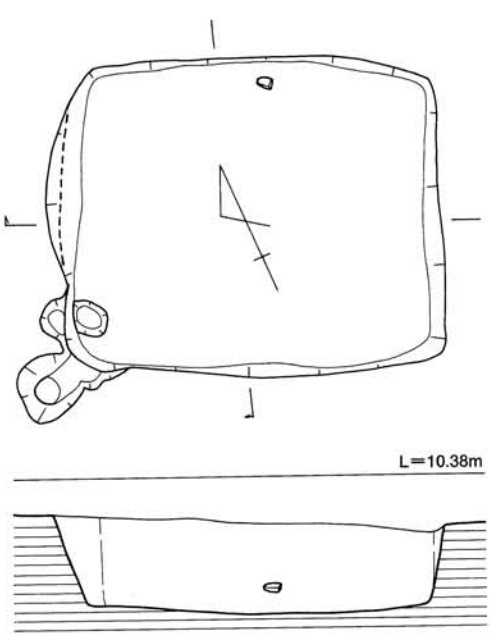
覆土は、黒褐色粘質土、茶褐色粘質土を主体としている。

遺物は、突帯文土器甕、弥生土器甕、敲石、黒曜石等が出土した。

SU10（Fig.14）　調査区の西側に位置し、住居跡SC01を切っている。上面は削平を受けているが、遺存状態は良好である。上面と底面の平面形は、不整隅丸長方形を、断面形は逆梯形状を呈している。南北の側壁はほぼ垂直に立ちあがっている。上面の最大長は約205㎝、最大幅は約160㎝、深さ54㎝を測る。

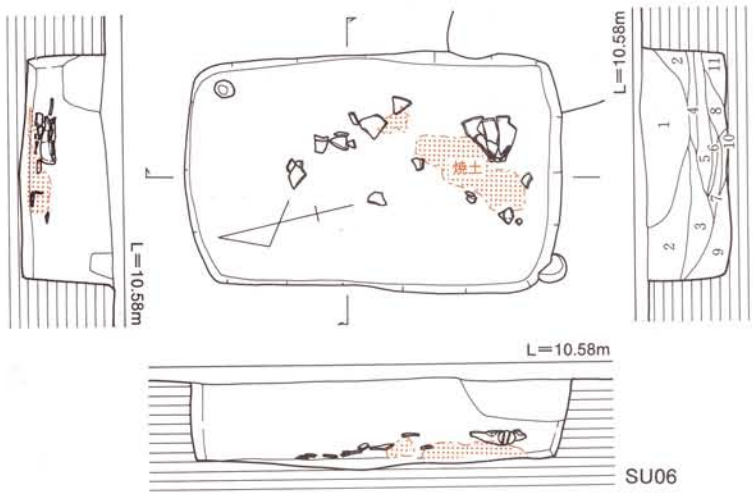
覆土は、レンズ状に堆積しており、黒褐色粘質土、黄褐色粘質土、茶褐色粘質土を主体にしている。

遺物は、弥生土器甕・壷形土器、石包丁、磨製石斧、砥石、黒曜石等が出土した。



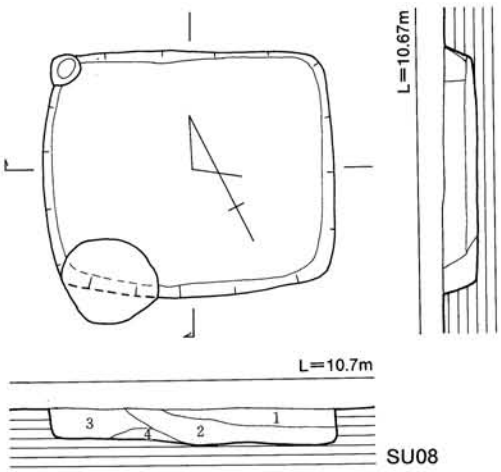
SU04土層名称

1．黒色粘質土（軟質）
2．黒色粘質土と黄褐色粘質土ブロックの混合土
3．黒色粘質土（黄褐色土粒子を多く含む）
4．茶～黄褐色粘質土
5．3とほぼ同じ
6．茶褐色粘質土（黄褐色粘質土ブロックを多く含む）
7．茶褐色粘質土
8．黄褐色粘質土（黄褐色粘質土ブロックを混入）
9．黒色粘質土（黄褐色粘質土ブロックを多く含む）
10．6と同じ



SU06土層名称

1．黒色粘質土と黄褐色粘質土の混合土
2．黒褐色粘質土（黄褐色粘質土を多く含む）
3．黄褐色粘質土
4．茶褐色粘質土
5．1と同じ
6．黄褐色粘質土（黒褐色粘質土混入）
7．茶褐色粘質土
8．黒色粘質土（黄褐色土を少量混入）
9．黒褐色～茶褐色粘質土（黄褐色土粒子を多く含む）
10．黒色粘質土と黄褐色粘質土の混合土
11．9と同じ



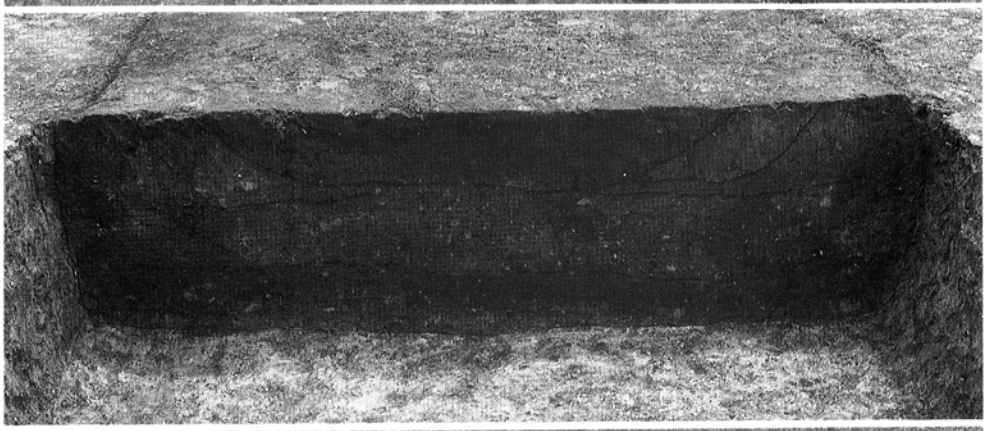
SU08土層名称

1．黒褐色粘質土
2．茶褐色粘質土（黄褐色土のブロックを多く含む）
3．黒褐色粘質土（黄褐色土のブロックを多く含む）
4．茶～黄褐色粘質土（黒色土を少量混入）

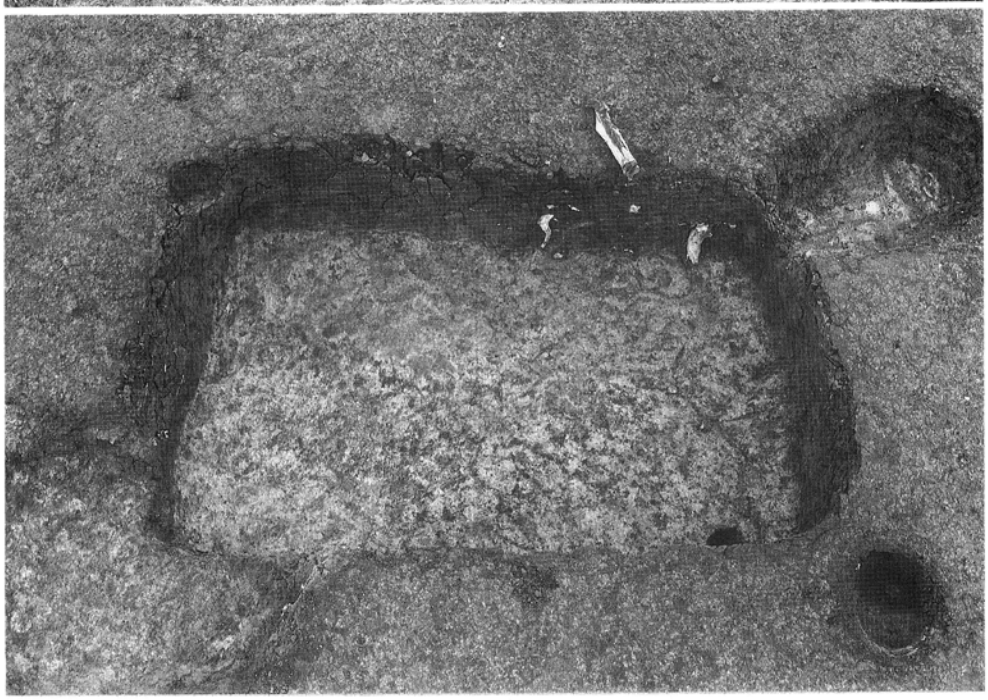
0　2 m

Fig. 13　貯蔵穴SU04・06・08実測図（縮尺1／40）

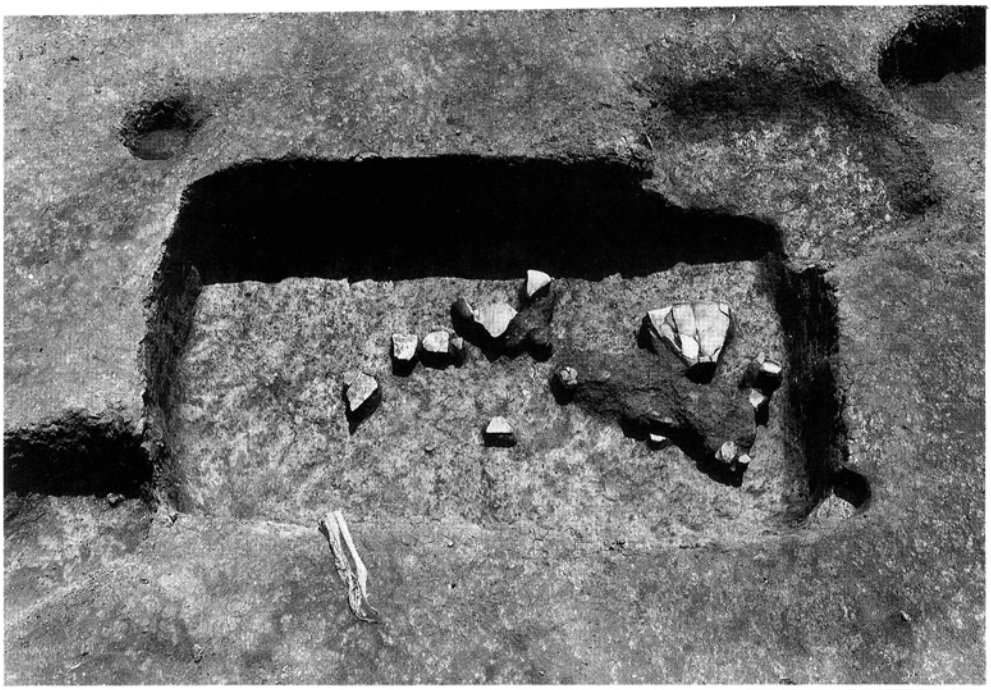
貯蔵穴SU04（南西から）



貯蔵穴SU04土層状態（東南から）



貯蔵穴SU06（東から）



貯蔵穴SU06遺物出土状況（西から）

貯蔵穴SU06土層状態（南から）

貯蔵穴SU06弥生土器出土状況（北から）

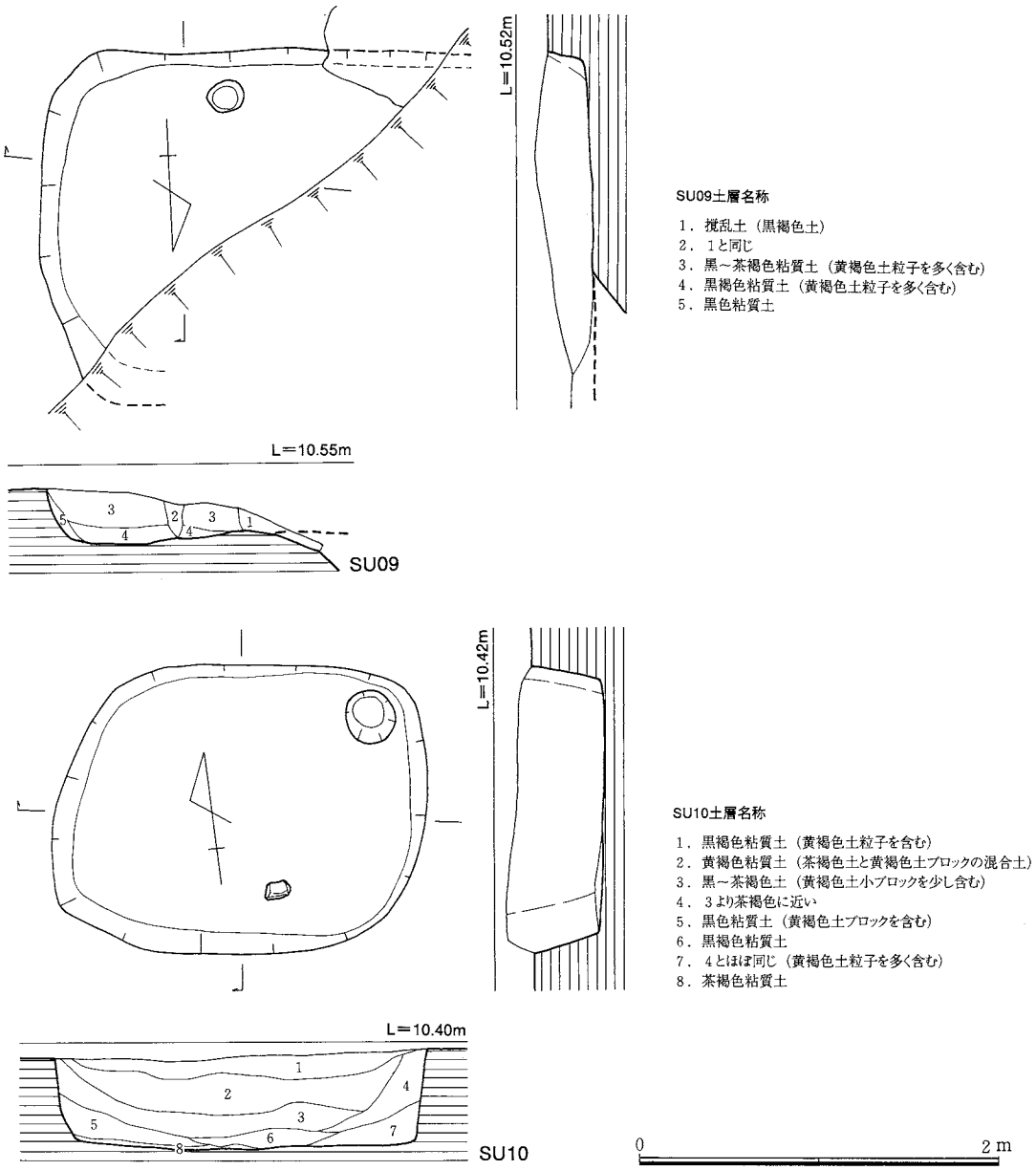


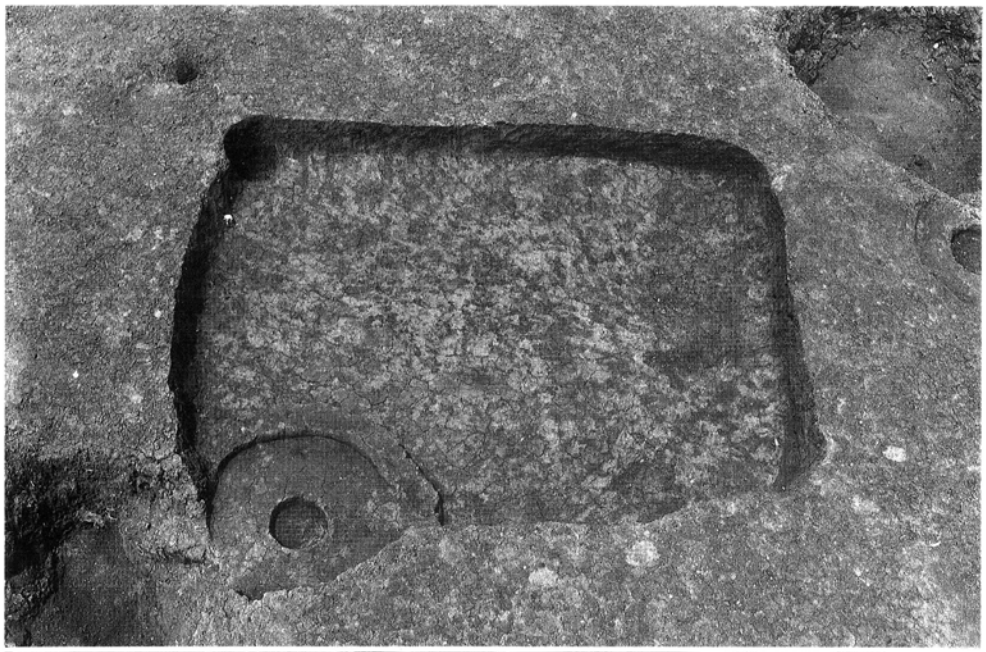
Fig. 14　貯蔵穴SU09・10実測図（縮尺1／40）

SU11（Fig.15）　調査区の南西側に位置し、南側に近接して貯蔵穴SU12が所在する。上面は畝の撹乱壙によって削平・破損を受けているが、遺存状態は良好である。上部の平面形は、撹乱壙のため不整円形を、底面は不整楕円形を呈している。断面形はフラスコ状を呈している。底面は中央が浅い皿状に窪んでいる。上面の直径は約49cm、底面の最大径は約112cm、深さ77cmを測る。

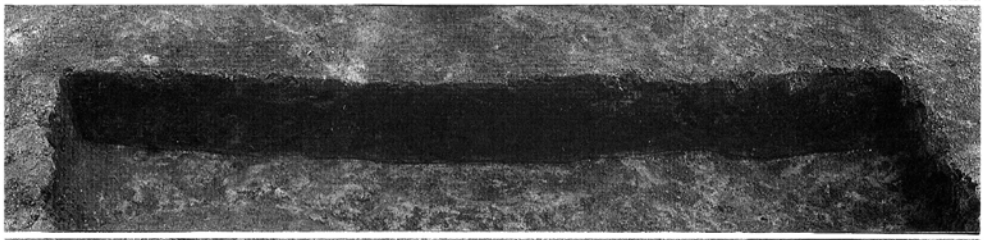
覆土は、黒色粘質土、黒褐色粘質土、黒灰色粘質土を主体としている。

遺物は、弥生土器甕、壷形土器、石斧未製品、黒曜石等が出土した。

SU12（Fig.15）　調査区の南西側に位置する。上面は畝のため削平と撹乱を受けているが、遺存状

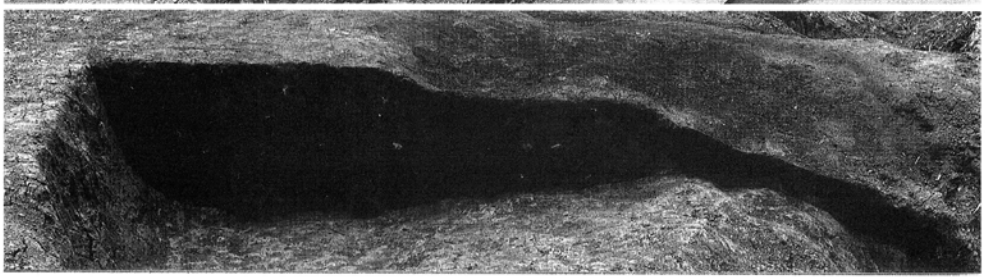


貯蔵穴SU08（北から）



貯蔵穴SU08
土層状態（南から）

貯蔵穴SU09（北から）



貯蔵穴SU09
土層状態（東から）

貯蔵穴SU10（南から）

貯蔵穴SU10土層状態（南から）

態は良好である。上面と底面の平面形は、不整円形を呈している。断面形はフラスコ状を呈しているが、上部出入口は筒状の首部を形成しており、袋部との境の肩部には強い段がある。底面は、浅い皿状のやや中窪みを呈していた。上面の直径は約38㎝、底面径は115㎝、最大径は約124㎝、深さ約95㎝を測る。

覆土は、黒褐色粘質土を主体としている。

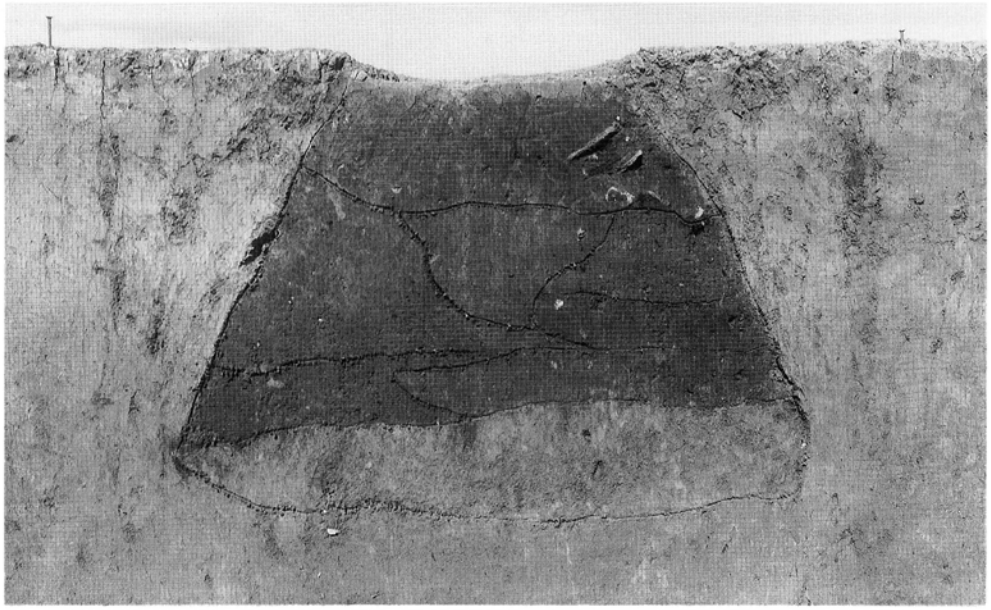
遺物は、突帯文土器甕、弥生土器甕・壷形土器、黒曜石等が出土した。

(5) 貯蔵穴出土遺物（Fig. 16・17）

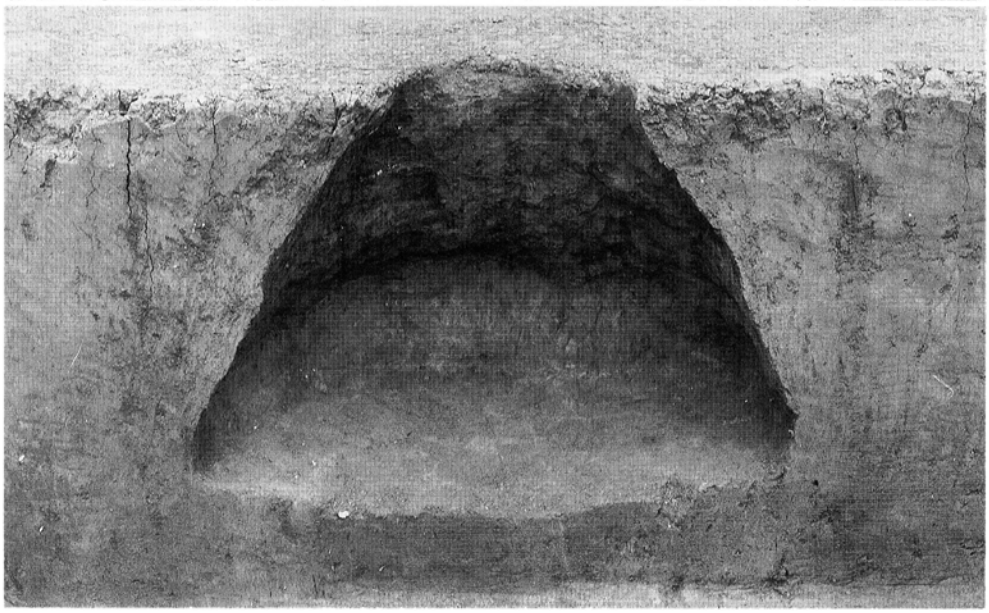
SU04出土遺物（Fig.16－1～6）　1・2・4は、縄文時代晩期土器、3・5は、弥生時代前期土器、6は、中世須恵器である。

1・2・4は突帯文系土器で、1は深鉢、4は浅鉢の底部片、2は甕である。2の外面には条痕が

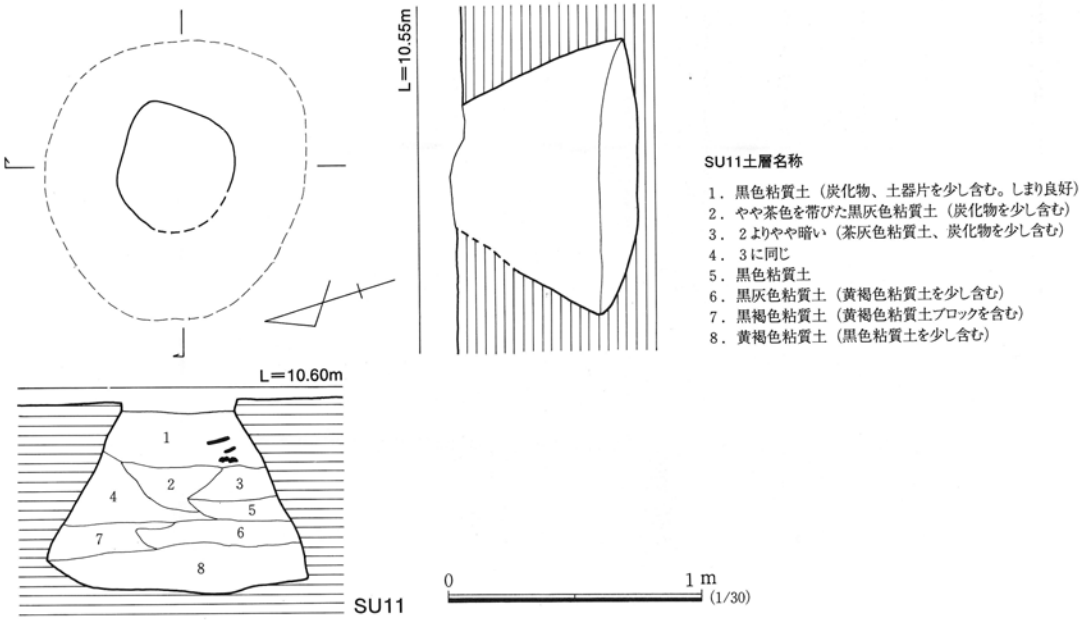
貯蔵穴SU11（南東から）



貯蔵穴SU11土層状態（西から）



貯蔵穴SU11完掘状態（西から）



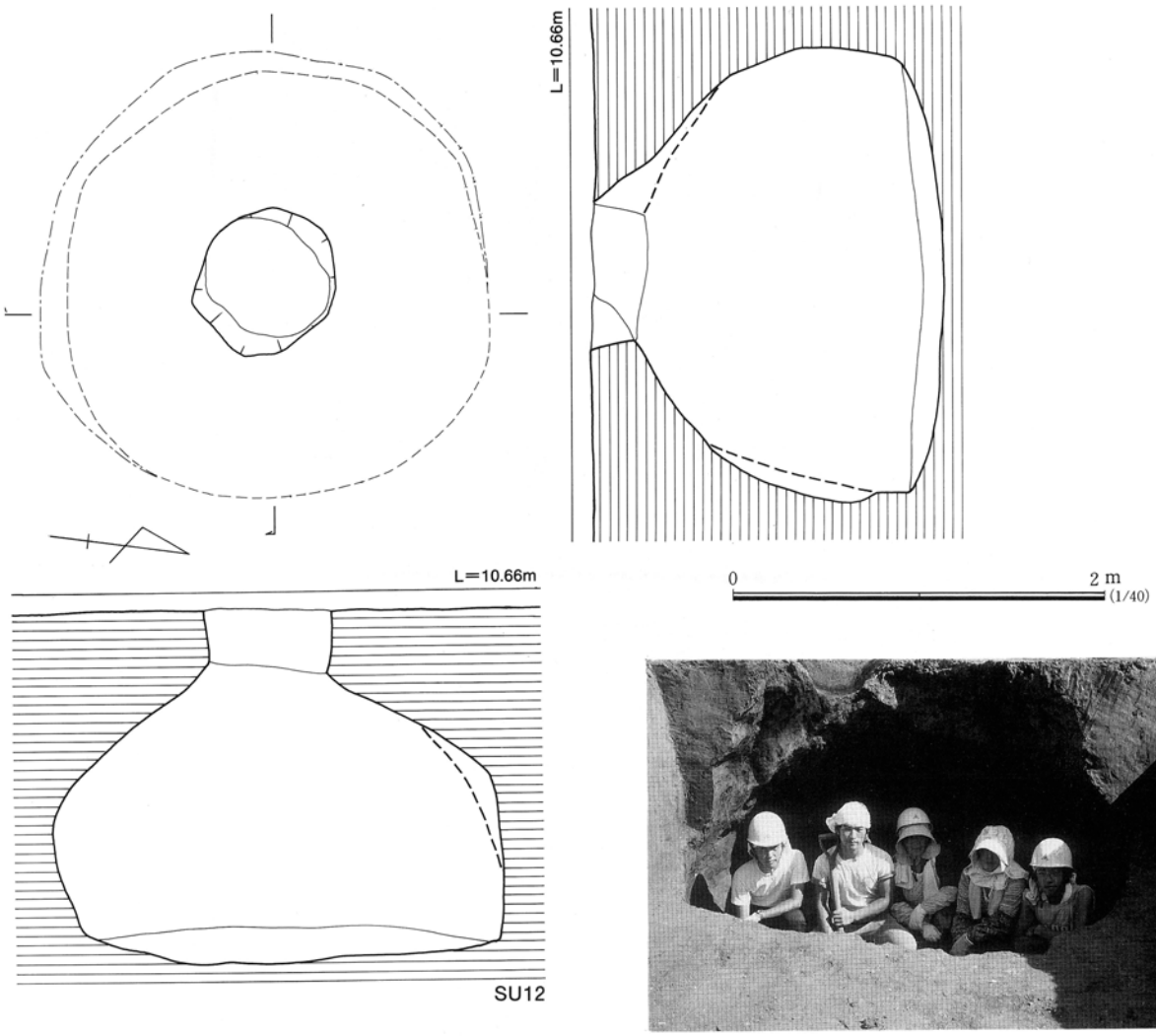
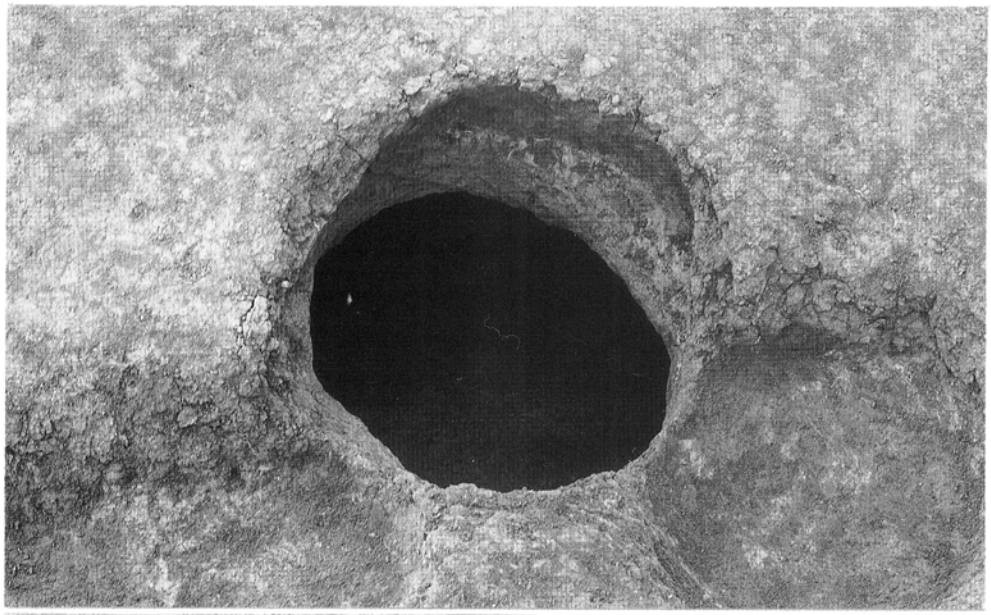
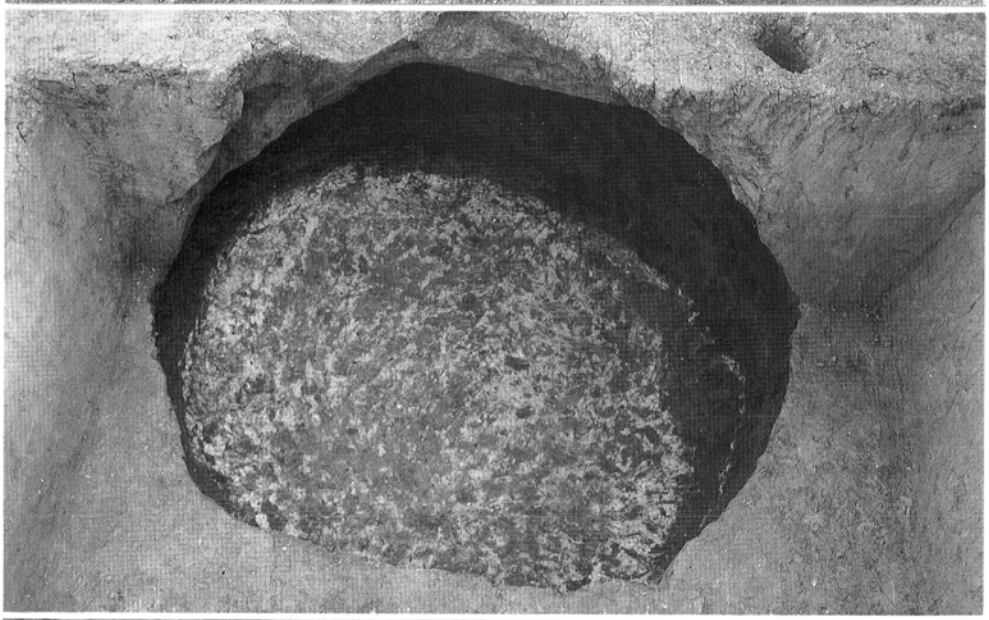


Fig. 15　貯蔵穴SU11・12実測図（縮尺1／30・1／40）

貯蔵穴SU12の大きさ比較（北から）



貯蔵穴SU12（東から）



貯蔵穴SU12完掘状態（東から）

貯蔵穴SU12断面の状態（東から）

施され、口縁端部外面に刻目突帯を貼り付けている。

3・5は、弥生土器の壷形土器片で、5の外面には貝殻腹縁を用いて重弧文を施している。6は朝鮮系の須恵器片で、内外面には水引き痕と考えられるヨコナデ調整がみられる。流れ込みの遺物と思われる。

SU06出土遺物（Fig.16－7～10） いずれも弥生時代前期土器で、7～9は壷、10は甕である。

8は大型の壷で、体部と肩部の境に2条のヘラ描き沈線を施している。内面はナデ調整である。7は頸部と肩部の境に明瞭な区切りがなく、頸部は緩やかに内傾する。9の外面にはヘラ描きによる4条のヨコ方向の沈線を施し、下位の沈線の間には複線の斜行文を施している。10は如意形を呈した口縁部の甕で、胴部はあまり張らない。外面の上位には煤が広い範囲に付着している。

SU08出土遺物（Fig.16－11） 11は弥生土器の甕底部片で、平底と思われる。内外面は磨滅している。

SU09出土遺物（Fig.16－12～14） 12は、縄文時代晩期土器、13は、弥生時代前期土器、14は石製品である。

12は突帯文系土器の甕底部と考えられ、薄手の作りであるが、外面端部が張り出している。13は弥生土器の甕で、くの字形に近い口縁部である。内面に段を有している。口縁端部には刻み目が施されているように見えるが、磨滅のためはっきりしない。

14は覆土上層より出土。玄武岩製の敲石で、厚手の角礫、又は剝片を利用している。敲打使用のため、角は丸くなり楕円形状を呈する。且つ、全体に風化が進んでいる。最大長は5.3cm、最大厚は3.5cmを測る。

SU10出土遺物（Fig.16－15～21） 15～18は、弥生時代前期から中期の土器である。

15・18は甕、16・17は壷である。15の甕の口縁部は、細片のため定かではないが、内側への張り出しの小さい逆L字形口縁部と考えられる。18は底部片である。

17は前期前半の小型壷で、口縁部外面を肥厚させて、頸部との境には強い段をもつ。端部を丸く、且つ細く仕上げている。内外面は磨滅している。16は大型壷の口縁部片で、口縁部の外面を肥厚させている。内面は粗いヨコハケ調整である。

19～21は石製品で、19は石包丁、20は石斧片、21は砥石である。19は覆土下層より出土。堆積岩製で、現存長5.1cm、厚さ0.5cmを測る。細身の石包丁で、両刃である。表面は風化のため、剝離が著しい。20は、玄武岩製の磨製石斧未製品の破片で、基部の一部である。表面は風化している。21は、砂岩製の砥石で、二次火を受けて淡茶色を呈する。形状は、平面形が長方形状を呈し、上・下面・両側面及び、下小口面を面取り整形している。砥面は上下主面及び、両側面の4面を利用している。最大長は13.1cm、最大幅は8.4cm、最大厚は6.0cmを測る。

SU11出土遺物（Fig.17－22～27） いずれも弥生時代前期の土器である。22～25は甕、26は壷である。

22～25の甕の口縁部は、いずれも如意形を呈している。22は擬似口縁部の破片で、口縁部の接合部分で分離している。外反は小さい。24は口縁部と胴部の境は内外面を削り込むことで、段を形成している。25は口縁部外面に粘土を貼り付けて肥厚させるもので、外面に段を有している。23の口縁端部には刻み目を施す。調整は外面がタテハケ調整で、口縁部外面はナデ消している。24の口縁部外面

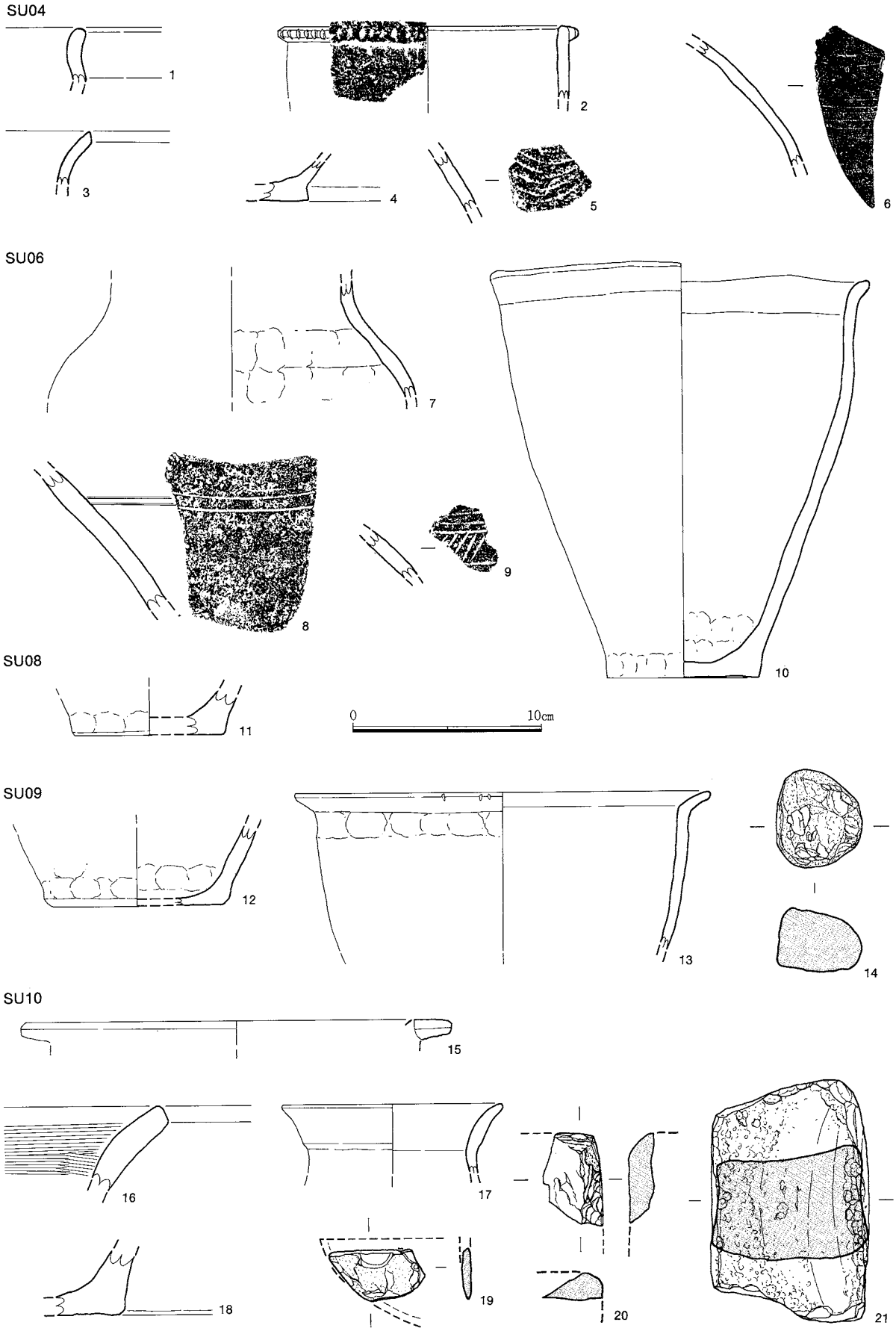


Fig. 16　貯蔵穴SU04・06・08～10出土遺物実測図（縮尺1／3）

はタテハケ調整後、上部をナデ調整している。内面調整は、24・25の口縁部はヨコハケ調整、22はヨコナデ調整、胴部の調整は、22・24がナデ調整で、23はタテ方向のナデ調整である。

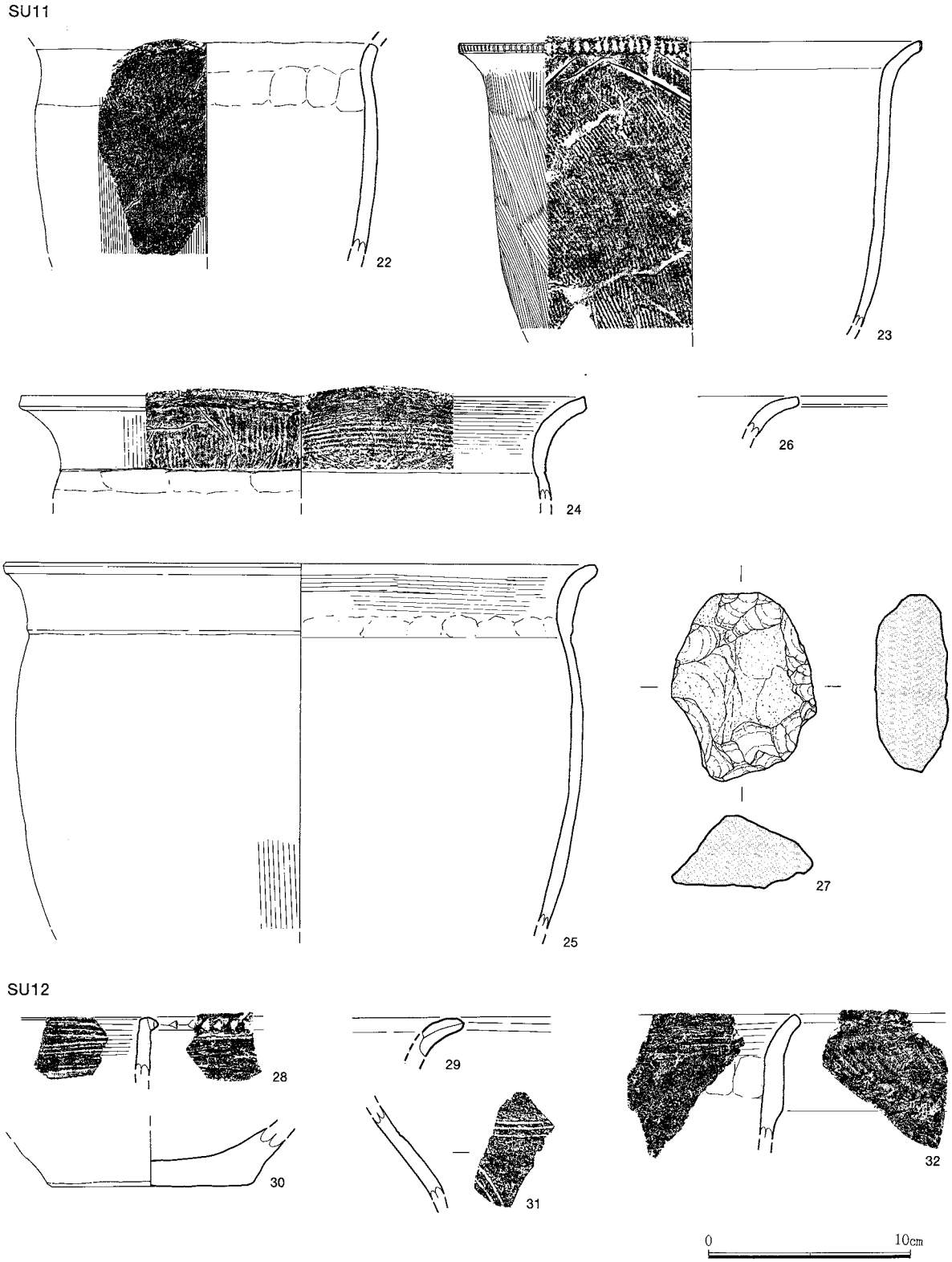
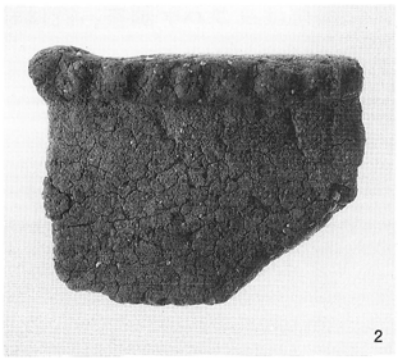
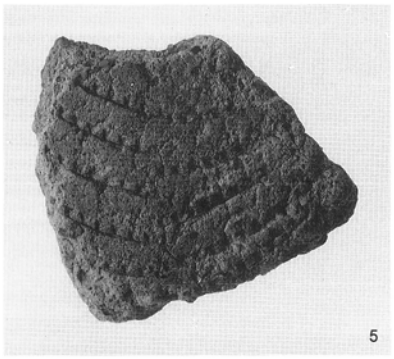
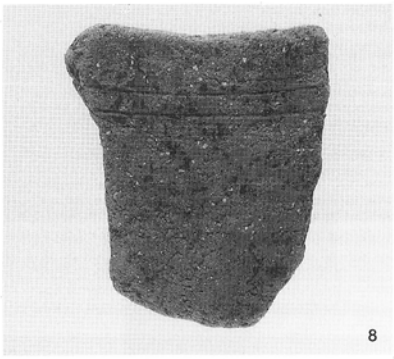
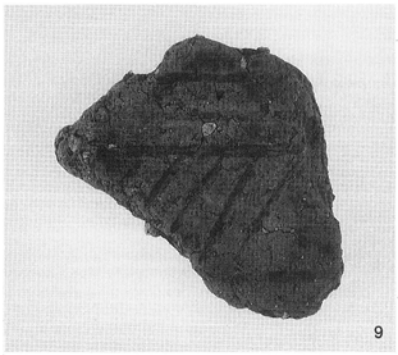


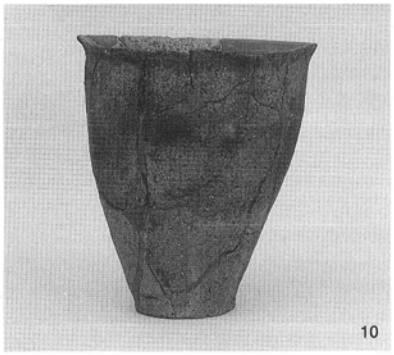
Fig. 17　貯蔵穴SU11・12出土遺物実測図（縮尺1／3）

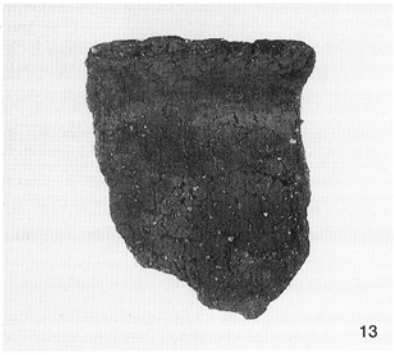


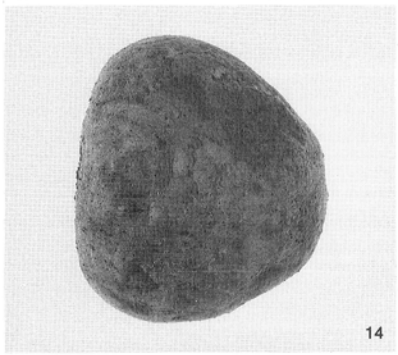


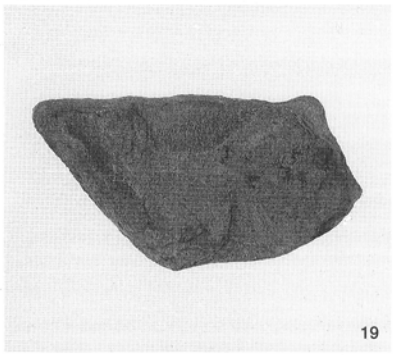


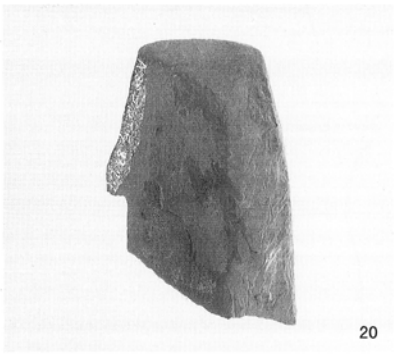


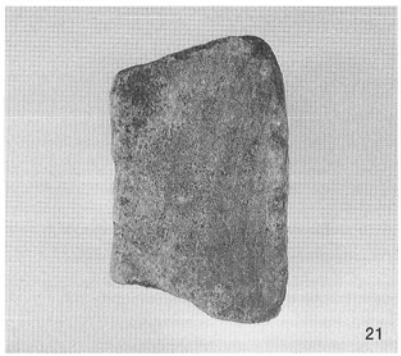


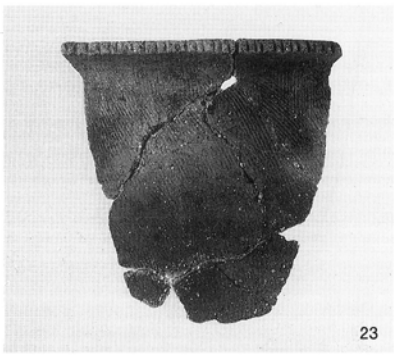


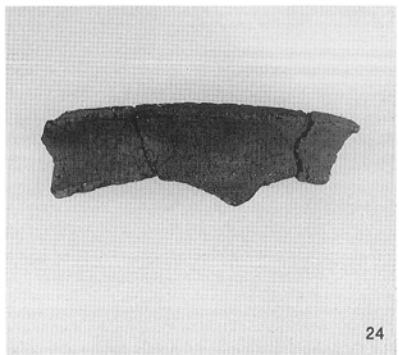


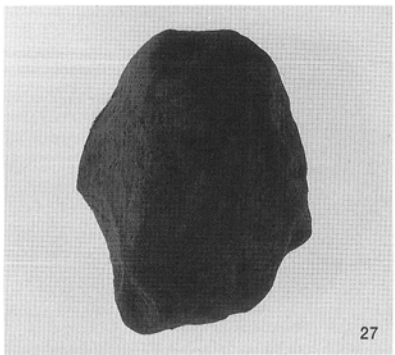


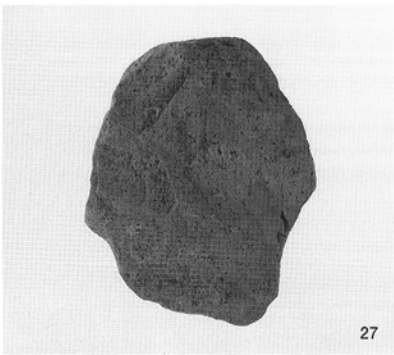












貯蔵穴SU04・06・09～11出土遺物　※数字は、実測図の番号に一致する。

貯蔵穴SU12出土遺物　※数字は、実測図の番号に一致する。

27は玄武岩製で、横長の剝片を加工したものである。最大長は9.7㎝を測り、横断面形は菱形状を呈する。片側から面取りのために縁辺の剝離調整が行われている。小型石斧の未製品と考えられる。

SU12出土遺物（Fig.17－28～32）　28は、縄文時代晩期土器、29～32は、弥生時代前期から中期の土器である。

28は突帯文土器で、28の内外面には粗いヨコ方向の条痕を施し、口縁端部外面には細く、高い刻目突帯を貼り付けている。

29～31は、弥生土器の壷で、29は口縁部片、30は底部である。29は、外反した口縁部の内側に粘土を貼り付けて肥厚させている。31の外面には、ヘラ描きの３条の沈線で頸部と体部の境に区画線を設け、その下位には重弧文を施している。30は壷の底部片で、体部は外に大きく開いている。磨滅が著しい。

32は弥生土器の甕で、口縁部は如意形を呈している。又、外面に粘土を貼り付けて肥厚させており、外面には胴部との境に強い段がある。口縁部内面はヨコハケ調整、外面はナナメ方向のヘラナデがみられる。

(6)　土壙墓（SX）

平安時代末から鎌倉時代の土壙墓を１基を検出した。調査区の東南側に位置している。削平のため、遺存状態は悪い。第４次調査で検出した土壙墓の分布状況等からこの周辺に中世墓が集中していたことが推測できる。

SX01（Fig.19）　長軸方向を大略東西方向にとっている。上部は既に削平されている。墓壙の平面形は隅丸長方形、断面形は逆梯形を呈している。小口部分の壁が特に丸く削り込まれている。底は平坦であるが、西側が高くなっている。最大長は約120㎝、幅は約60㎝、深さ約35㎝、内底の最大長は約90㎝を測る。

遺物は、墓壙底部の北側壁に沿って中国製青磁の碗２点及び、土師器糸切り底の皿３点が、上部からずり落ちた状態で出土した。

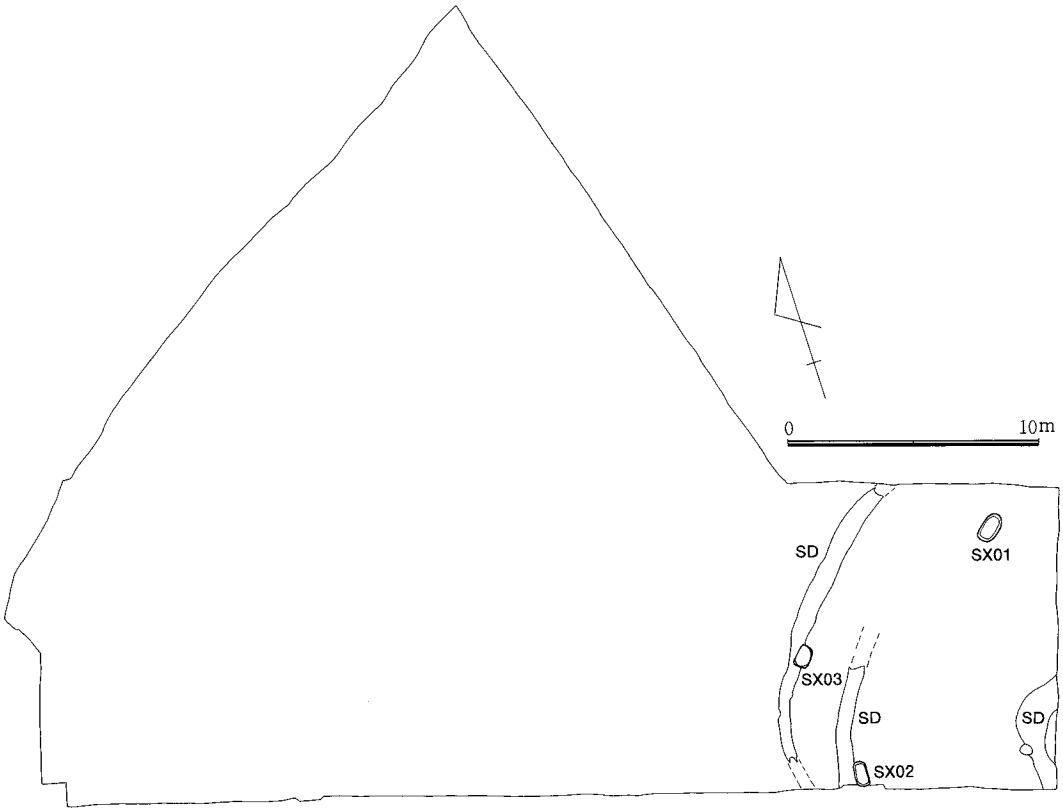


Fig. 18　第80次調査 土壙墓、火葬墓配置図（縮尺1／300）

(7)　土壙墓出土遺物　(Fig. 20)

SX01出土遺物（Fig.20－１～５）　１～３は、土師器糸切り底の皿で、いずれも外底部に板状圧痕がある。口径は8.8～9.4cm、最高は110～114cmを測る。

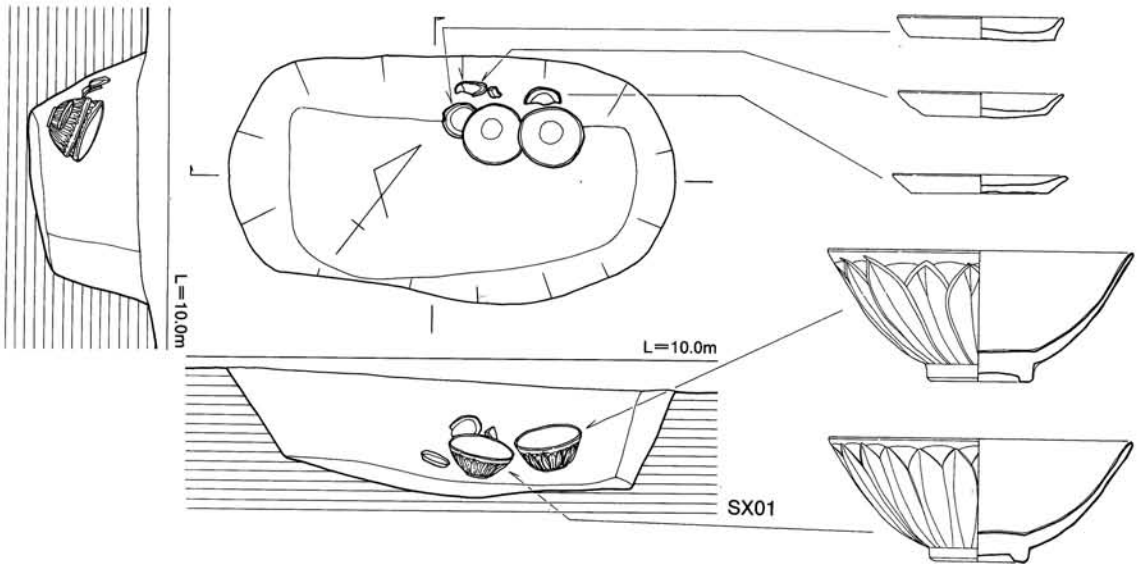
４・５は中国龍泉窯系の青磁碗で、いずれも完形品である。外面には複弁の鎬蓮弁文を施し、釉は高台外面まで施している。口径は16.2cm・16.3cm、高さは5.4cm・5.8cmを測る。

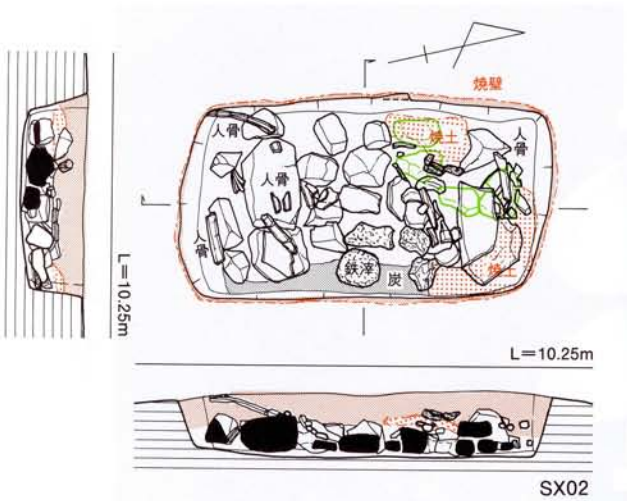
(8)　火葬墓（SX）

調査区の東南側に遍在する火葬墓を２基検出した。いずれも削平を受け、遺存状態は悪い。従来の例から、小田部地区においては土壙墓や火葬骨の蔵骨器等を除いて火葬墓の発見例がなく、主に有田地区の第77次調査地点周辺の高台において発見されることが多い。

SX02（Fig.19）　南側境界地に位置することや溝SD02と西側を接するため墓壙の南側及び、西側の一部が削平を受け、遺存状態は悪い。長軸方向を大略南北方向にとる。墓壙の平面形は、隅丸長方形で、断面形は逆梯形を呈している。墓壙の最大長は約97cm、最大幅は約53cm、深さ約18cm、底面の長さ約88cmを測る。墓壙の周壁は、最大で約２cmの厚さに焼けていたが、その焼壁の範囲は、深さ８cmの敷石上面までであった。

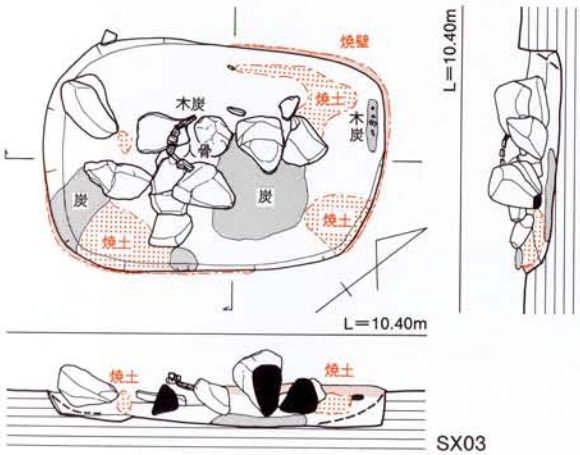
墓壙内の底面には角石を敷いている。すなわち長さ12～25cm大の角ばった石と大振りの鉄滓塊を用





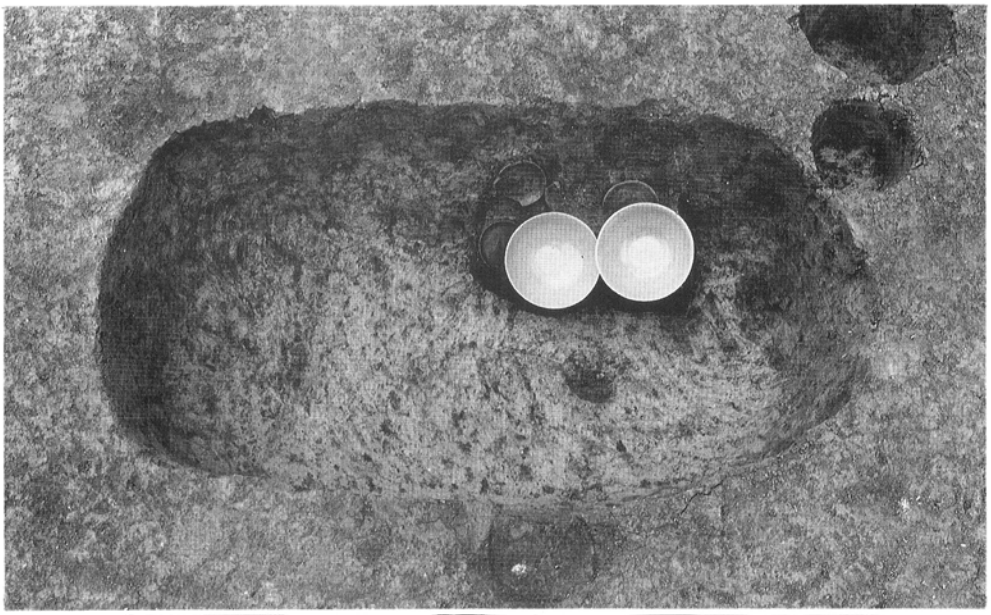
火葬墓SX02人骨出土状況（東から）

火葬墓SX02人骨出土状況（北から）

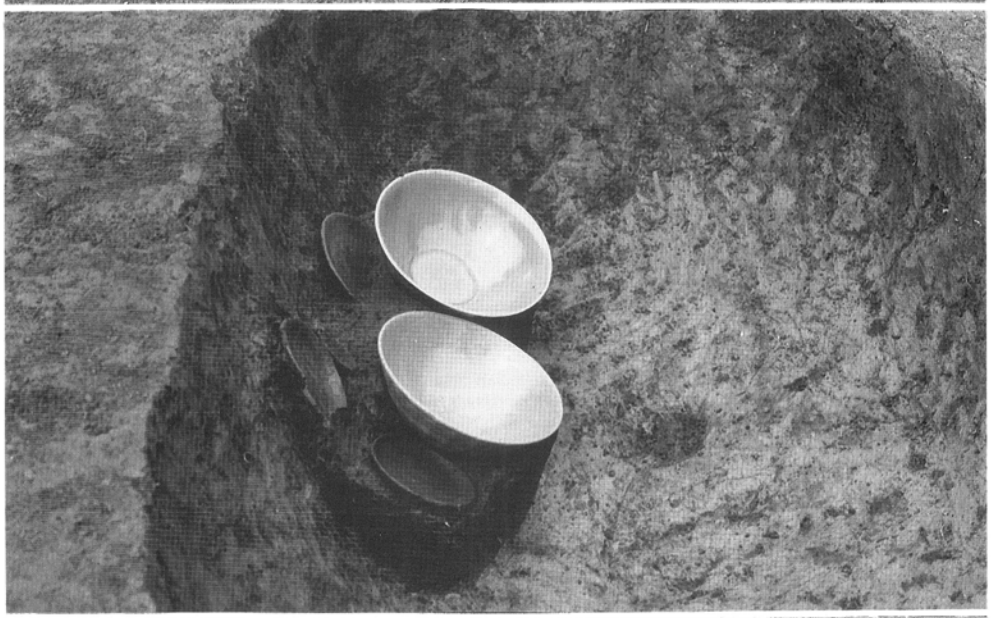


0 1 m

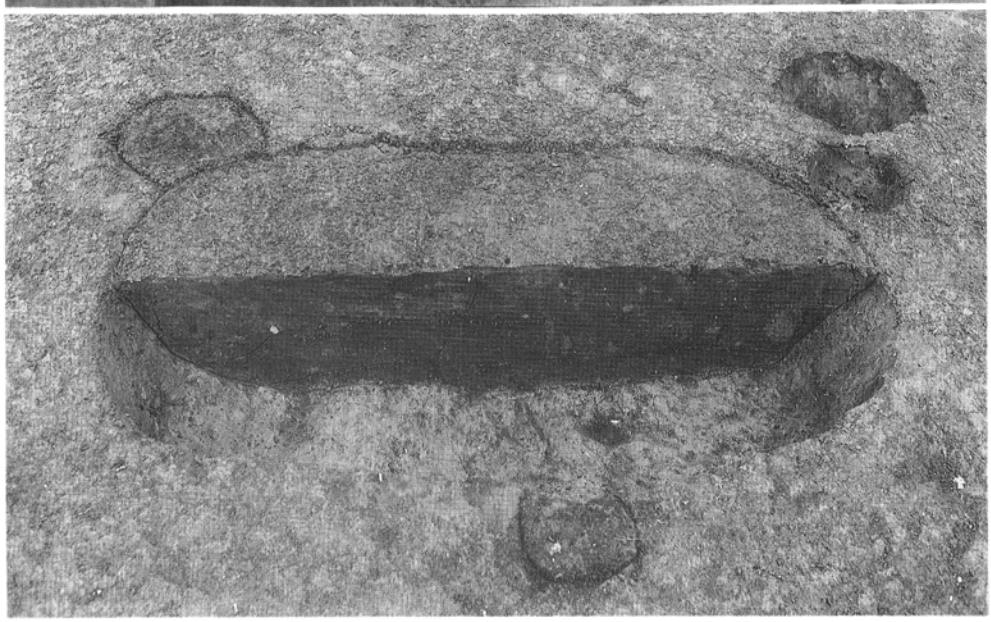
Fig. 19　土壙墓SX01、火葬墓SX02・03実測図（縮尺1／20）



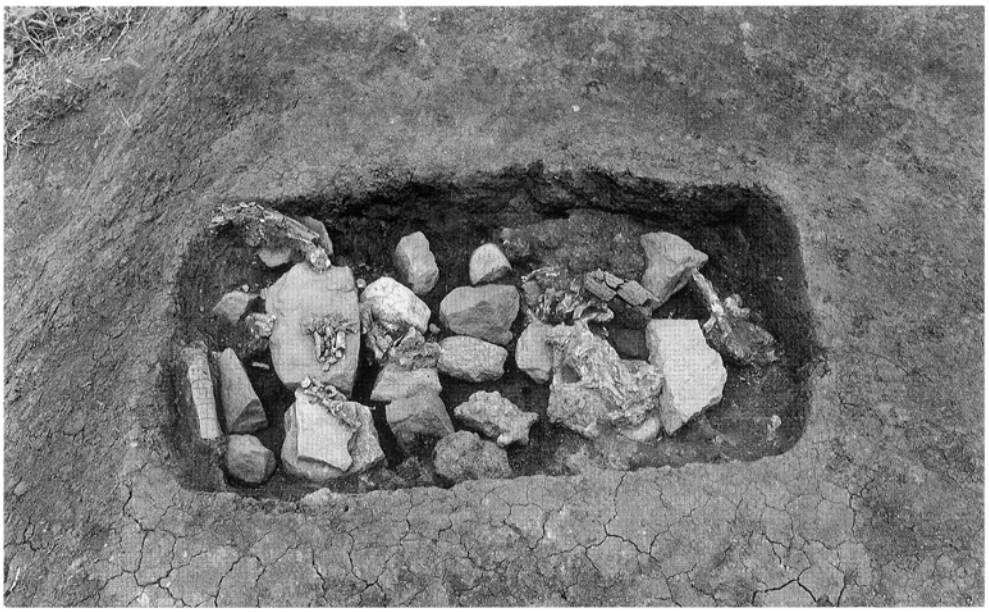
土壙墓ＳＸ01（南東から）



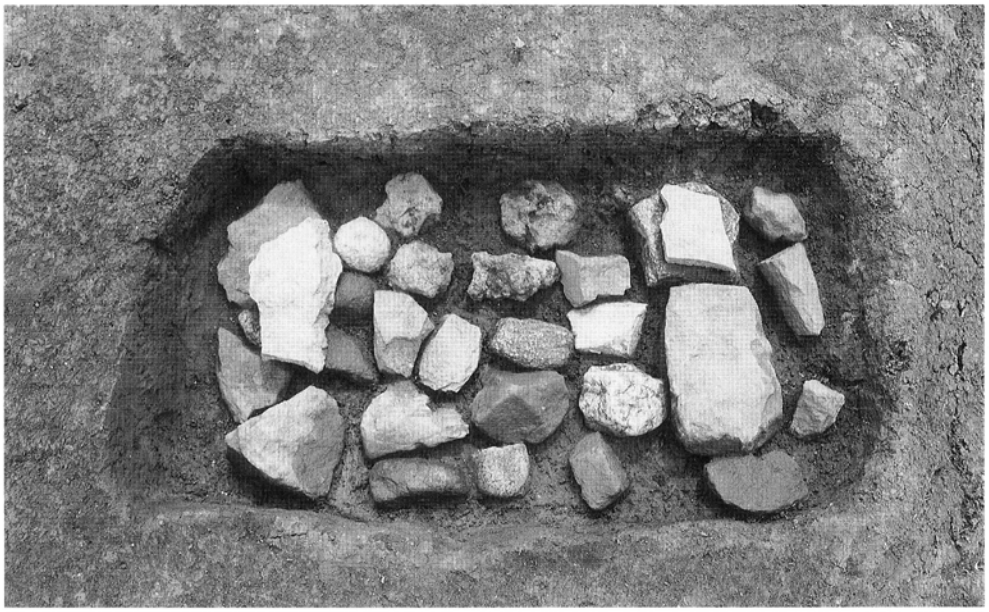
土壙墓ＳＸ01遺物出土状態（南西から）



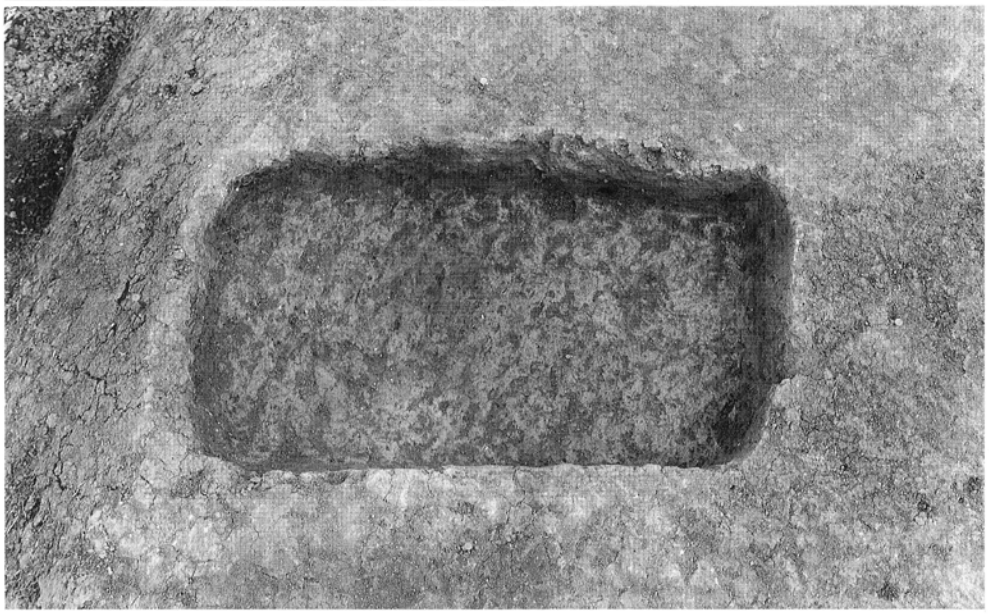
土壙墓ＳＸ01土層状態（南東から）



火葬墓SX02（東から）



火葬墓SX02（西から）



火葬墓SX02完掘状態（東から）

火葬墓SX03（南東から）

火葬墓SX03完掘状態（南東から）

いて東西方向の横５列に並べているもので、南側から第２列目は特に大きな20～25㎝大の石を２個据えている。ちなみに鉄滓塊は一ケ所に固まって置かれており、４個用いられている。これらの敷石の上面は焼けており、上部には、焼土、炭化物、骨片が沢山散布していた。

墓壙内からは、副葬もしくは祭祀と考えられる遺物は出土しなかったが、敷石として用いられた中から砥石が１点、鉄滓４点が出土した。

SX03（Fig.19）　畑の畝及び、溝SD03と切り合うため墓壙の削平は著しい。長軸方向を大略東南から西南方向にとっている。上面の平面形は、不整の隅丸長方形、底面も同様である。断面形は逆梯形を呈しているが、元来はU字状を呈していた可能性がある。最大長は約90㎝、最大幅は約62㎝を測る。

墓壙の周壁は、最大で約２㎝の厚さに焼けていたが、その範囲は、墓壙底面までは達していない。

墓壙内の底面には10～18㎝大の角石を敷いていたが、SX02に比べて敷石の大部分が抜かれている。遺存状態が悪いため敷石は規則性に乏しいが、横方向に一列、縦方向に一列の石列が認められるので、

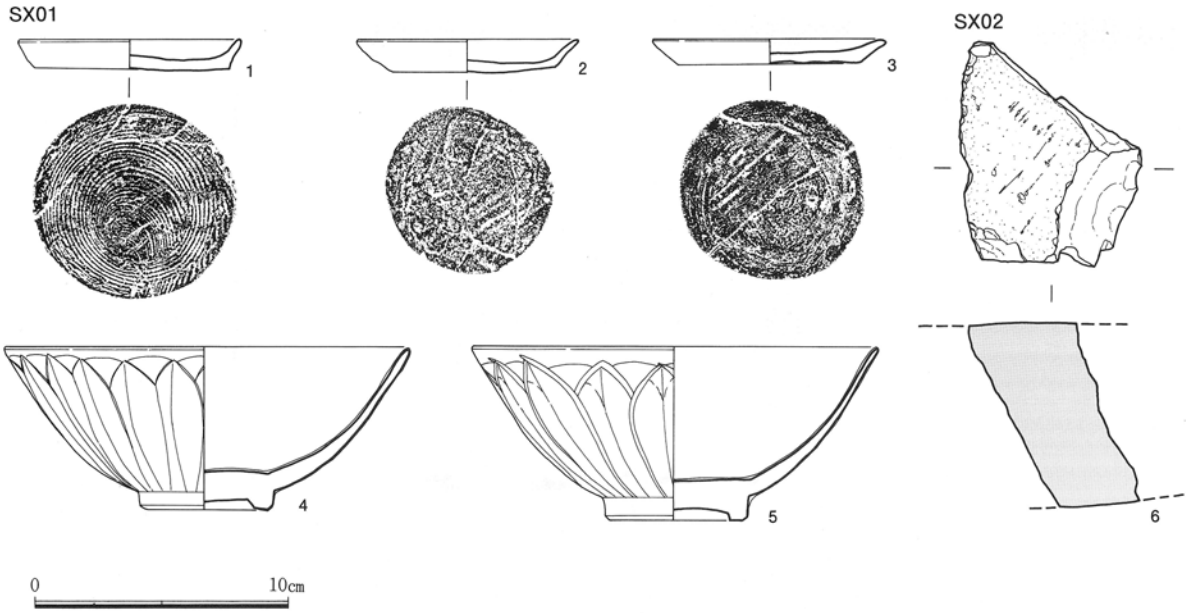
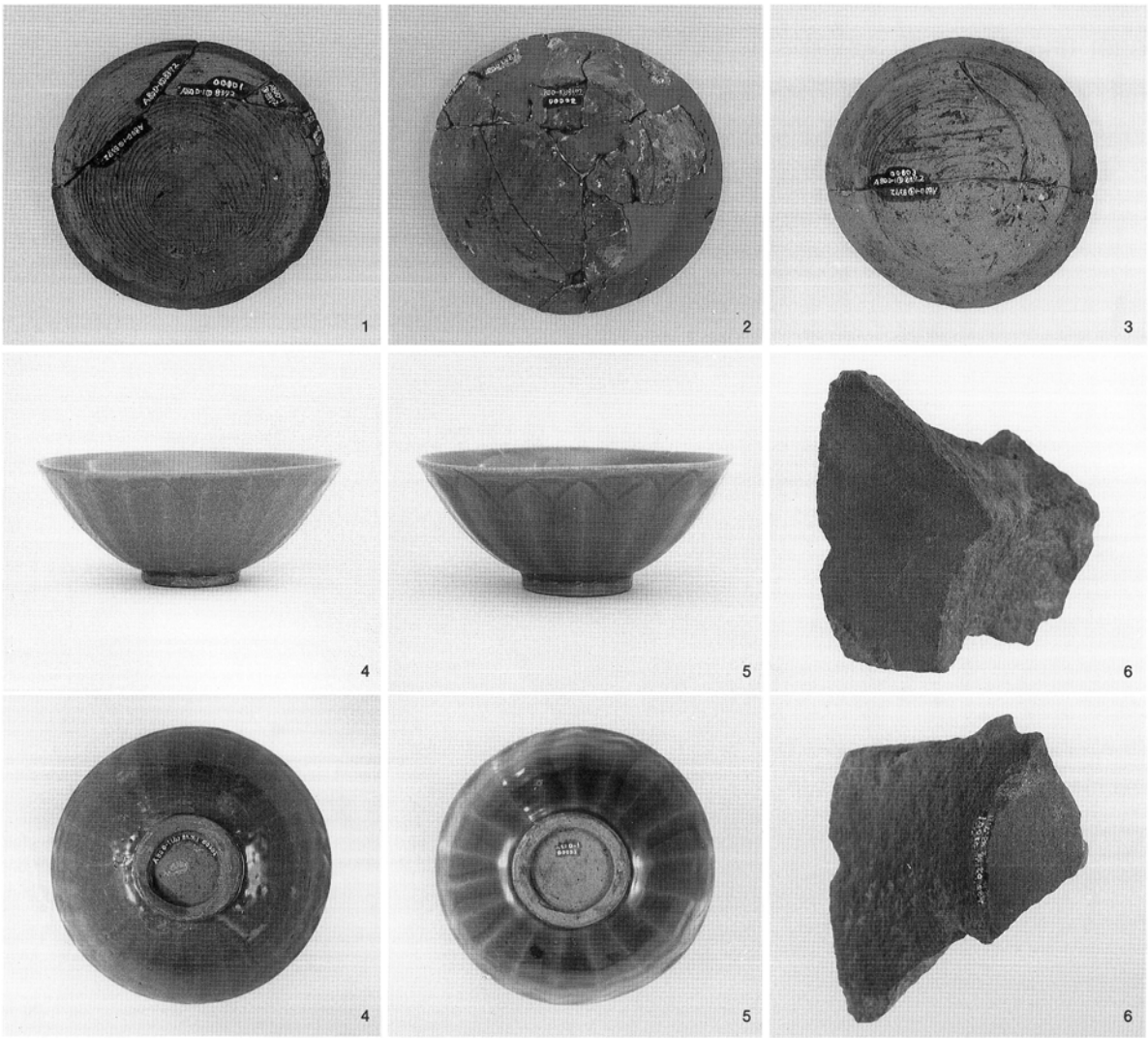


Fig. 20　土壙墓SX01、火葬墓SX02出土遺物実測図（縮尺1／3）



土壙墓SX01、火葬墓SX02出土遺物　※数字は、実測図の番号に一致する。

SX02と同様の敷石が施されていたものと考えられる。これらの敷石の上面は焼けており、更にこの敷石周辺及び、墓壙底面には焼土、炭化物、骨片が沢山散布していた。

墓壙内からは、副葬もしくは祭祀と考えられる遺物は出土しなかった。

(9) 火葬墓出土遺物 (Fig. 20)

SX02出土遺物 (Fig.20－6) 6は砂岩製の砥石で、割材にするため砥石の両側小口部分を大きく欠き取っている。砥面には、A・Bの2面を利用している。

その他に鉄滓4点、焼骨多数が出土している。

(10) 掘立柱建物 (SB)

柱穴と考えられるpitは、調査区全体に分布しており、このうち掘立柱建物と考えられるもの13棟を検出した。いずれも畑の畝のため遺存状態は良好ではなく、一部の柱穴を欠くものもみられる。

柱穴は、いずれもローム層に掘り込まれている。

SB01 (Fig.22) 上面は削平を受けており、遺存状態は悪い。主軸方向は略南北の建物で、梁行1間、桁行2間の規模を有し、梁間は415cm (13.7尺) で、桁間平均は227cm (約7.5尺) を測る。柱穴掘方の平面形は隅丸方形又は、不整円形を呈し、柱穴直径は51～64cmを、柱根径は14～20cmを測る。

遺物は、弥生土器片が出土している。

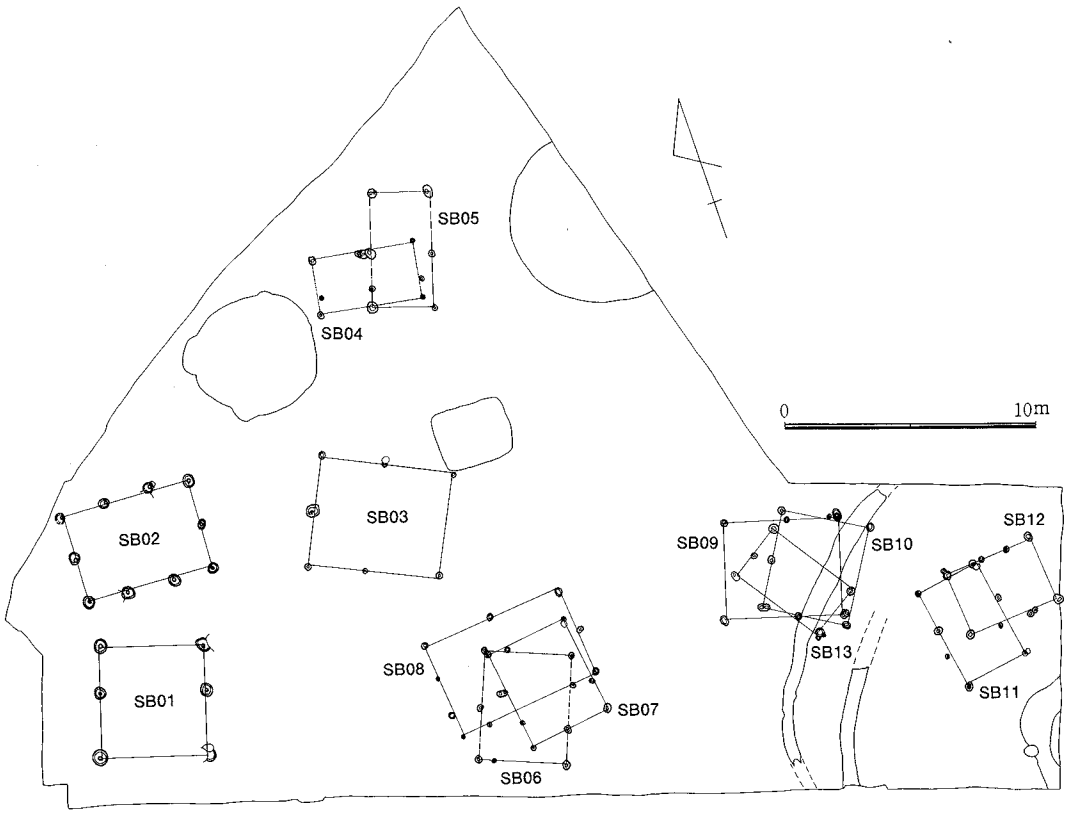


Fig. 21 第80次調査 掘立柱建物配置図 (縮尺1／300)

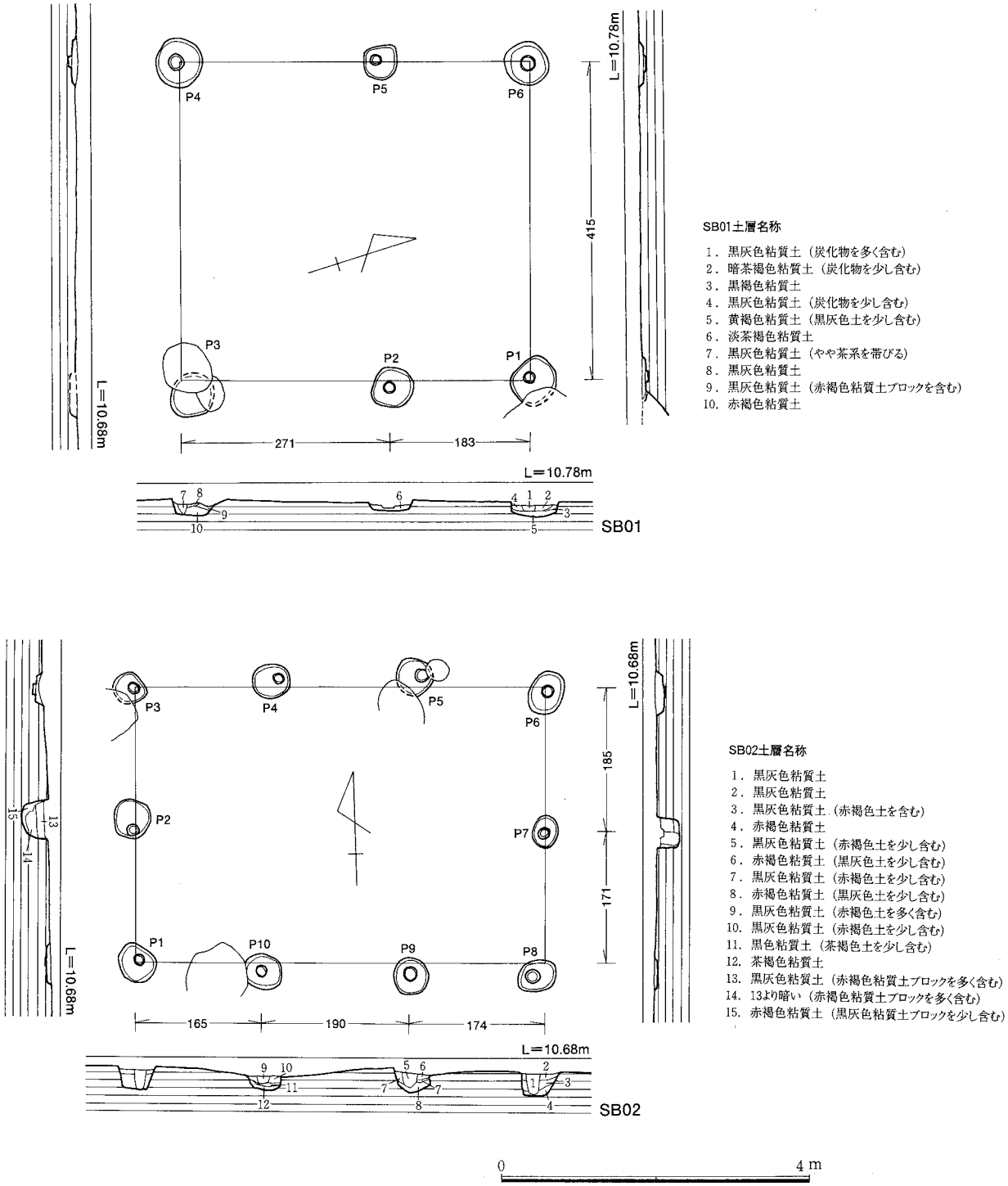
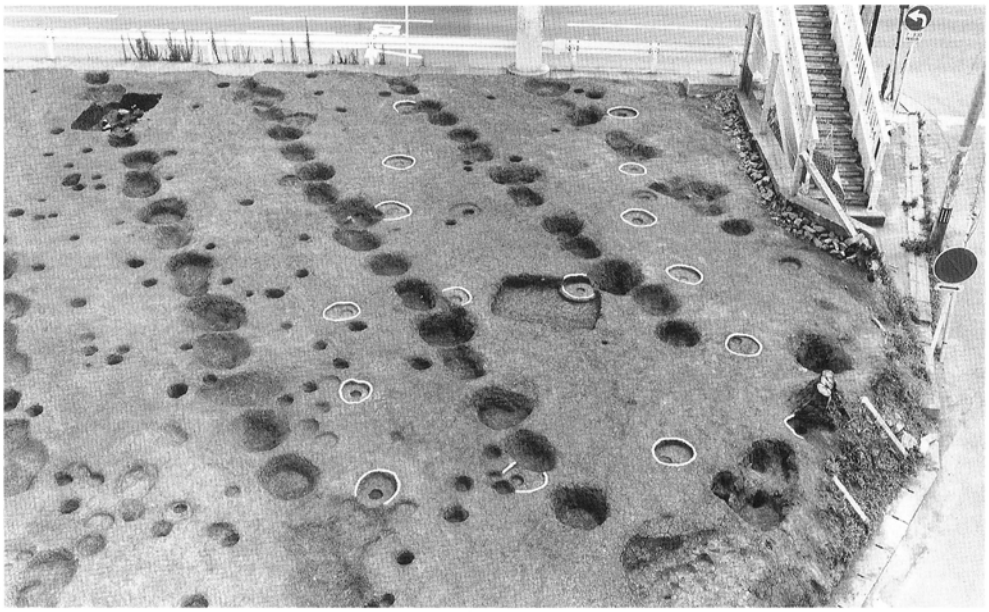


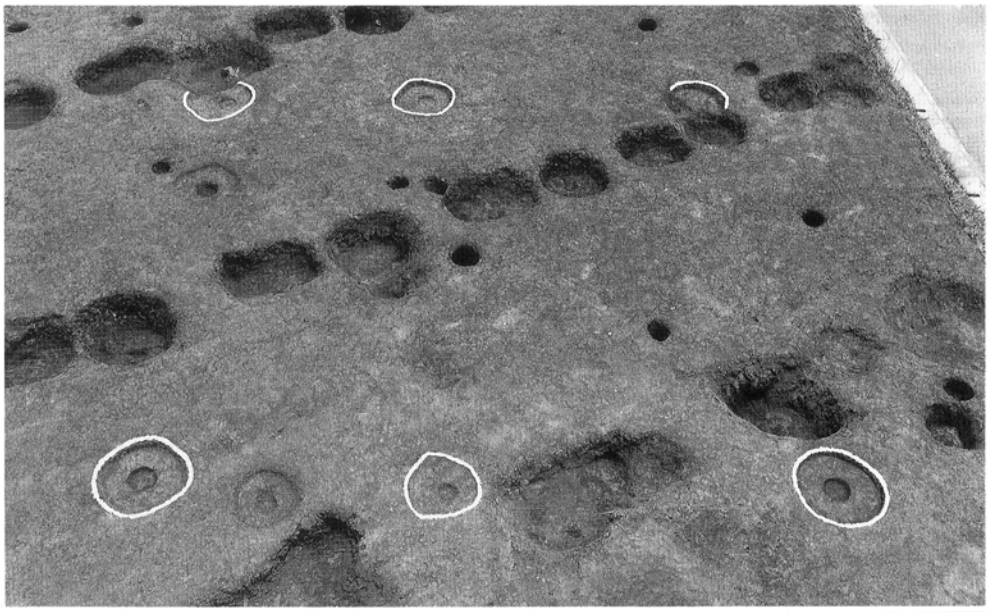
Fig. 22　掘立柱建物SB01・02実測図（縮尺1／80）

SB02（Fig.22）　上面は削平を受けており、又、畝のため柱穴の一部が破壊されている。貯蔵穴SU08を切っている。略東西方向の建物で、梁行２間、桁行３間の規模である。梁間平均は178cm（約5.9尺）で、桁間平均は約176cm（約5.8尺）を測る。柱穴掘方の平面形は、不整円形又は、楕円形を呈し、柱穴直径は40～57cmを、柱根径は16～18cmを測る。

遺物は弥生土器片が、Ｐ６・Ｐ７（ＳＰ57・59）から出土している。

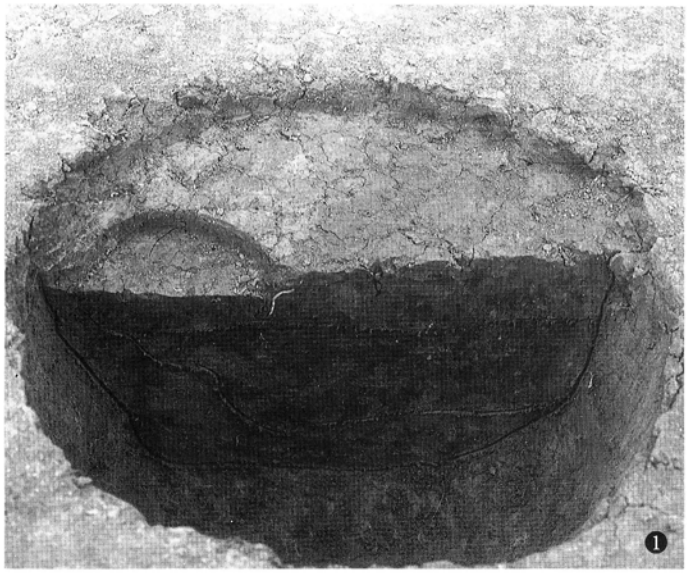


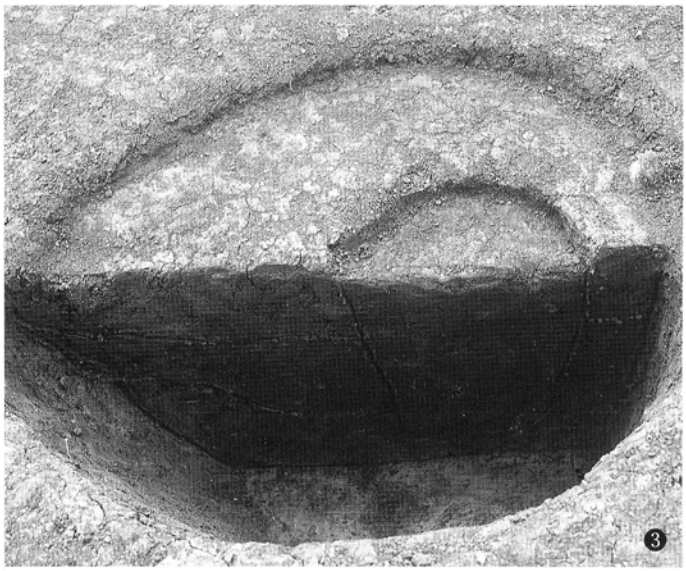
掘立柱建物SB01・02（北から）

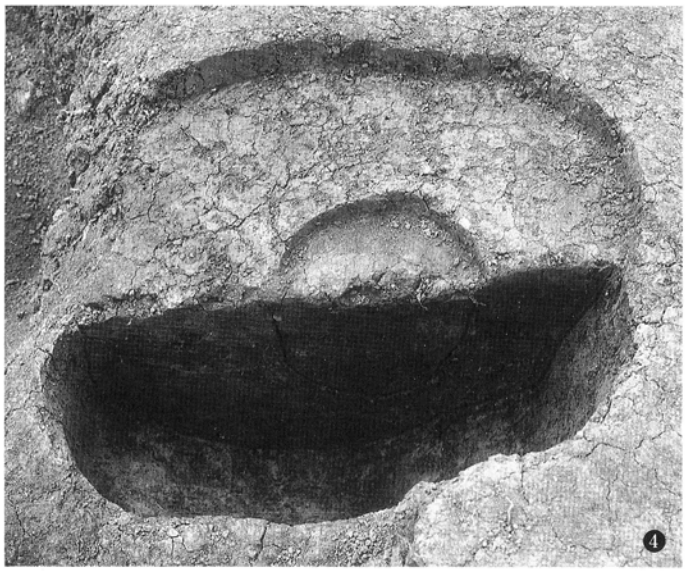


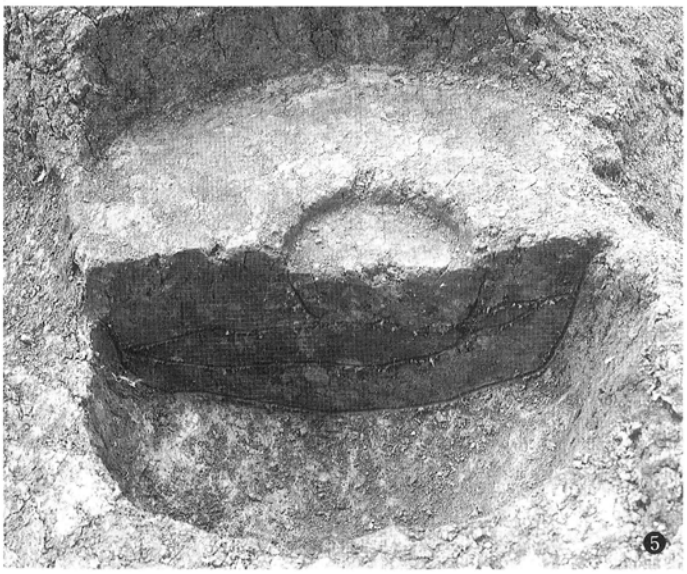
掘立柱建物SB01（西から）

掘立柱建物SB02（南から）









① 掘立柱建物SB02-P2（北から）

② 掘立柱建物SB02-P3（北から）

③ 掘立柱建物SB02-P8（北から）

④ 掘立柱建物SB02-P9（北から）

⑤ 掘立柱建物SB02-P10（北から）

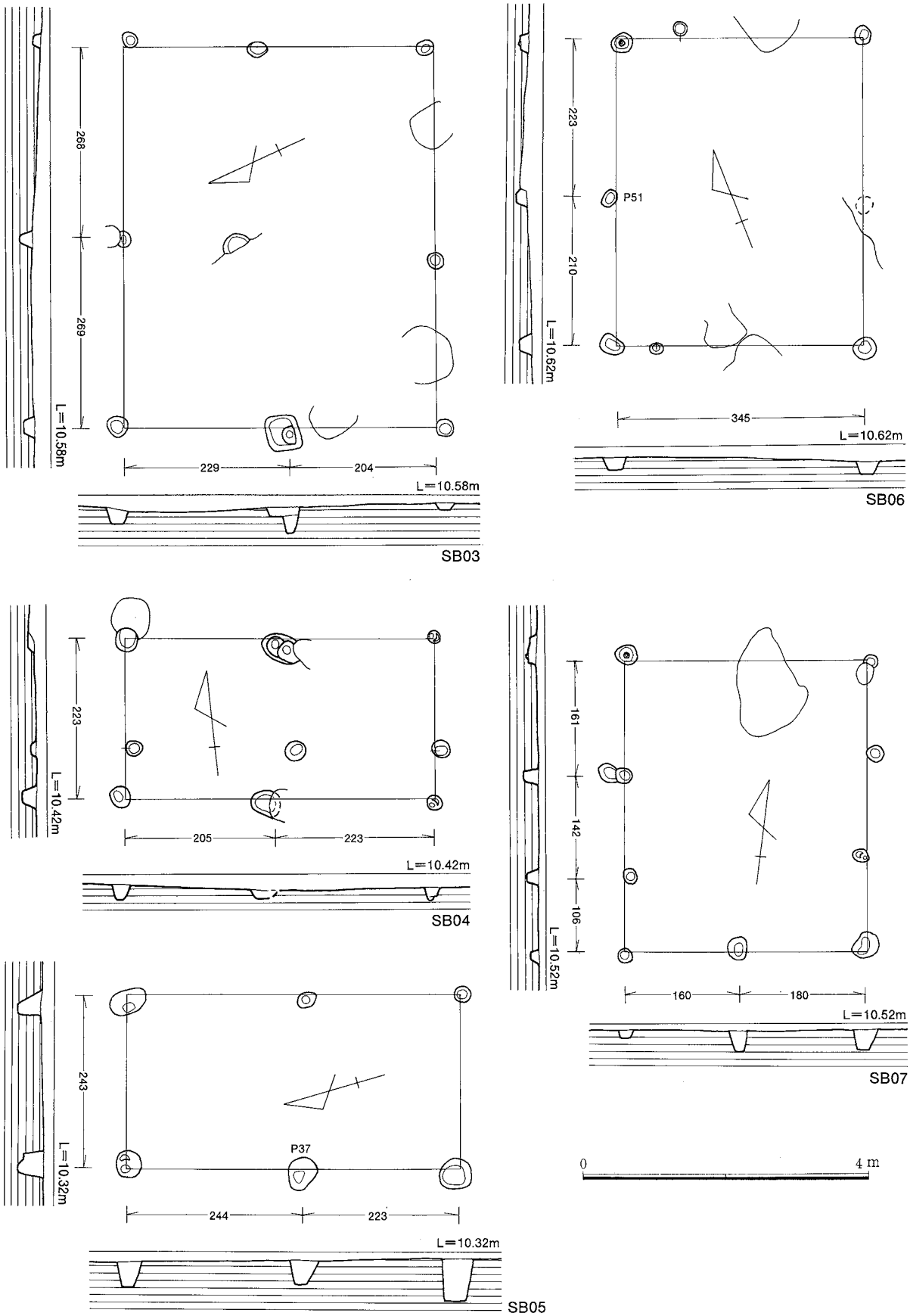


Fig. 23　掘立柱建物SB03～07実測図（縮尺1／80）

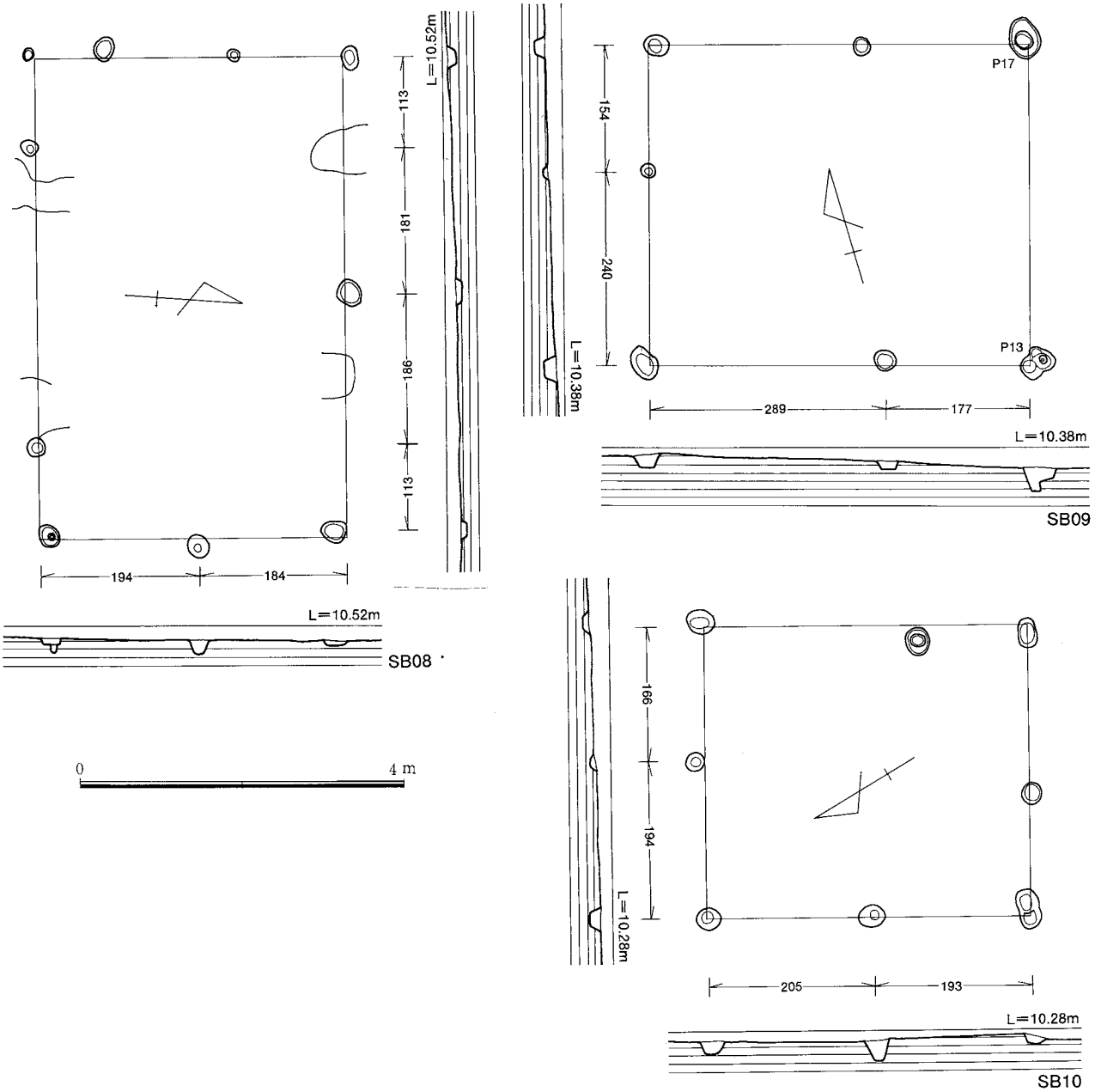


Fig. 24　掘立柱建物SB08～10実測図（縮尺1／80）

SB03（Fig.23）　上面は削平を受けており、又、畝のため柱穴の遺存状態は悪い。略東西方向の建物で、梁行２間、桁行２間の規模である。梁間平均は約217㎝（約7.2尺）で、桁間平均は約268㎝（約8.9尺）を測る。柱穴の大部分が掘方を削平され、柱根部分のみが遺存しているものが多く、柱穴規模は不明である。柱穴掘方の平面形は、隅丸長方形を呈し、最大の柱穴直径は30～51㎝を測る。柱根径は14～16㎝を測る。

遺物は、出土していない。

SB04（Fig.23）　上面は削平を受けており、又、畝のために一部の柱穴が削平されている。掘立柱建物SB05と切り合い関係にありSB05の柱穴に切られている。略東西方向の建物で、梁行１間、桁行

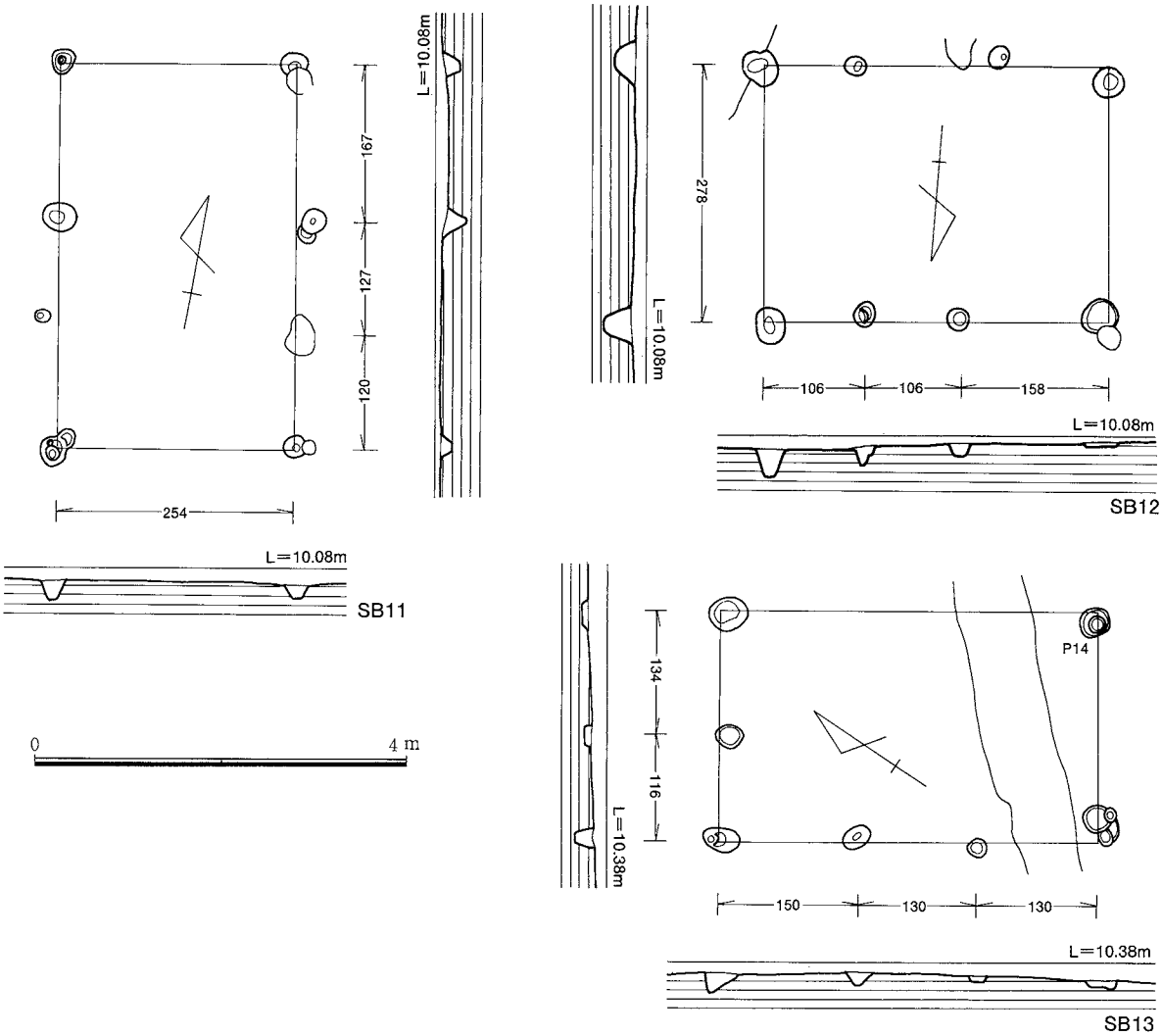


Fig. 25　掘立柱建物SB11～13実測図（縮尺1／80）

2間の規模である。梁間は約223cm（約7.4尺）で、桁間平均は214cm（約7.1尺）を測る。柱穴掘方の平面形は、不整円形又は、楕円形を呈している。柱穴直径は30～40cmを、柱根径は約16cmを測る。

遺物は、出土していない。

SB05（Fig.23）　上面は削平を受けており、また、畝のため一部の柱穴掘方が削平を受けている。掘立柱建物SB04を切っている。略南北方向の建物で、梁行1間、桁行2間の規模である。梁間は243cm（約8尺）で、桁間平均は約234cm（約7.7尺）を測る。柱穴掘方の平面形は、不整円形又は、楕円形を呈している。柱穴直径は37～53cmを、柱根径は約16cmを測る。

遺物は、弥生土器等が出土している。

SB06（Fig.23）　上面は削平を受けており、また、畝のため梁間の柱穴が削平されている。掘立柱建物SB07に切られている。略東西方向の建物で、撹乱壙のため梁間の柱穴が不明だが、梁行は2間、桁行は2間の規模と考えられる。梁間は345cm（約11.4尺）で、桁間平均は約217cm（約7.2尺）を測る。

柱穴掘方の平面形は、不整円形又は、楕円形を呈している。柱穴直径は29～31cmを、柱根径は約16cmを測る。

遺物は、弥生土器等が出土している。

SB07（Fig.23）　上面は削平を受けており、又、畝のため梁間の柱穴の一部が削平されている。掘立柱建物SB06を切っている。略南北方向の建物で、梁行は2間、桁行は3間の規模である。梁間平均は170cm（約5.6尺）で、桁間平均は約136cm（約4.5尺）を測る。柱穴掘方の平面形は、不整円形又は、楕円形を呈している。直径は30～37cmを、柱根径は14～18cmを測る。

遺物は、出土していない。

SB08（Fig.24）　上面は削平を受けており、又、畝のため一部の柱穴が削平されている。掘立柱建物SB06・07と切り合い関係にある。略東西方向の建物で、梁行は2間又は、3間、桁行は2間もしくは5間の規模と考えられる。梁間平均は189cm（約6.2尺）で、桁間平均は約148cm（約4.9尺）を測る。柱穴掘方の平面形は、不整円形又は、楕円形を呈している。柱穴直径は28～30cmを、柱根径は18cmを測る。

遺物は、出土していない。

SB09（Fig.24）　上面は削平を受けており、又、畝のため一部の柱穴が削平されている。掘立柱建物SB10と切り合い関係にある。略東西方向の建物で、梁行の柱穴を欠いている。梁行は1間もしくは2間、桁行は2間の規模である。梁間平均は197cm（約6.5尺）で、桁間平均は233cm（約7.7尺）を測る。柱穴掘方の平面形は、不整円形又は、楕円形を呈している。柱穴直径は31～49cmを、柱根径は16cmを測る。

遺物は、弥生土器が出土している。

SB10（Fig.24）　上面は削平を受けており、又、畝のため柱穴の一部を欠いている。掘立柱建物SB09と切り合い関係にある。略南北方向の建物で、梁行2間、桁行2間の規模であるが、柱の間隔に規則性がない。梁間平均は180cm（約5.9尺）で、桁間平均は196cm（約6.5尺）を測る。柱穴掘方の平面形は、不整円形又は、楕円形を呈している。柱穴直径は35～48cmを、柱根径は14～18cmを測る。

遺物は、出土していない。

SB11（Fig.25）　上面は削平を受けている。掘立柱建物SB12と切り合い関係にある。略南北方向の建物で、梁行は1間、桁行は3間の規模である。梁間は254cm（約8.4尺）で、桁間平均は138cm（約4.6尺）を測る。柱穴掘方の平面形は、不整円形又は、楕円形を呈している。柱穴直径は26～37cmを、柱根径は14～18cmを測る。

遺物は、出土していない。

SB12（Fig.25）　調査区東側の境界地に位置している。上面は削平を受けており、又、畝のため柱穴の一部を欠いている。掘立柱建物SB11と切り合い関係にある。略南北方向の建物で、梁行1間、桁行3間の規模と考えられる。梁間は278cm（約9.1尺）で、桁間平均は約123cm（約4.0尺）を測る。柱穴掘方の平面形は、不整円形又は、楕円形を呈している。柱穴直径は35～43cmを、柱根径は12～18

cmを測る。

遺物は、弥生土器が出土している。

SB13（Fig.25）　調査区東側に位置している。上面は削平を受けており、畝のため一部の柱穴を欠いている。掘立柱建物SB09・10と切り合い関係にある。略南北方向の建物で、梁行1間、桁行3間の規模と考えられる。梁間は250cm（約8.3尺）で、桁間平均は約136cm（約4.6尺）を測る。柱穴掘方の平面形は、不整円形又は、楕円形を呈している。柱穴直径は30～42cmを、柱根径は10～17cmを測る。

遺物は、弥生土器が出土している。

Tab. 1　第80次調査 掘立柱建物一覧表

（1尺＝30.3cm）

遺構名	規模	桁行		梁行		方位	床面積	柱穴状態					出土遺物	備考
		実長（尺）	柱間寸法（尺）	実長（尺）	柱間寸法（尺）		㎡	pit数	深さ	長径	短径	柱根径		
SB01	1×2	454(15.0)	271(8.9) 183(6.0)	415(23.7)	－	N18°E	18.8	6	5～30	51～64	44～55	14～20	弥生土器	
SB02	2×3	529(17.5)	174(5.7) 190(6.3) 165(5.4)	356(11.7)	171(5.6) 185(6.1)	N1°E	18.8	10	9～36	40～57	34～45	16～18	弥生土器	P6・P8(SP57・59)より出土 貯蔵穴SU08を切る
SB03	2×2	537(17.7)	268(8.9) 269(8.9)	433(14.3)	204(6.7) 229(7.6)	N65°W	23.3	8	6～36	30～51	27～48	14～16	なし	
SB04	1×2	428(14.1)	223(7.4) 205(6.8)	223(7.4)	－	W8°N	9.7	6	10～67.6	30～40	26～36	16	なし	掘立柱建物SB05に切られる
SB05	1×2	467(15.4)	223(7.4) 244(8.1)	243(8.0)	－	N17°E	11.3	6	10～59	37～53	36～42	16	弥生土器	P37より出土 掘立柱建物SB04を切る
SB06	2×2?	433(14.3)	210(6.9) 223(7.4)	345(11.4)	－	N22°E	14.9	6＋α	15～29	29～31	26～28	16	弥生土器	P51より出土 掘立柱建物SB07に切られる
SB07	2×3	409(13.5)	106(3.5) 142(4.7) 161(5.3)	340(11.2)	180(5.9) 160(5.3)	W15°N	13.9	9＋α	14～28	30～37	25～30	14～18	なし	掘立柱建物SB06を切る
SB08	2×4?	593(19.5)	113(3.7) 186(6.1) 181(6.0) 113(3.7)	378(12.4)	194(6.4) 184(6.0)	N85°W	22.1	8＋α	6～17	28～30	21～28	18	なし	掘立柱建物SB06・07と切り合う
SB09	2×2	466(15.4)	177(5.8) 289(9.5)	394(13.0)	240(7.9) 154(5.1)	N16°E	18.4	7＋α	6～30	31～49	26～37	16	弥生土器	P13・17より出土 掘立柱建物SB10・13と切り合う
SB10	2×2	398(13.1)	193(6.4) 205(6.8)	360(11.9)	166(5.5) 194(6.4)	N31°E	14.1	8	7～25	35～48	24～33	14～18	なし	掘立柱建物SB09・13と切り合う
SB11	1×3?	414(13.7)	120(4.0) 127(4.2) 167(5.5)	254(8.4)	－	N11°W	10.5	7	14～23	26～37	24～30	14～18	なし	掘立柱建物SB12と切り合う
SB12	1×3	370(12.2)	106(3.5) 106(3.5) 158(5.2)	278(9.1)	－	N85°E	9.7	8	6～30	35～43	30～41	12～18	弥生土器	P7より出土 掘立柱建物SB11と切り合う
SB13	1×2	410(13.5)	130(4.3) 130(4.3) 150(5.0)	250(8.3)	134(4.4) 116(3.8)	N33°W	10.3	6	6～21	30～42	27～36	10～17	弥生土器	P14より出土 掘立柱建物SB09・10と切り合う

(11) 溝（SD）

調査区の東側において略南北方向の浅い小溝が３条存在した。出土遺物などから古墳時代から中世の遺構と考えられる。溝SD02・03は、共に南北方向に平行して走っており、道路の側溝とも考えられる。

SD01（Fig.27）　調査区の東側境界地に位置しているため、全体形は不明であるが、古墳の周溝状を呈している。削平が著しい。南北方向に環状に巡る溝で、現存長は約4.55mまでを確認した。溝幅は70～130cm、深さは８～11.5cmを測る。溝の断面形は浅いレンズ状を呈し、溝底は南から北方向に下っている。

覆土は、茶褐色粘質土から黒色粘質土を主体としている。

遺物は、覆土から須恵器甕、瓦器椀、中国青磁・陶器が出土しており、古墳時代から中世までの遺構と考えられる。

SD02（Fig.27）　調査区の東側に位置しており、溝SD03に平行している。火葬墓SX02と切り合い関係にあるが、SX02が後出する。南側境界地から北東側に延びる溝で、北東側は削平を受け消滅している。溝の断面形は逆梯形状を呈している。現存長は4.75m、上面の最大幅は約64cm、底面の幅は約25cmを測る。深さは４～６cmを測り、溝底は南方向にわずかに低くなっている。底面は凸凹しており流水が有ったことを示している。

覆土は、茶褐色粘質土を主体としている。

遺物は、出土していない。

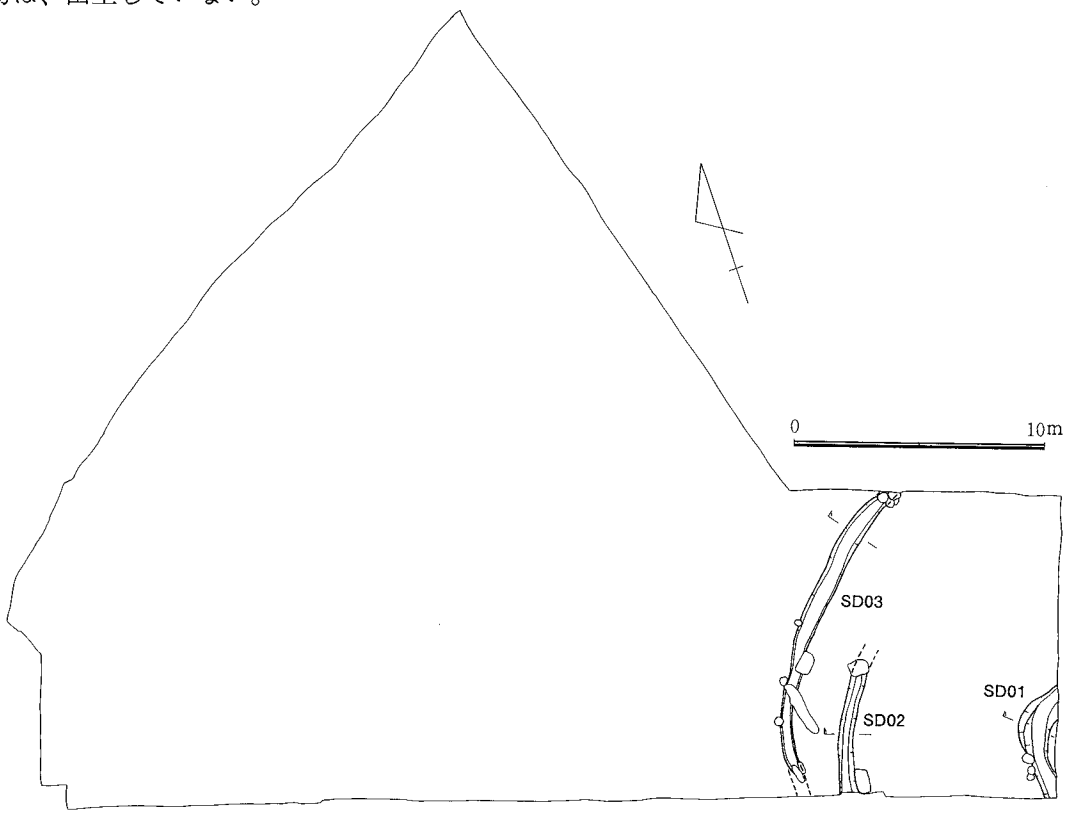
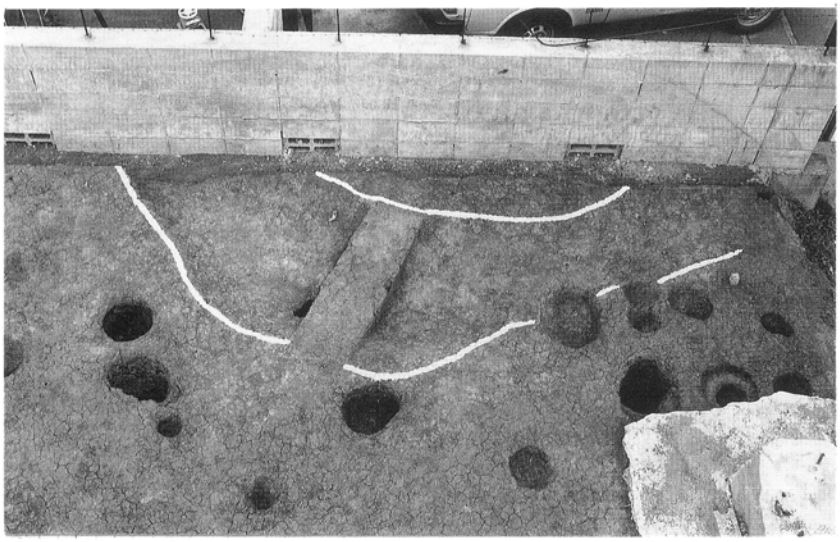
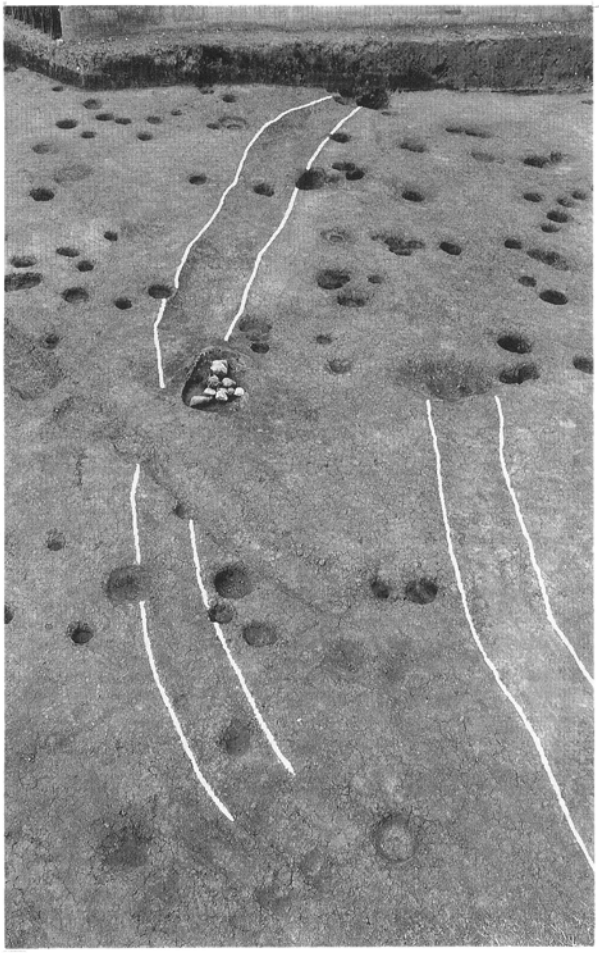


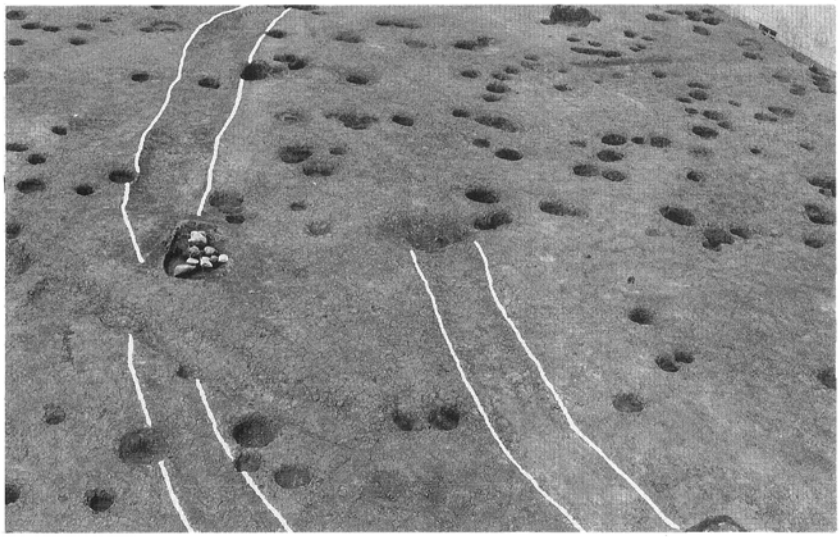
Fig. 26　第80次調査 溝配置図（縮尺1／300）



溝SD01（北西から）



溝SD03（南西から）



溝SD03・02（南西から）

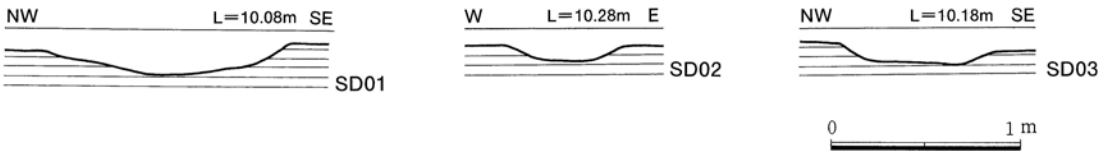


Fig. 27　溝SD01～03断面実測図（縮尺1／40）

SD03（Fig.27）　調査区の東側に位置しており、溝SD02とは平行した位置関係にある。更に火葬墓SX03と切り合い関係にある。北東側境界地から南側に延びる溝で、南側は削平を受け消滅している。溝の断面形は逆梯形状を呈している。現存長は11.6m、上面の最大幅は約85㎝、底面の幅は約50㎝を測る。深さ2.8～10㎝を測り、溝底は、南から北東方向に低くなっている。底面は凸凹しており流水

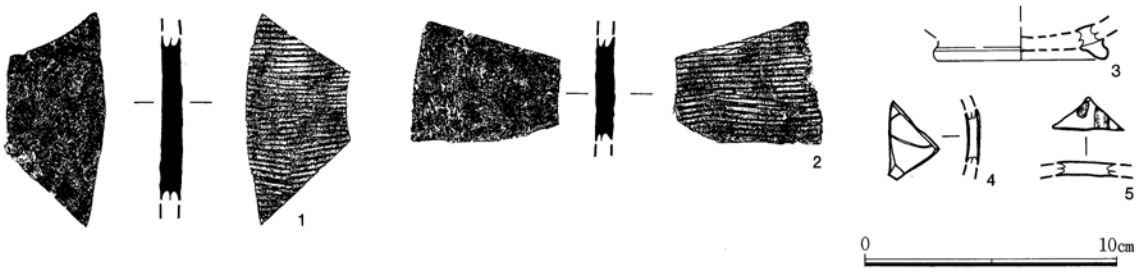
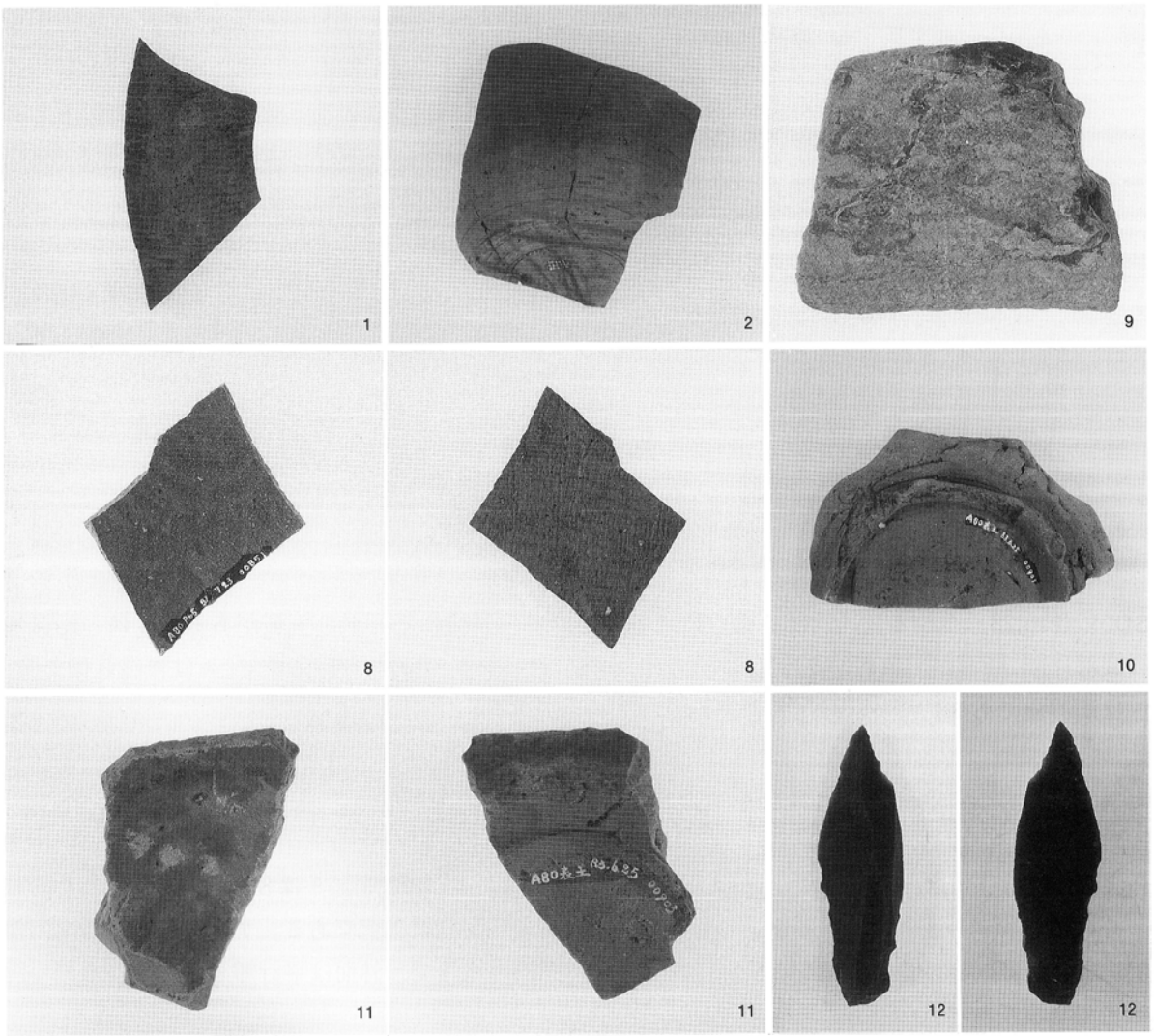


Fig. 28　溝SD01出土遺物実測図（縮尺1／3）



溝SD01、Pit、表土出土遺物　※数字は、実測図の番号に一致する。

が有った事を示している。

覆土は、茶褐色粘質土を主体としている。

遺物は、出土していない。

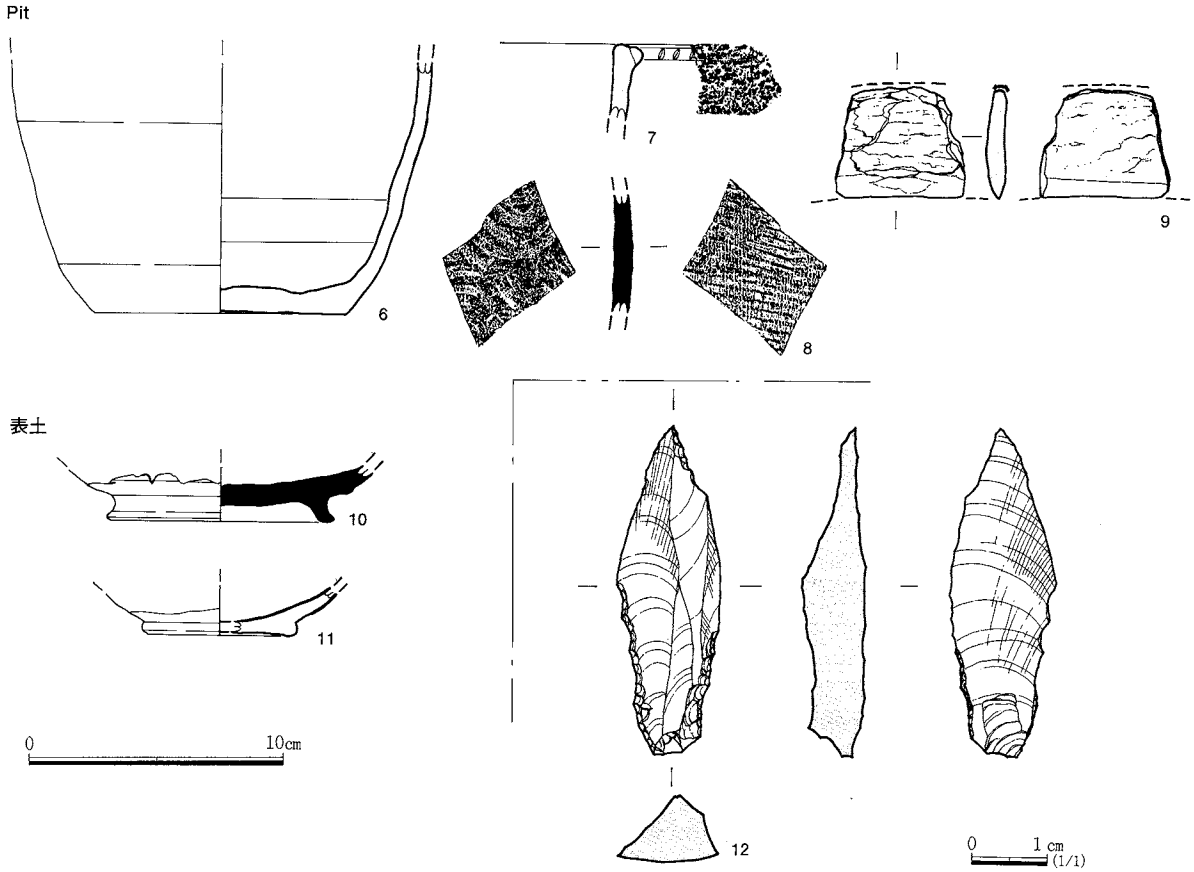


Fig. 29　Pit、表土出土遺物実測図（縮尺1／1・1／3）

(12)　溝出土遺物（Fig. 28）

SD01（Fig.28－1～5）　1・2は、須恵器の甕片で、外面に平行タタキ痕がある。3は、瓦器椀の底部片で、断面が三角形の高台を貼り付けている。4・5は、中国製陶磁器片で、4は青磁草花文碗、5は陶器盤である。

(13)　Pit（SP）、表土出土遺物（Fig. 29）

Pit出土遺物（Fig.29－6～9）　6はSP32、7はSP47、8はSP65、9はSP41からの出土である。

6は須恵器壷の底部で、平底を呈している。内外面は回転ヨコナデである。7は突帯文土器の口縁部片で、外面端部に刻目突帯を有している。8は須恵器の甕片で、外面は平行叩き、内面には同心円の当て具痕がある。

9は石鎌の弯曲部の破片で、基部と先端を欠く。刃部は厚みをもち、両刃である。背部の調整は風化のため不明。全体に表面の風化剝離が著しい。石材は堆積岩である。

表土出土遺物（Fig.29－10～12）　10は須恵器の坏で、外に張り出した高台がつく。11は中国越州窯系の碗で、平底を呈している。釉は体部外面下位まで施されている。

12は黒曜石製のポイントで、横断面は三角形状を呈している。

3．まとめ

今回の発掘調査では、弥生時代から戦国時代までの遺構・遺物を検出した。当該地の周辺地域は小田部地区の北に分岐する舌状丘稜の基部に相当するため、比較的広く且つ、平坦な台地を形成している。

当該調査で検出した遺構は、大別するとⅠ期は弥生時代、Ⅱ期は平安～鎌倉時代、Ⅲ期は戦国時代となる。

Ⅰ期は、弥生時代前期の遺構で、竪穴住居跡SC01・02・05・07、貯蔵穴SU04・06・08・09・10・11・12が相当する。

竪穴住居跡SC01・02は、住居跡の中央に設けた土壙SK01の両側に棟持柱を持っており、この住居跡の平面構造は、韓国の松菊里遺跡発見の竪穴住居跡に共通するものである。時期については出土遺物が少なく、又、破片のため確定できないが、SC02は弥生前期初頭に遡ることも考えられる。この松菊里型といわれる竪穴住居跡は、有田・小田部においては現在のところ有田地区の第78・100次調査、小田部地区の第48・136・156次調査の計５ヶ所で発見されている。特に小田部地区においては半径150ｍの範囲内にこの類型の住居跡が位置しており、しかも主柱が４本から５本へと増え、それに併せて床面積が拡大する等の変化もみられる。

これらの松菊里型住居跡に伴う貯蔵穴には、平面形が隅丸長方形と不整円形の２種類があると考えられる。有田遺跡における弥生時代の貯蔵穴は、現在のところ６ヶ所で発見されている。有田地区では、第３次調査で隅丸長方形の貯蔵穴を２基、第66次調査（九州大学２次調査）では、断面形がフラスコ状の貯蔵穴２基、第100次調査では長方形貯蔵穴４基とフラスコ形の円形貯蔵穴１基が存在していた。第78次調査では、隅丸長方形の貯蔵穴５基、断面形がフラスコ形の貯蔵穴２基を検出した。小田部地区では第48次調査で報告した長方形住居跡の内、長さ２ｍ前後の住居跡は、貯蔵穴と考えられる。又、第121次調査では断面形がフラスコ形の貯蔵穴２基を検出している。

これらの貯蔵穴の位置関係をみると有田地区では大地中央部の平坦地を環状に配置されている状況を呈している。小田部地区では、狭長な谷に挟まれた狭い範囲に存在することが認められる。

又、長方形プランの貯蔵穴には、その規模に大小のバリエーションがあって、長さが３ｍ近いものも存在するので、第48次調査で報告したように住居跡として検討する必要があると考えられる。

貯蔵穴の時期については、長方形プランの貯蔵穴SU04・06は、出土した甕・壷等から前期初頭に位置付けられるが、他の貯蔵穴は若干後出する可能性がある。断面形がフラスコ形の貯蔵穴は、SU11・12から出土した甕や、第121次調査SK08出土の甕・壷より、概ね初頭から前半に至る時期幅が考えられる。こうした点から、これらの２種類の貯蔵穴は、弥生時代の初頭から同時に存在、或いは若干前後するものと思われるが、機能の違いにより使い分けされてたことも検討しなければならない。

Ⅱ期は、平安～鎌倉時代で、これには土壙墓SX01が相当する。従来から有田・小田部地域ではこの時期の土壙墓が何ヶ所か検出されており、特に、有田地区の第78・77次調査周辺では、土壙墓等の墓跡が集中しており、糸切り底の土師器坏や中国製白磁碗や龍泉窯系青磁碗を副葬した土壙墓を８基発見している。これら土壙墓の時期は、出土遺物により12世紀から13世紀後半までの幅が推定できる。小田部地区においては、この時期の土壙墓等の発見例は少なく、第154次調査において木棺墓を発見しているにすぎない。

土壙墓SX01からは、副葬された土師器坏３点と龍泉窯系鎬蓮弁文碗が２点出土しているが、土師器の皿が糸切り底であることなどから、時期は12世紀後半から13世紀前半が推定できる。

Ⅲ期は、戦国時代で、火葬墓SX02・03が相当する。墓壙底部に敷石を施した火葬墓は、有田・小田部地区においては第30次調査（１基)、第154次調査（１基)、第170次調査（２基）から、同様な墓壙底面の敷石構造を有した火葬墓を合わせて４基発見している。

又、干隈遺跡では、15基の火葬土壙墓を発見しており、この内、墓壙底面に配石をもつものは４基存在する。干隈遺跡の火壙墓の時期は、出土した土師器坏・皿より、概ね15世紀後半の時期と考えられる。

当該遺跡の火葬墓SX01の時期については、出土遺物がないため判断に苦しむが、西日本において出現する状況から大略16世紀代としておきたい。

以上、今回の調査で検出した遺構についてはⅠ期～Ⅲ期に概ね分類したが、狭い範囲の調査のため遺構の規模や時期・性格に不明確な点も多く残した。今後の発掘調査結果を待って再度検討を行いたい。

参考文献

有田遺跡第30次調査	「有田・小田部 第５集」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第110集	福岡市教育委員会	1984年
有田遺跡第48次調査	「有田・小田部 第５集」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第110集	福岡市教育委員会	1984年
有田遺跡第77次調査	「有田・小田部 第24集」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第471集	福岡市教育委員会	1996年
有田遺跡第78次調査	「有田・小田部 第29集」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第538集	福岡市教育委員会	1997年
有田遺跡第100次調査	「有田・小田部 第10集」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第212集	福岡市教育委員会	1989年
有田遺跡第121次調査	「有田・小田部 第12集」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第264集	福岡市教育委員会	1991年
有田遺跡第138次調査	「有田・小田部 第16集」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第308集	福岡市教育委員会	1992年
有田遺跡第154次調査	「有田・小田部 第15集」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第307集	福岡市教育委員会	1992年
有田遺跡第170次調査	「有田・小田部 第26集」	福岡市埋蔵文化財調査報告書第473集	福岡市教育委員会	1996年

Fig. 30　有田遺跡第４・48・80次調査 遺構配置図（縮尺1／600）

Tab. 2　第80次調査 遺構一覧表

（単位：cm）

遺構名	旧遺構名	種類	形態		現存長	現存幅	深さ	出土遺物	時期	備考
			平面形	断面形						
SC01	J1	住居跡	不整円形	逆梯形	473～498	－	20	突帯文土器甕、弥生土器壺・甕・鉢・高坏、黒曜石、炭、骨。	弥生時代	SU10に切られる。主柱4本、側柱5本＋α、中央部に土壙。
SC02	J2	住居跡	不整円形	逆梯形	720	－	42	突帯文土器甕、弥生土器甕・壺・鉢、石錘、黒曜石、炭。	弥生時代	東側境界地にある。主柱4本、中央部に土壙。
SC05	D5	住居跡	隅丸長方形	逆梯形	210＋α	184	16	弥生土器壺、須恵器坏、陶器片。	弥生時代	主柱2本、中央部に焼土面。
SC07	D7	住居跡	隅丸長方形	逆梯形	302	236	24	弥生土器甕・壺、黒曜石。	弥生時代	主柱4本。
SX01	D1	土壙墓	隅丸長方形	逆梯形	120	60	35	土師器糸切り皿3点、中国龍泉窯系青磁碗2点。	平安時代末～鎌倉	
SX02	D2	火葬墓	隅丸長方形	逆梯形	97	53	18	土師器片、須恵器片、砥石、黒曜石、鉄滓、炭、人骨。	16C代	溝SD02を切る。
SX03	D3	火葬墓	隅丸長方形	逆梯形	90	62	12	土師器片、炭、人骨、焼土塊。	平安時代末～鎌倉	溝SD03を切る。
SU04	D4	貯蔵穴	隅丸長方形	箱形	200	170	55	突帯文土器甕・鉢、弥生土器甕・壺、朝鮮系須恵器片。	弥生時代前期	
SU06	D6	貯蔵穴	隅丸方形	箱形	200	122	55	弥生土器甕・壺、石庖丁、黒曜石。	弥生時代前期	
SU08	D8	貯蔵穴	隅丸長方形	逆梯形	151	130	18	弥生土器甕、黒曜石、炭。	弥生時代前期	SB02と切り合う。
SU09	D9	土壙	隅丸長方形	逆梯形	225	183	30	突帯文土器甕、弥生土器甕、敲石、黒曜石。	弥生時代前期	境界地にある。
SU10	D10	貯蔵穴	不整隅丸長方形	逆梯形	205	160	54	弥生土器甕・壺、石庖丁、石斧、砥石、黒曜石、炭。	弥生時代前期	SC01を切る。
SU11	D11	貯蔵穴	不整円形	フラスコ状	(上部径) 49	(下部径) 112	77	弥生土器甕・壺、石斧未製品、黒曜石。	弥生時代	
SU12	D12	貯蔵穴	不整円形	フラスコ状	(上部径) 38	(下部径) 124	95	突帯文土器甕、弥生土器甕・壺・鉢、黒曜石。	弥生時代前期	
SK13	D13	土壙	隅丸方形	逆梯形	115＋α	76＋α	3	なし。	弥生時代	SC01に切られる。
SD01	M1	溝	－	レンズ状	455＋α	70～130	8～11.5	弥生土器、須恵器甕・壺、中国青磁・陶器盤、瓦器椀。	古墳時代～中世	境界地にある。
SD02	M2	溝	－	逆梯形	475＋α	57～64	4～6	なし。	古墳時代～中世	火葬墓SX02に切られる。
SD03	M3	溝	－	逆梯形	1160＋α	47～85	2.8～10	なし。	古墳時代～中世	火葬墓SX03に切られる。

Tab. 3　第80次調査 遺物一覧表

（単位：cm）

挿図番号	遺物番号	出土遺構	種類	器種	口径	底径（高台径）	器高（現存高）	形態の特徴・調整・文様	施釉・色調・素地等	備　考
9	1	SC01 上層	突帯文土器	甕	—	—	(3.1)	刻目突帯口縁部で、突帯は低い。	胎土に1～2mmの微砂粒を含む。焼成良好。外面は茶褐色、内面は淡茶褐色。	内外面磨滅
9	2	SC01	弥生土器	甕	—	—	(3.0)	口縁部はやや肥厚し、如意形に外反する。	胎土に1～2mmの砂粒を多く含み、粗い。焼成良好。内外面は黄褐色。	内外面磨滅
9	3	SC01 覆土	弥生土器	甕	—	—	(2.7)	口縁部は如意形で、緩やかに外反する。	胎土に1～2mmの砂粒を含む。焼成良好。内外面は茶褐色。	内外面磨滅
9	4	SC01	弥生土器	甕	—	—	(4.8)	口縁部は如意形で、緩やかに外反する。	胎土に1～2mmの砂粒を含み、粗い。焼成良好。内外面は黄褐色。	内外面磨滅
9	5	SC01	弥生土器	甕	—	—	(2.8)	逆L字形の小さな口縁部。	胎土に微砂を含む。焼成良好。内外面は淡黄茶色。	内外面磨滅
9	6	SC01	弥生土器	甕	—	—	(2.2)	平底の底部片である。外面ナデ調整。黒斑あり。	胎土に1～2mmの砂粒を含む。焼成良好。内外面は淡茶黄色。底部に煤付着。	内面磨滅
9	7	SC01	弥生土器	甕	8.0	—	(2.2)	平底の底部片である。外面ナデ調整。	胎土に1～2mmの砂粒を含む。焼成良好。内外面は茶灰色。	内外面磨滅
9	8	SC01	弥生土器	壺	—	6.0	2.6	小型壺の底部片である。	胎土に微砂を多く含む。焼成良好。内外面は淡茶褐色。	内外面磨滅
9	9	SC01 覆土	弥生土器	壺	—	7.2	(2.4)	やや上げ底の底部片。外面ナデ調整。黒斑あり。内面は指圧痕が残る。	胎土に1～2mmの砂粒を多く含み、粗い。焼成良好。内外面は茶灰色。	
9	10	SC01	弥生土器	壺	—	—	(6.7)	底部片で、やや上げ底である。内外面ナデ調整。	胎土に微砂を含み、粗い。焼成ややあまい。外面は茶褐色、内面は淡茶褐色。	
9	11	SC01	弥生土器	壺	—	—	—	壺の肩部片。外面にはヘラ描きの有軸羽状文。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整。	胎土に1～2mmの白い砂粒を含む。焼成良好。内外面は茶褐色。	
9	12	SC01 覆土	弥生土器	高坏	—	—	—	鉢状の坏部片。底部と体部の境は強い屈折。口縁部は若干内傾する。内面はナデ調整。	胎土に1～2mmの砂粒を多く含む。焼成良好。内外面は茶褐色。	内外面磨滅
10	13	SC02	突帯文土器	甕	—	—	(1.7)	口縁端部に刻目突帯。	胎土に微砂を含む。焼成良好。内外面は淡茶色。	内外面磨滅
10	14	SC02 上層	弥生土器	甕	—	—	(4.7)	如意形口縁部片で、端部に刻目を施す。外面はタテハケ調整。	胎土に1～2mmの砂粒を多く含む。焼成良好。外面は暗茶褐色、内面は茶褐色。	内面磨滅
10	15	SC02 上層	弥生土器	甕	—	—	(2.6)	如意形口縁部片。口縁端部に刻目。内外面はナデ調整。	胎土に微砂を含む。焼成良好。外面は茶灰色、内面は茶褐色。	
10	16	SC02 床面	弥生土器	甕	—	—	(2.6)	口縁部は緩く小さく外反。端部は肥厚し、刻目を施す。内外面はナデ調整。	胎土に微砂を少し含む。焼成良好。内外面は淡茶褐色。	
10	17	SC02 上層	弥生土器	甕	—	—	(3.8)	如意形口縁部片。口縁端部に刻目。外面はタテハケ調整、内面はナデ調整。	胎土に微砂を含む。焼成良好。外面は暗茶褐色、内面は淡茶褐色。	
10	18	SC02 上層	弥生土器	甕	—	—	(1.6)	口縁部は、くの字状に小さく外反。端部に刻目。内外面はナデ調整。	胎土に微妙を含む。焼成良好。外面は暗灰色、内面は淡茶褐色。	
10	19	SC02 床面	弥生土器	甕	—	—	(2.0)	口縁部は小さく強く外反。端部に刻目。	胎土に微砂を含む。焼成良好。内外面は淡茶色。	内外面磨滅
10	20	SC02 上層	弥生土器	甕	—	—	(2.5)	口縁部は如意形に外反し、端部に刻目突帯を貼り付ける。口唇部に沈線状の凹み有り。内外面はナデ調整。	胎土に微砂を少し含む。焼成良好。内外面は茶褐色。	
10	21	SC02	弥生土器	壺	—	—	(2.1)	口縁部は緩やかに外反する。外面はナデ調整。	胎土に微砂を多く含む。焼成やや軟。内外面は茶灰色。	内面磨滅
10	22	SC02 上層	弥生土器	壺	—	—	(1.8)	小型壺の口縁部片。頸部と口縁の境に段をもつ。内面はナデ調整。	胎土に1～2mmの砂粒を含む。焼成良好。内外面は明褐色。	内外面磨滅
10	23	SC02	弥生土器	壺	—	—	(3.0)	大型壺の口縁部片。口縁部の内面上位及び、外面はヨコナデ調整。内面の下位は5本以上のヨコハケ調整。	胎土に1～2mmの砂粒を含み、粗い。焼成良好。外面は淡茶色、内面は淡褐色。内外面に丹を施す。	二次火を受ける。
10	24	SC02 上層	弥生土器	壺	—	—	(3.8)	大型壺の口縁部片。端部に刻目。頸部との境に段をもつ。外面はヘラミガキ調整、内面はヨコハケ調整。	胎土に微砂を含む。焼成良好。内外面は茶褐色。	
10	25	SC02 上層	弥生土器	壺	—	—	(4.1)	大型壺の口縁部片。口縁は外反し、端部は平坦。内外面はヘラミガキ調整。外面は体部との境に段をもつ。	胎土に微砂を含む。焼成良好。内外面は淡茶褐色。	
10	26	SC02 床面	弥生土器	壺	18.6	—	(4.4)	如意形口縁部は肥厚。頸部と口縁部の境に段をもつ。外面ナデ調整。	胎土に白い微砂を含む。焼成良好。内外面は明褐色。	内面磨滅

（単位：cm）

挿図番号	遺物番号	出土遺構	種類	器種	口径	底径（高台径）	器高（現存高）	形態の特徴・調整・文様	施釉・色調・素地等	備　考
10	27	SC02 上層	弥生土器	高坏	－	－	(5.5)	体部は丸味をもち、口縁部はやや内傾する。端部は丸い。	胎土に1～2mm砂粒を多く含む。焼成良好。外面は茶褐色、内面は淡茶褐色。	内外面磨滅
10	28	SC02	弥生土器	甕	－	7.0	(1.9)	平底の底部片。	胎土に微砂を含む。焼成良好。淡茶褐色。外面に煤付着。	内外面磨滅
10	29	SC02	弥生土器	甕	－	7.0	(2.8)	平底の底部片で、底は厚い。	胎土に1～2mmの砂粒を含み、粗い。焼成やや軟。暗茶灰色～茶褐色。	内外面磨滅
10	30	SC02 上層	弥生土器	甕	－	(8.0)	(2.8)	平底の底部片。内外面はナデ調整。	胎土に1～2mmの砂粒を多く含む。焼成良好。外面は淡茶褐色、内面は暗茶灰色。	
10	31	SC02 上層	弥生土器	壺	－	7.5	(2.8)	平底の底部片。内面はナデ調整。	胎土に微砂を含み、粗い。焼成良好。淡茶褐色。	外面磨滅
10	36	SC05	弥生土器	壺	－	－	－	肩部片。外面の胴部と頸部の境に1条の沈線を施す。	胎土に1～2mmの砂粒を多く含む。焼成良好。内外面は淡茶褐色。	内面磨滅
10	37	SC05	須恵器	坏	－	－	(2.6)	体部は丸味をもち、口縁端部はやや尖がり気味である。内外面はナデ調整。	胎土は精緻。焼成良好。内外面は淡灰茶色。	二次的な流れ込み品
10	38	SC05	陶器	壺	－	－	(1.0)	盤口壷の口縁部の破片。八の字形に開く。内外面は施釉。	素地は茶褐色で、精緻。焼成良好。灰白色釉。	二次的流れ込み品。唐津系か
10	39	SC07	弥生土器	甕	－	－	(1.9)	口縁部は如意形に外反し、端部は丸味をもつ。内外面はナデ調整。	胎土に1～3mmの砂粒を含む。焼成良好。内外面は暗茶灰色。	
10	40	SC07	弥生土器	甕	－	8.2	(2.7)	平底の底部片。内面はナデ調整、外面はタテハケ調整。	胎土に1～2mmの砂粒を含む。焼成良好。外面は茶褐色、内面は茶灰色。	
10	41	SC07	弥生土器	壺	－	9.8	(4.1)	外面はヘラミガキ調整。下位には強い指頭圧痕がある。内面は丁寧なナデ調整。	胎土に1～3mmの砂粒を多く含む。焼成良好。内外面は暗茶灰色。	
16	1	SU04	突帯文土器	深鉢	－	－	(2.9)	口縁部と頸部の境に強い稜をもち、口縁部は内傾気味に外反する。内外面はナデ調整。	胎土に1～2mmの砂粒を多く含む。焼成良好。内外面は淡茶褐色。	内外面磨滅
16	2	SU04	突帯文土器	甕	16.1	－	(3.9)	外面端部に刻目突帯。外面はヨコ方向の条痕及び、指頭圧痕が残る。内面はナデ調整。	胎土に微砂を少し含む。焼成良好。外面は暗茶灰色、内面は淡茶色。	
16	3	SU04	弥生土器	壺	－	－	(2.8)	口縁部は如意形に外反。端部は若干つまみ出している。	胎土に1～2mmの砂粒を多く含む。焼成やや不良。内外面は明茶褐色。	内外面磨滅
16	4	SC04	突帯文土器	浅鉢	－	－	(2.1)	平底の底部片。端部が外に張り出す。	胎土に1～2mmの砂粒を含む。焼成良好。内外面は灰茶色。	内外面磨滅
16	5	SU04	弥生土器	壺	－	－	－	肩部片で、外面に貝殻腹縁による重弧文。内面はナデ調整。	胎土に1～2mmの砂粒を少し含む。焼成良好。外面は淡茶色、内面は灰色。	内外面磨滅
16	6	SU04	須恵器	壺	－	－	－	肩部片。内外面は水引きによるナデ調整。	胎土は精緻。焼成良好。外面は暗灰色。内面は灰色。	朝鮮系。二次的流入品
16	7	SU06	弥生土器	壺	(19.6)	－	(6.1)	口縁部。胴部下半を欠く。口縁部と頸部の境に段はない。内面ナデ調整。	胎土に1～2mmの砂粒を多く含み、粗い。焼成良好。内外面は茶褐色。	外面磨滅
16	8	SR06	弥生土器	壺	－	－	－	大型壺の肩部片。外面の肩部に2条のヘラ描き沈線。内面はナデ調整で、一部にナナメ方向のハケ調整。	胎土に微砂を多く含む。焼成良好。内外面は灰黄色。	外面磨滅
16	9	SU06 上層	弥生土器	壺	－	－	－	肩部片。上位に3条の沈線。その下位に1条の沈線を施す。この沈線間には斜行文をヘラ描きする。	胎土に1～3mmの砂粒を多く含む。焼成良好。内外面は淡茶灰色。	
16	10	SU06	弥生土器	甕	20.2	8.2	21.4～22.5	平底で、胴部は張らない。口縁部は如意形に外反する。内外面ナデ調整。	胎土に1～2mmの砂粒を多く含む。焼成やや不良。外面は茶褐色、内面は暗茶灰色。外面上位に煤付着。	
16	11	SU08	弥生土器	甕	－	－	(2.4)	平底の底部片。	胎土に1～2mmの砂粒を多く含み、粗い。焼成良好。外面は茶褐色、内面は茶灰色。	内外面磨滅
16	12	SU09	突帯文土器	甕	－	10.0	(5.3)	平底の底部片。端部は張り出すが、丸味をもつ。底部の厚みは薄い。内外面はナデ調整。	胎土に1～2mmの砂粒を多く含み、粗い。焼成良好。外面は茶褐色、内面は茶灰色。二次火を受ける。	
16	13	SU09	弥生土器	甕	22.4	－	(8.5)	くの字形の口縁部で、口縁部に浅い刻目。内外面はナデ調整。	胎土に1～2mmの砂粒を多く含む。焼成やや不良。外面は暗茶褐色、内面は暗灰色。	内面磨滅
16	15	SU10 下層	弥生土器	甕	23.0	－	(1.1)	口縁端部片。逆L字形口縁であろう。	胎土に1～2mmの砂粒を多く含み、粗い。焼成良好。内外面は黄茶色。一部に丹塗りの痕跡あり。	内外面磨滅
16	16	SU10 下層	弥生土器	壺	－	－	(4.5)	大型壺の口縁部片。内面はヨコハケ調整。	胎土に1～2mmの砂粒を多く含む。焼成やや不良。内外面は黄褐色。	外面磨滅
16	17	SU10 上層	弥生土器	壺	11.8	－	(3.7)	小型壺で、口縁部は如意形に外反する。口縁部は肥厚し、外面は頸部の境に段をもつ。	胎土に1～2mmの砂粒を多く含む。焼成良好。内外面は明茶褐色。	内外面磨滅

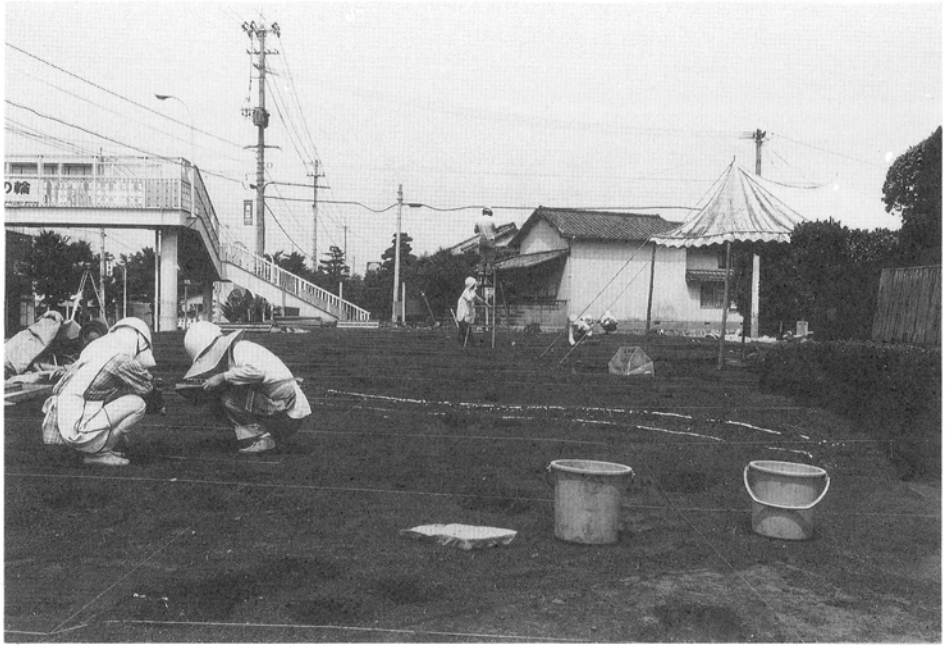
（単位：cm）

挿図番号	遺物番号	出土遺構	種類	器種	口径	底径（高台径）	器高（現存高）	形態の特徴・調整・文様	施釉・色調・素地等	備考
16	18	SU10下層	弥生土器	甕	—	—	(3.5)	平底の底部片。	胎土に1～2mmの砂粒を多く含む。焼成良好。外面は淡褐色。内面は茶褐色。	内外面磨滅
17	22	SU11覆土	弥生土器	甕	17.0	—	(10.5)	擬似口縁部片は如意形。胴部外面は細かいタテハケ調整。頸部内面には指頭圧痕。	胎土には2～3mmの砂粒を含む。焼成良好。内外面は暗茶褐色。	
17	23	SU11	弥生土器	甕	23.0	—	(14.3)	薄手の如意形口縁部。口縁端部に刻目。外面は11本単位のタテハケ調整。内面はナデ調整。	胎土に1～2mmの砂粒を多く含む。焼成良好。外面は暗茶灰色、内面は茶灰色。	
17	24	SU11	弥生土器	甕	28.2	—	(5.1)	口縁部は如意形。端部は平坦。胴部は張り、口縁部との境は内外面削り込み、段を形成する。口縁部内面はヨコハケ、外面はタテハケ調整。	胎土に砂粒を多く含み、粗い。焼成良好。外面は暗茶褐色、内面は暗茶褐色～暗灰色。	
17	25	SU11	弥生土器	甕	29.7	—	(18.1)	口縁部は肥厚し、如意形に外反。胴部との境は、外面に段をもつ。外面はタテハケ調整、内面はヨコハケ調整。	胎土に1～2mmの砂粒を多く含み、粗い。焼成やや軟、外面は黄褐色～明褐色、内面は暗褐色。	二次火を受ける。
17	26	SU11	弥生土器	壺	—	—	(2.0)	小型壺の口縁部片。口縁部は如意形に外反する。外面はナデ調整。	胎土に砂粒を多く含み、粗い。焼成不良。外面は暗茶褐色、内面は暗灰色。	内面磨滅
17	28	SU12覆土	突帯文土器	甕	—	—	(2.9)	端部外面に刻目突帯。内外面は粗い条痕。	胎土に白い微砂を含む。焼成良好。内外面は淡茶褐色。	
17	29	SU12	弥生土器	壺	—	—	(1.6)	口縁部を内側に粘土を張り付けて、肥厚させる。	胎土に微砂を少し含む。焼成良好。内外面は淡茶灰色。	内外面磨滅
17	30	SU12	弥生土器	壺	—	10.3	(2.9)	平底の底部片。	胎土に1～2mmの砂粒を多く含み、粗い。焼成良好。内外面は淡茶褐色。	
17	31	SU12床面上	弥生土器	壺	—	—	—	肩部片で、上位に3条のヘラ描き沈線、下位に重弧文。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整。	胎土に白い微砂を含む。焼成良好。内外面は明褐色。	
17	32	SU12	弥生土器	甕	—	—	(6.3)	口縁部は肥厚し、小さく外反。外面は胴部との境に強い段をもつ。口縁部内外面はヨコハケ調整。	胎土に1～3mmの砂粒を多く含む。焼成良好。内外面は淡茶褐色。	
20	1	SX01	土師器	皿	8.9	7.8	1.1	体部は余り開かない。糸切り底。外底部に弱い板状圧痕。	胎土に微砂をわずかに含む。焼成良好。内外面は淡茶灰色。	完形品
20	2	SX01	土師器	皿	8.8	6.6	1.4	糸切り底。外底部に板状圧痕。	胎土に微砂を含む。焼成良好。内外面は淡茶褐色。	
20	3	SX01	土師器	皿	9.4	7.2	1.0	体部は強く開く。糸切り底。外底部に板状圧痕。	胎土に微砂を含む。焼成良好。茶褐色。	完形品
20	4	SX01	中国青磁	碗	16.2	5.4	6.6	体部外面に複弁の鎬蓮弁文。外底部の削りは浅い。	素地は淡茶色で精緻。焼成良好。内外面に黄色味を帯びた灰緑色釉。	完形品。龍泉窯系
20	5	SX01	中国青磁	碗	16.3	5.8	7	体部外面に複弁の鎬蓮弁文。外底部の削りは浅い。	素地は淡灰色で精緻。焼成良好。内外面に緑灰色釉。	完形品。龍泉窯系
28	1	SD01	須恵器	甕	—	—	—	胴部片。外面に平行叩き痕。	胎土は精緻。焼成良好。内外面は灰茶色。	内面磨滅
28	2	SD01	須恵器	甕	—	—	—	胴部片。外面に平行叩き痕。	胎土は精微。焼成良好。内外面は灰茶色。	内面磨滅
28	3	SD01	瓦器	椀	—	(7.0)	(1.4)	高台部片。断面三角形状の高台は、外へ強く張る。	胎土は精緻。焼成良好。内外面は淡茶白色。	内面磨滅
28	4	SD01	中国青磁	碗	—	—	—	胴部片。内面に草花文。	素地は灰色で精緻。内外面に緑灰色の施釉。	
28	5	SD01	中国陶器	盤	—	—	—	底部片。	外面は露胎。	
29	6	SP32	須恵器	壺	—	10.0	(10.0)	内外面は水引きによるナデ調整。底部は平底。	胎土は精緻。焼成良好。外面は灰青色、内面は灰茶色。	
29	7	SP47	突帯文土器	甕	—	—	(3.0)	口縁部外面に刻目突帯。	胎土に白い微砂を含む。焼成良好。外面は茶灰色、内面は淡茶色。	内外面磨滅
29	8	SP65	須恵器	甕	—	—	—	胴部片。外面は平行叩き痕。内面に同心円の当て具痕。	胎土に砂粒を少し含む。精緻。焼成良好。外面は淡灰色、内面は暗灰青色。	
29	10	表土	須恵器	坏	—	(9.0)	(2.3)	高台は外側に強く張り出す。外面はナデ調整。	胎土は精緻。焼成良好。外面は灰色、内面は淡茶灰色。	内面磨滅
29	11	表土	中国青磁	碗	—	(6.2)	(2.0)	円盤貼状の高台。器壁は薄い。内面見込みに目痕。	素地は灰色で精緻。焼成良好。内外面にオリーブ釉。高台外底面は露胎。	越州窯系

Tab. 4　第80次調査 石製品一覧表

（単位：cm）

挿図番号	遺物番号	出土遺構	器　種	長（現存長）	幅（現存幅）	厚（現存厚）	重　量（g）	石　材	色　調	特　　徴
10	32	SC02上層	石　錘	(10.6)	7.6	2.3	302	砂岩	淡茶褐色	長方形状の扁平礫を利用。縄掛けのため、側辺の2ヶ所に抉りを入れる。
10	33	SC02	剥片石器	4.0	1.9	0.45	－	黒曜石	黒色	エンドスクレイパーか。縦長の剥片を利用。片方の側辺に自然面を残し、他の側辺を加工調整。
10	34	SC02上層	剥片石器	2.3	2.0	0.7	－	黒曜石	黒色	エンドスクレイパーかバブルを残した横長の厚みのある剥片。厚みのある方を両面より加工調整。
10	35	SC02上層	剥片石器	2.4	1.1	0.3	－	黒曜石	黒色	ナイフ形。縦長の剥片を利用。基部と片方の側辺に加工調整。
16	14	SU09上層	敲　石	5.3	4.6	3.5	140	玄武岩	灰色	平面形は楕円形状で、厚手の剥片利用。左側辺は自然面残す。
16	19	SU10下層	石庖丁	(5.1)	(2.8)	0.5	9	堆積岩	茶灰色	大半を欠く。細身の石庖丁で、両刃。表面風化剥離している。
16	20	SU10下層	磨製石斧（未製品）	(5.1)	(3.2)	1.5	－	玄武岩	濃灰色	磨製石斧の未製品で、基部破片である。
16	21	SU10底	砥　石	13.1	8.4	6.0	960	砂岩	淡茶色	平面形は長方形状。全体を面取り整形する。4面を砥面として利用。二次火受ける。
17	27	SU11	石斧?（未製品）	9.7	7.5	3.8	334	玄武岩	灰色	横長剥片を利用。縁辺を剥離調整する。横断面形は菱形状を呈する。
20	6	SX02	砥　石	(8.6)	(6.1)	(7.8)	344	硬質砂岩	暗灰褐色	大型の砥石の破片である。2面を砥面として利用。
29	9	SP41	石　鏃	(5.2)	(4.3)	0.75	28	堆積岩	茶灰色	弯曲部の破片。基部と先端を欠く。両刃である。表面風化が著しい。
29	12	表　土	ポイント	4.3	1.4	0.9	4	黒曜石	暗灰色	ポイント。縦長の剥片を利用。断面形は三角形をなす。



実測作業風景

有田・小田部

第30集

福岡市埋蔵文化財調査報告書第547集

1998年（平成10年）３月31日

編集・発行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神一丁目８－１

電話（092）711－4667

印　　刷　正光印刷株式会社

福岡市西区周船寺三丁目28－１

電話（092）806－5708